

五所川原市埋蔵文化財調査報告書 第22集

# 隠川(2)外遺跡 発掘調査報告書

— 県営前田野目農免農道整備事業に伴う発掘調査報告書 —

五所川原市教育委員会

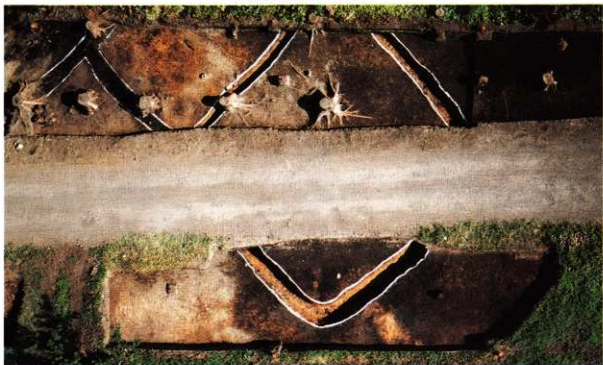
五所川原市埋蔵文化財発掘調査報告書 第22集

# 隠川(2)外遺跡 発掘調査報告書

— 県営前田野目農免農道整備事業に伴う発掘調査報告書 —

五所川原市教育委員会

第3号方形溝状遺構



遺跡遺構





須惠器



土師器



## 序

五所川原市前田野目地区は、青森県唯一にして日本最北の須恵器窯跡群が存在し、遺跡の密度も非常に高い地域であります。五所川原市教育委員会では、県営前田野目農免農道の建設事業に伴い、平成10・11年度の2カ年にわたり、隠川(2)外遺跡の発掘調査を実施し、このたびその遺跡の発掘調査報告書を刊行することになりました。

調査の結果、平安時代の遺構や遺物、特に隣接する隠川(4)・(11)遺跡で検出された土器製作の工房をもつ住居跡が当遺跡でも検出され、近隣の須恵器窯跡の工人達との関係を探る上で貴重な資料となりました。

また、五所川原市では鞠ノ沢窯跡で出土したといわれるものに次いで2番目の旧石器時代の遺物も出土しました。このことは当時の前田野目地域の歴史を考える上で非常に貴重な資料であると考えられます。

この調査成果が文化財の保護と研究に広く活用され、また学術研究のみならず、地域社会の歴史学習や地域住民の文化財意識の高揚につながることに期するものであります。

最後になりますが、平素より埋蔵文化財の保護に対し御理解を賜り、また、発掘調査の実施と報告書の作成にあたり御協力、御指導を賜りました関係各位に対しまして、厚く御礼を申し上げます。

平成12年3月

五所川原市教育委員会

教育長 岩見貞夫

## 【例 言】

- 1 本報告書は平成10・11年度に実施した京管前田野目地区農免農道整備事業予定地内に所在する隠川(2)外遺跡の調査報告書である。
- 2 本遺跡の遺跡番号は、05062番である。
- 3 資料の鑑定及び試料の鑑定・分析・保存については次の方々と機関に依頼した(順不同、敬称略)。

土器の蛍光X線分析	三辻 利一
炭素14年代測定	バリノ・サーヴェイ株式会社
炭化材の樹種同定	バリノ・サーヴェイ株式会社
火山灰同定	バリノ・サーヴェイ株式会社
土器の顕微鏡分析	バリノ・サーヴェイ株式会社
鉄製品保存処理	釜石鉄製品保存処理センター
- 4 本報告書の依頼原稿の執筆者名は目次と文頭に示した。本文の執筆、編集は藤原・山口が行った。
- 5 本報告書に掲載した地形図は、建設省国土地理院発行の2万5千分の1の地形図を複写、合成したものである。
- 6 出土遺物・実測図・写真等は、現在五所川原市教育委員会で保管している。
- 7 発掘及び本報告書の作成にあたり、次の機関及び方々から御協力・御助言を頂いた。ご芳名を記し、感謝申し上げる次第である(敬称略、アイウエオ順)。  
太田原 潤、木村 淳一、木村 高、工藤 清泰、笹森 一朗、佐藤 智雄、関根 連人、  
茅野 嘉雄、平山 明寿、藤沼 邦彦

## 【凡 例】

- 1 本報告書の依頼原稿については文頭に示した。
- 2 引用、参考文献については、本文末に収めた。文中に引用した文献名については、著者名(編集機関名)と西暦年で示した。
- 3 土層の色調は「新版標準土色粘」(小山・竹原1967(1998年度版))に準じた。また、基本土層の番号にはローマ数字(I・II・III…)を使用し、遺構内埋土の層序にはアラビア数字(1・2・3…)を使用した。

- 4 遺構の表記には以下に示す略号を使用し、原則として遺構の検出順に付番した。

H：住居跡 HSD：住居跡に付属する外周溝、外延溝 HSDSK：住居跡外周溝に付随する土壌 HSB：住居跡に付随する掘立柱建物跡 SP：住居跡に付随する柱穴  
P：小穴 SK：土壌 SD：溝跡 SDX：方形溝状遺構  
SX：その他の遺構

- 5 遺構名は原則的に発掘時の遺構名を使用するつもりであったが、整理作業の結果、発掘現場でつけた遺構名と大幅に変更した。そのため以下に掲げる新遺構名を付すことにした。なお遺物の注記は発掘時の遺構名を記している。

SK01 (Pit08) SK02 (Pit06) SK03 (Pit09) SK04 (Pit13) SK05 (Pit14)

SK06 (Pit15) SK07 (Pit16) SK08 (Pit35) SK09 (Pit44) SK10 (Pit45)

SK11 (Pit46) SK12 (Pit32) SK13 (Pit34) SK14 (Pit48) SK15 (Pit18)

SK16 (Pit24) SK17 (Pit25) SK18 (Pit26) SK19 (Pit27) SK20 (Pit29)

SK21 (Pit30) SK22 (Pit31) SK23 (Pit42) SK24 (Pit43)

1HSD01 (SD15) 1HSD02 (SD04) 1HSD01SK01 (Pit17) SD03 (SD07)

SD04 (SD11) SD05 (SD118) SD06 (SD117) SD07 (SD12・13・116) SD08 (SD14)

SD12 (SD109) SD13 (SD111) SD14 (SD114) SD15 (SD117)

SXSD01 (SD08,09,10) SDX01 (SD112) SDX02 (SD107) SDX03 (SD104,105,106)

- 6 遺構の計測値は以下の通りである。

住居跡：四壁が残存、もしくは確認されているものに関しては対面する各辺の中線を結んだ長さを1辺の長さとし、四壁が確認されなかった住居に関しては1辺の長さを計測した。面積はトータルステーションを用い測量点から計測した。主軸方位はカマドの位置する壁面の垂直方位を示した。

カマド：主軸方位はカマドの両ソデの midpoint と煙道部もしくは掘り込み面の midpoint を結んだ線の方位とした。また煙道部が残存している場合は、火床面から煙道部ないし残存煙道部までの長さを計測した。

土壌：長軸、短軸を計測した。なお掘削もしくは未発掘により、計測できない場合は推定値を出した。

溝跡：調査区内における長さ、幅を計測した。

\*なお各遺構の長さ、幅はともに水平距離を計測している。また深さに関しては、遺構の下場において最小値と最大値を計測した。

- 7 各遺構の方位、縮尺は各図面ごとに示した(縮尺不同)。
- 8 遺構内出土の遺物に関してはその出土地点を平面図及び断面図に図示した。
- 9 出土遺物は原則として縮尺3分の1にした。
- 10 遺物の個体数のカウントは主として口縁部、底部の破片数を各々算出し、算定数の多い部位の破片数を個体数とする最小個体数法を使用している。(口縁部、底部破片が同一個体のものは1とした)。
- 11 各種遺構の平面図及び断面図等にかけてスクリーントーンの内訳は表1のとおりである。
- 12 各種遺構で使用した出土遺物記号は表2のとおりである。
- 13 土器実測図において使用した各種調整技法の表現方法は表3に示したとおり基本的に青森県埋蔵文化財調査センターの表現方法を踏襲した。

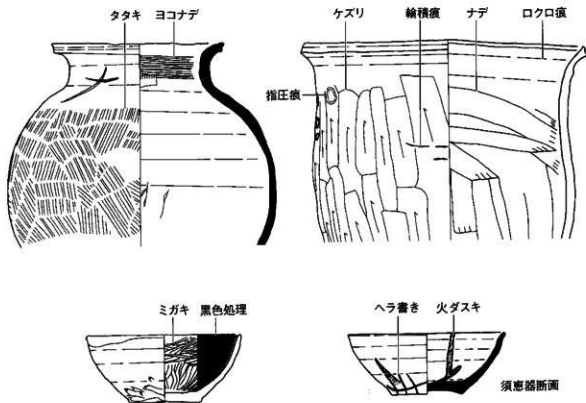
表1 各種遺構・土層スクリーン一覧表

	地 山		火山灰・ソデ 粘土・崩落土
	火床面 焼 土		炭化物範囲

表2 遺物記号一覧表

○：土師器	●：須恵器
◎：縄文土器	△：ミニチュア土器
▲：土製品	■：鉄
☆：羽口	★：植物依存体

表3 各種土器の調整技法一覧表



## 【本文目次】

第1章 調査経緯と調査要項 .....	1
第1節 調査に至る経緯 .....	1
第2節 調査要項 .....	2
第2章 調査の方法と調査経過 .....	2
第1節 調査方法 .....	2
第2節 調査の経過 .....	3
第3章 遺跡周辺の環境 .....	17
第1節 前田野目川流域の自然環境 .....	17
第2節 前田野目川流域の歴史環境 .....	22
第4章 遺跡の概要 .....	29
第5章 検出遺構と出土遺物 .....	30
第1節 平安時代の検出遺構 .....	30
1 住居跡 .....	30
2 土 壌 .....	73
3 溝状遺構 .....	86
第2節 平安時代の出土遺物 .....	103
1 山上土器 .....	103
2 出土土製品 .....	131
第3節 旧石器時代の出土遺物 .....	133
第4節 縄文時代の出土遺物 .....	134
第6章 調査の成果 .....	149
第1節 出土遺構について .....	149
1 住居跡 .....	149
2 土 壌 .....	152
3 溝 跡 .....	152
第2節 出土土器について .....	153
1 土師器 .....	153
2 須恵器 .....	157
3 ヘラ記号について .....	157
4 火燻痕について .....	158
5 器種組成 .....	158
第7章 自然科学的分析 .....	160
第1節 隠川(2)外遺跡 出土須恵器・土師器の蛍光X線分析 .....	奈良教育大学 二辻利一 160
第2節 隠川(2)外遺跡 出土土器の偏光顕微鏡分析 .....	バリノ・サーヴェイ株式会社 165
第3節 隠川(2)外遺跡山上の火山灰分析 .....	バリノ・サーヴェイ株式会社 176

第4節 隠川(2)外遺跡 平安時代住居跡から検出された炭化材の年代・樹種同定について	181
..... パリノ・サーヴェイ株式会社	

・年代測定について	181
・樹種同定について	181

第8章 調査のまとめ	186
------------	-----

### 【挿図目次】

第1図 隠川(2)外遺跡位置図	1
第2-1図 遺構配置図(A区)	5,6
第2-2図 遺構配置図(B・C区)	7,8
第2-3図 遺構配置図(D・E区)	9,10
第2-4図 遺構配置図(F区)	11,12
第2-5図 遺構配置図(F・G区)	13,14
第2-6図 遺構配置図(G区)	15,16
第3図 遺跡周辺の地形分類図	18
第4図 遺跡周辺における露頭の模式柱状図	19
第5図 基本層序	20
第6図 地形と遺跡の分布概念図	25
第7図 第1号住居跡(1)	30
第8図 第1号住居跡(2)	31
第9図 第1号住居跡カマド	32
第10図 第1号住居跡出土遺物分布図	32
第11図 第1号住居跡出土土器	33
第12図 第1号住居跡付属溝跡	34
第13図 第1号住居跡付属外延溝	34
第14図 第2号住居跡	36
第15図 第2号住居跡カマド	37
第16図 第2号住居跡出土遺物分布図	37
第17図 第2号住居跡出土土器	38
第18図 第3・4号住居跡	40
第19図 第3号住居跡カマド	41
第20図 第3・4号住居跡出土遺物分布図	41
第21図 第3・4号住居跡出土土器	41
第22図 第5号住居跡	43
第23図 第5号住居跡カマド	44
第24図 第5号住居跡出土遺物分布図	44
第25図 第5号住居跡出土土器	45

第26図	第6号住居跡	47
第27図	第6号住居跡出土遺物分布図	47
第28図	第6号住居跡山上土器	47
第29図	第7号住居跡	48
第30図	第7号住居跡カマド	49
第31図	第7号住居跡出土遺構	49
第32図	第7号住居跡出土遺物分布図	50
第33図	第7号住居跡出土土器(1)	51
第34図	第7号住居跡山上土器(2)	52
第35図	第8号住居跡	53
第36図	第8号住居跡カマド	54
第37図	第8号住居跡出土遺物分布図	54
第38図	第8号住居跡出土土器	54
第39図	第9号住居跡	56
第40図	第9号住居跡出土遺物分布図	56
第41図	第9号住居跡出土土器	56
第42図	第10号住居跡	57
第43図	第10号住居跡出土遺物分布図	58
第44図	第10号住居跡出土土器	58
第45図	第11号住居跡	59
第46図	第11号住居跡出土遺物分布図	60
第47図	第11号住居跡山上土器(1)	61
第48図	第11号住居跡出土土器(2)	62
第49図	第12号住居跡	63
第50図	第12号住居跡カマド	64
第51図	第12号住居跡出土遺物分布図	65
第52図	第12号住居跡出土土器(1)	67
第53図	第12号住居跡出土土器(2)	68
第54図	第13・14・15号住居跡	69
第55図	第13号住居跡カマド	69
第56図	第13・14・15号住居跡出土遺物分布図	70
第57図	第13・14・15号住居跡出土土器	72
第58図	第1号土壇	81
第59図	第2号土壇	81
第60図	第3号土壇	81
第61図	第4・5号土壇	81
第62図	第6号土壇	82

第63図	第7号土壌	82
第64図	第8～14号土壌	82
第65図	第15号土壌	82
第66図	第16号土壌	83
第67図	第17号土壌	83
第68図	第18号土壌	83
第69図	第19号土壌	83
第70図	第20～22号土壌	83
第71図	第23・24号土壌	84
第72図	第25号土壌	84
第73図	第26号土壌	84
第74図	第27・28号土壌	84
第75図	第29号土壌	84
第76図	第30号土壌	85
第77図	第31号土壌	85
第78図	第32号土壌	85
第79図	第33号土壌	85
第80図	第34号土壌	85
第81図	第35号土壌	85
第82図	第1号溝状遺構	86
第83図	第2号溝状遺構	87
第84図	第3号溝状遺構	88
第85図	第4号溝状遺構	89
第86図	第4号溝状遺構出土遺物分布図	89
第87図	第4号溝状遺構出土土器(1)	90
第88図	第4号溝状遺構出土土器(2)	91
第89図	第11号溝状遺構	95
第90図	第5号溝状遺構	95
第91図	第6号溝状遺構	95
第92図	第7・8号溝状遺構	96
第93図	第9・10号溝状遺構	97
第94図	第1号方形溝状遺構	98
第95図	第2号方形溝状遺構	99
第96図	第12・13・14号溝状遺構、第3号方形溝状遺構	101
第97図	第1号並列溝状遺構	102
第98図	山縁部の端面形各種	105
第99図	出土土器の器種類型	105



第100図	出土土器 (1)	土師器・長胴甕	111
第101図	出土土器 (2)	土師器・長胴甕	112
第102図	出土土器 (3)	土師器・長胴甕	113
第103図	出土土器 (4)	土師器・長胴甕	114
第104図	出土土器 (5)	土師器・長胴甕、小形甕	115
第105図	出土土器 (6)	土師器・小形甕	116
第106図	出土土器 (7)	土師器・小形甕	117
第107図	出土土器 (8)	土師器・坏	118
第108図	出土土器 (9)	土師器・坏、皿、須恵器・坏	119
第109図	出土土器 00	須恵器・坏	120
第110図	出土土器 01	須恵器・坏、鉢	121
第111図	出土土器 02	須恵器・鉢、壺	122
第112図	出土土器 03	須恵器・壺、甕、鉢	123
第113図	出土土器 04	土師器・壺、羽釜、ミニチュア	124
第114図	隠川 (2) 外遺跡における底部調整の各種 (1)		125
第115図	隠川 (2) 外遺跡における底部調整の各種 (2)		126
第116図	隠川 (2) 外遺跡における底部調整の各種 (3)		127
第117図	隠川 (2) 外遺跡における底記号の各種		128
第118図	出土土製品 (1)		129
第119図	出土土製品 (2)		130
第120図	出土土製品 (3)		131
第121図	出土旧石器		133
第122図	出土縄文土器		135
第123図	出土石器 (1)		137
第124図	出土石器 (2)		138
第125図	検出住居跡一覧		150
第126図	検出カマド一覧		151
第127図	甕類における各種端面形の出現頻度		154
第128図	甕類の口径ヒストグラム		154
第129図	甕類におけるロクロ使用頻度		154
第130図	A 1 類における部位別の各種調整技法の割合		154
第131図	A 2 類における部位別の各種調整技法の割合		154
第132図	B 1 類における部位別の各種調整技法の割合		154
第133図	B 2 類における部位別の各種調整技法の割合		154
第134図	土師器坏の口径・器高分布図		156
第135図	土師器坏の口径・底径分布図		156
第136図	土師器坏の色調別口径ヒストグラム		156

第137図	須恵器坏の口径・器高分布図	156
第138図	須恵器坏の口径・底径分布図	156
第139図	須恵器坏の色調別口径ヒストグラム	156
第140図	須恵器の両分布図	161
第141図	土師器の両分布図	162
第142図	土師器のクラスター分析	162
第143図	火山ガラスの屈折率	177

### 【挿表目次】

表1	各種遺構・土層スクリーン一覧表	iv
表2	遺物記号一覧表	iv
表3	各種土器の調整技法一覧表	iv
表4	隠川(2)外遺跡周辺の遺跡とその標高グラフ	23
表5	五所川原市域の考古年表	27
表6	各住居跡の諸属性	149
表7	住居跡出土土器 器種組成表	159
表8	須恵器の分析データ	163
表9	土師器の分析データ	164
表10	胎土薄片観察結果	168
表11	テフラ分析結果	177
表12	樹種同定結果	181
表13	放射性炭素年代測定結果	181

### 【付表目次】

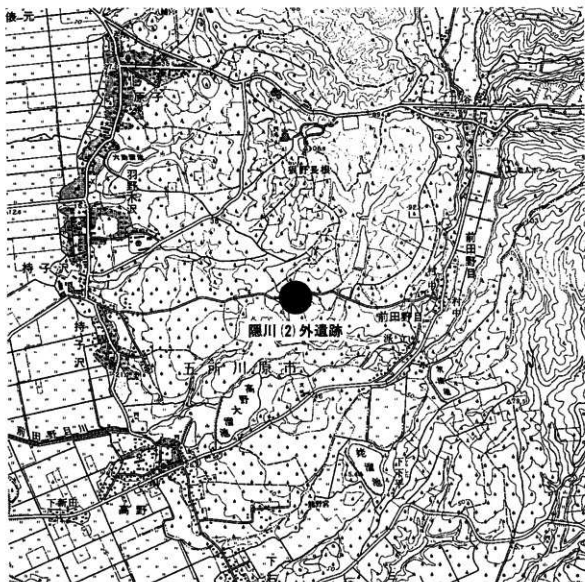
付表1	出土土器観察表(1)	139
付表2	出土土器観察表(2)	140
付表3	出土土器観察表(3)	141
付表4	出土土器観察表(4)	142
付表5	出土土器観察表(5)	143
付表6	出土土器観察表(6)	144
付表7	出土土器観察表(7)	145
付表8	出土土器観察表(8)	146
付表9	出土土製品観察表	147
付表10	出土旧石器・石器観察表	148
付表11	出土縄文土器観察表	148
写真図版		190

# 第1章 調査経緯と調査要項

## 第1節 調査に至る経緯

県営前田野目地区農免農道は、持子沢字笠野前と前田野目字村中を結ぶ全長約2kmの農免農道である。平成8年度に当農免農道の整備が青森県の事業として着手され、その際、当該地域が遺跡の範囲内に掛かるため、平成9年度には県文化課による試掘調査が実施され、工事坑NaKE-9-1からNaKE16-1までの農道の約50%におよぶ1.0kmの範囲が平安時代の遺跡であることが確認された(隠川(2)外遺跡)(第1図)。

その結果、平成10年・11年度にわたる2ヶ年の発掘調査を五所川原市教育委員会が実施することになり、平成10年5月11日から調査を開始した。



第1図 隠川(2)外遺跡 位置図 (S=1/25,000)

## 第2節 調査要項

- |            |                                                                             |                                                |                                                                                                                                                            |
|------------|-----------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 調査目的     | 県宮前田野目地区農免農道整備事業の実施に先立ち、当該地区に所在する隠川(2)外遺跡の発掘調査を行い、その記録保存を図り、地域社会の文化財活用に供する。 |                                                |                                                                                                                                                            |
| 2 発掘調査期間   | (1次調査)平成10年5月11日(日)から同年10月30日(金)まで<br>(2次調査)平成11年5月12日(日)から同年10月28日(木)まで    |                                                |                                                                                                                                                            |
| 3 遺跡名及び所在地 | 隠川(2)遺跡(青森県遺跡番号05-062) 五所川原市持子沢字隠川622外                                      |                                                |                                                                                                                                                            |
| 4 調査対象面積   | 14,800㎡(平成10年度 9,000㎡、平成11年度 5,800㎡)                                        |                                                |                                                                                                                                                            |
| 5 調査委託者    | 青森県北農村整備事務所                                                                 |                                                |                                                                                                                                                            |
| 6 調査受託者    | 五所川原市教育委員会                                                                  |                                                |                                                                                                                                                            |
| 7 調査担当機関   | 五所川原市教育委員会生涯学習課                                                             |                                                |                                                                                                                                                            |
| 8 調査協力機関   | 青森県文化課、青森県埋蔵文化財調査センター、弘前大学                                                  |                                                |                                                                                                                                                            |
| 9 調査員等     | 調査指導員                                                                       | 村越 潔                                           | 青森大学教授(考古学)                                                                                                                                                |
|            | 調査員                                                                         | 五所川原市教育委員会                                     | 教育長 岩見 貞夫<br>教育次長 外崎 武徳<br>生涯学習課 課長 川村 喜代一<br>課長補佐 柴谷 和夫<br>係長 佐藤 文孝<br>主査 対馬 サツエ<br>主任 秋元 亨(現・商工観光課)<br>主任 阿部 信幸<br>主事 藤原 弘明<br>主事 小田切 秀樹<br>非常勤事務員 菊池 基子 |
|            | 調査補助員                                                                       | 古館 晃彰、工藤 輝美、寺田 勝<br>奈良 卓哉、山口 航生、太田真太郎<br>小関 勇紀 |                                                                                                                                                            |

## 第2章 調査の方法と調査の経過

### 第1節 調査方法

**グリッドの設定** 調査区域内におけるグリッドは、1グリッドを5×5mに設定し、農道の測量杭KE9-1を原点(AA01)とした。また各グリッドには東西線の西から東へ向かってアルファベット2文

字(AA・AB・AC……)、南北線の北から南に向かって算用数字(0・1・2・3……)を付した(第2図参照)。

グリッドの呼称は北東隅の交点を使用することにした。なお場合によっては1グリッド内に1×1mの小グリッドを設定し、その場合は北西隅から1～25の番号を付した。

**遺構、遺構の確認** 耕作十等の表層を除去した後、遺物包含層、遺構の有無を確認するために、調査区外のセクションで、各土壌の堆積状況を把握しながら、各堆積層を上から順に掘り下げた。その際出土した遺物に関しては、各グリッド、層位単位で遺物を取り上げ、重要であると思われるものに関しては、写真撮影をした後、平面図を作成し、標高を測った後、番号を付して取り上げを行った。

**遺構の精査** 遺構が検出された場合、基本的には四分法に基づきセクションベルトを設置して埋土の堆積状況を確認しながら精査を行った。しかし四分法が困難な場合は二分法に切り替えて行うことにした。十層の名称は青森県埋蔵文化財調査センターの例に倣い、基本的に上位から下位に、左から右に算用数字を付すことにした。

**実測図の作成** 遺構の形態、遺構内の堆積状況、遺構内外の出土遺物の出土状況や出土地点は、水系方眼地張り測量もしくは遺り方測量によって行った。図面の縮尺は原則として20分の1を使用した。遺構の性格等により、10分の1、50分の1を用いた。2年日からは遺り方測量の他にトータルステーションを使用して、測量を行った。

**遺構番号の設定** 遺構の番号はその遺構の種類に応じて、その確認順に付すように努めたが、かなりの欠番が生じた。よって本報告書では新番号を付すことにした。

**写真撮影** 土層の堆積状況(セクションベルト)、遺物の出土状況、遺構の完掘状況を中心に撮影し、その他必要に応じて、遺構の確認面、調査状況、基本土層などについても記録撮影を行った。使用したカメラはニコンのFM2、AF70を使用し、フィルムはモノクロ、カラーリバーサル、ネガカラーの3種を使用した。

## 第2節 調査の経過

### 平成10年度の調査経過

5月11日 発掘作業初日。午前中は道具の手入れと、発掘現場の状況を説明した。午後より作業開始。

A区(AA01～BB13)の表土除去作業を行うと同時に、ベンチマークの設定、グリッドの杭打ちを行った。

5月12日～6月2日 A区の表土除去作業を継続して行う。表土直下に地山のローム層が現れたため、遺構の確認を行った結果、A区では土壌2基が検出された。

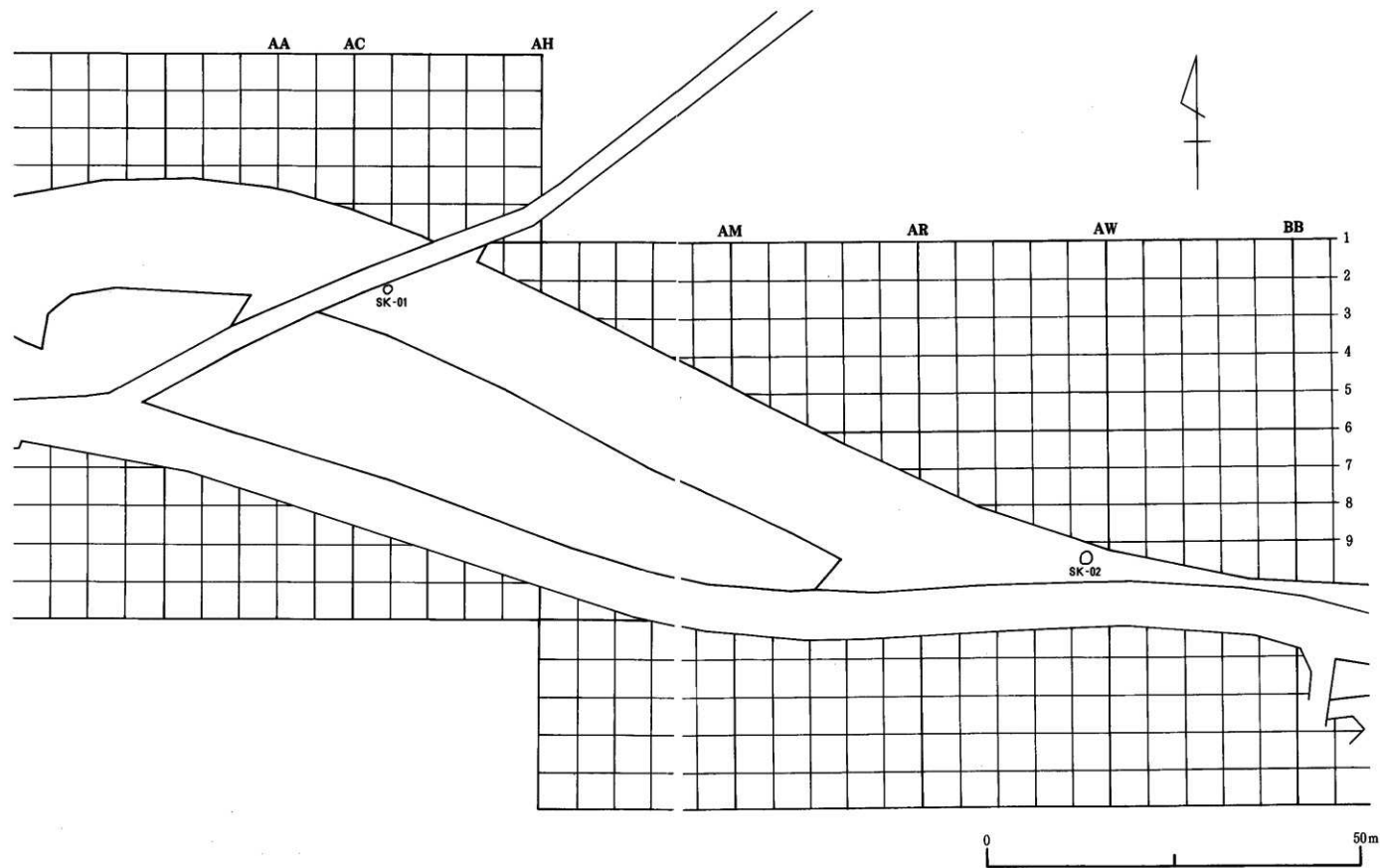
6月3日～23日 B区の表土除去作業を行い、遺構の確認、精査を行う。ここからは、溝状遺構が1条、土壌1基が検出された。

6月19日～26日 C区の表土除去作業を行い、遺構の確認、精査を行う。地形が谷地形のせいか、地山のV層が検出されず、その下層のVI層が検出された。ここからは遺構が検出されず、出土遺物も少なかった。この日までさしたる遺物、遺構が検出されず、予定以上に作業がはかどった。

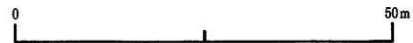
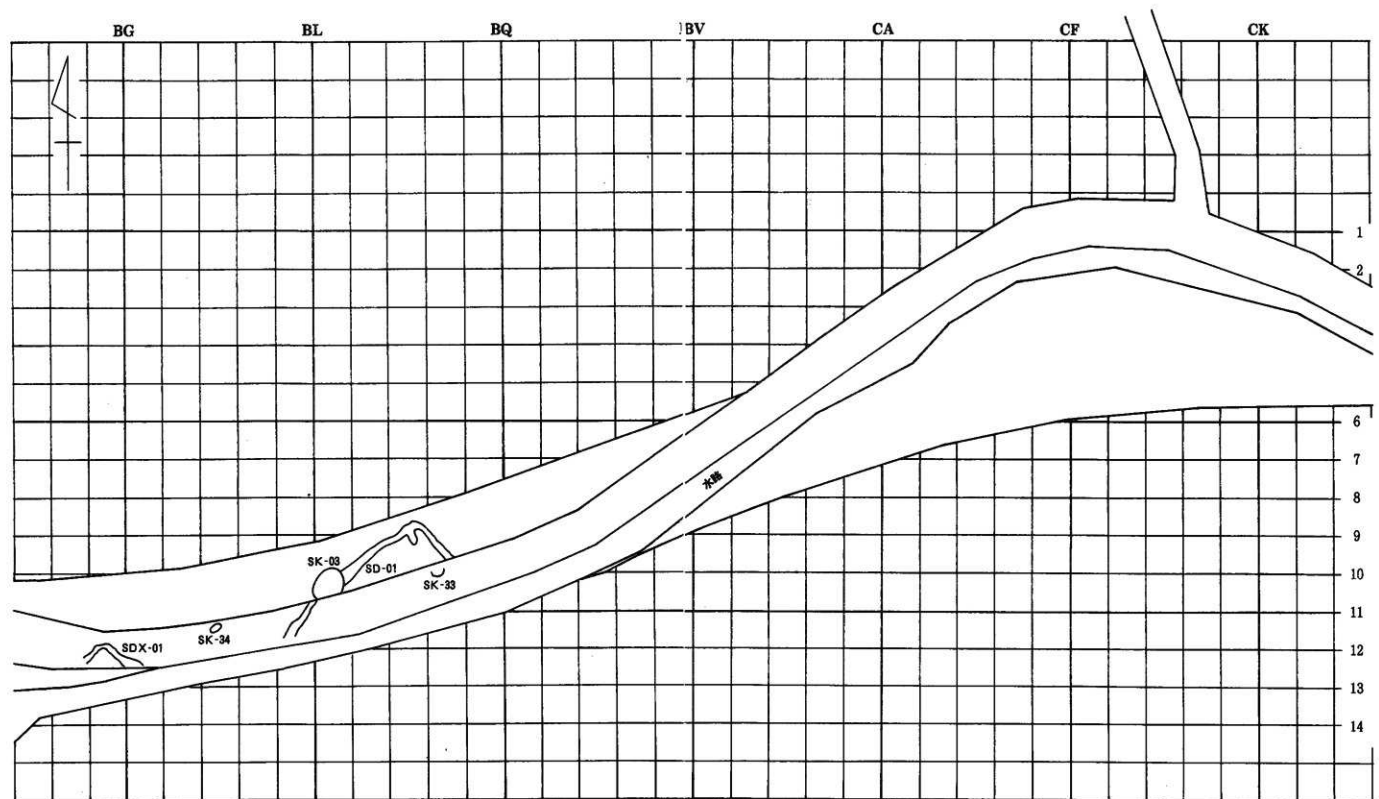
- 6月29日～7月12日 D区の表土除去作業を行い、遺構の確認、精査を行う。元の地主さん曰く「ここからは昔いっぱい遺物がでたんだ」とおっしゃった言葉通り、ここからは、竪穴住居跡1棟とそれに伴う溝跡2基、土壇4基、溝跡2条が検出され、遺物も多量に出土した。
- 7月13日～9月30日 E区の表土除去作業を行い、遺構の確認、精査をおこなう。ここからは、溝跡1条、土壇7基が検出された。
- 8月2日～10月26日 F区の表土除去作業を行い、遺構の確認、精査を行う。ここからは、竪穴住居跡5棟、溝跡7条、土壇10基が検出された。
- 10月27日～30日 精査終了後F区の一部を埋め戻す作業(農家の方に水が溜まると指摘されたため)を行い、1998年度の作業は終了した。

### 平成11年度の調査経過

- 5月13日 発掘作業初日。午前中は作業員の班編成及び道具の整備と発掘現場の状況を説明した。午後より、作業開始。昨年度に引き続きF区・G区の表土除去を行うと同時に、ベンチマークの設定、グリッドの杭打ちを行った。
- 5月14日～7月8日 引き続きF区・G区の表土除去作業を行った後、遺構の確認、精査を行う。雨天時は室内において遺物の水洗いを行った。
- 7月9日 晴天に恵まれ、計画予定通りにF区・G区の道路拡幅部分の発掘調査を終了した。その結果竪穴住居跡4棟、溝跡6条、土壇2基が検出された。
- 7月12・13日 空中撮影のためクリーニングを行うが、撮影当日大雨のため、中止となる。
- 7月14日 発掘調査前日日程終了日。大雨のため、室内で土器の水洗いを行った。
- 7月15日～8月15日 現在の農道部分を発掘するために、既発掘部分に仮設道路を設置する。その工事期間のため発掘作業を一時中断した。
- 8月16・17日 空中撮影を行うために作業員、補助員全員で発掘区のクリーニングを行う。
- 8月18日 八州スペースコンサル株式会社による気球での空中撮影を行う。発掘区の総距離が長いため、1日がかりの撮影となった。
- 8月19日～29日 現農道部分の碎石除去を重機を使用して行った。碎石の除去後グリッドの杭打ちを行った。
- 8月30日～9月14日 現農道部分の精査開始。最初にB・D区の農道部分を精査した。その結果竪穴住居跡1棟、溝跡4条、土壇4基が検出された。
- 9月15日～10月26日 G・H区の農道部分を精査した。天気が悪く思うようにはかどらなかつたが、遺構の検出数も少なく既定の作業期間内に発掘作業は終了した。ここからは竪穴住居跡2棟、溝跡4条が検出された。
- 10月27・28日 現場から遺物、作業道具等発掘関連機材の搬出、整理室への搬入を行った。作業時間が思った以上に早く終わったため、翌28日は土器の水洗いを行い、発掘作業の全日程を終了した。
- 11月1日～26日 遺物の水洗い注記を行う。昨年度の遺物は注記済みであり、今年度分の注記のみであったので、意外に早く終了した。

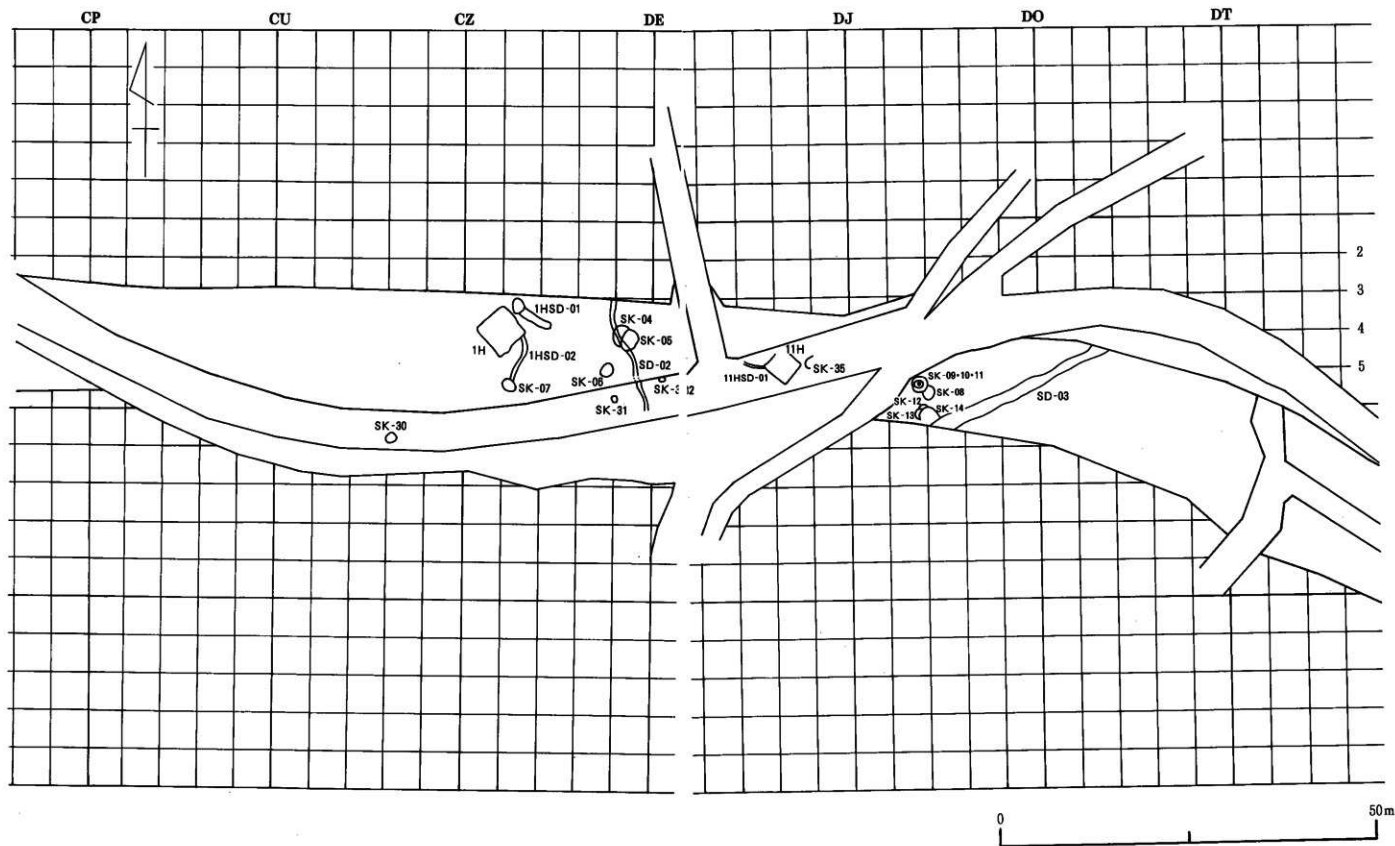


第2-1図 遺構配置図(A区)

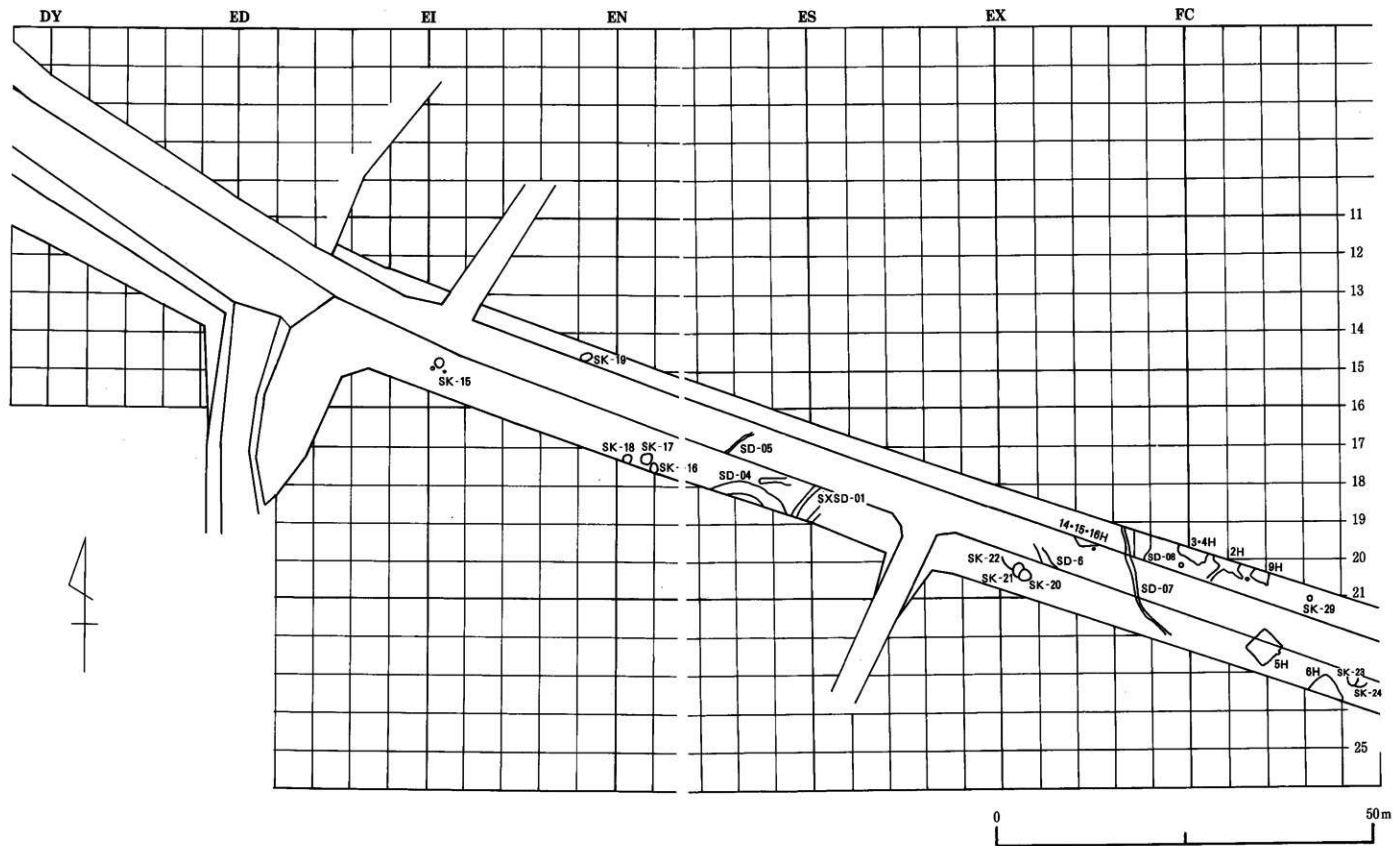


第2-2図 遺構配置図 (B・C区)

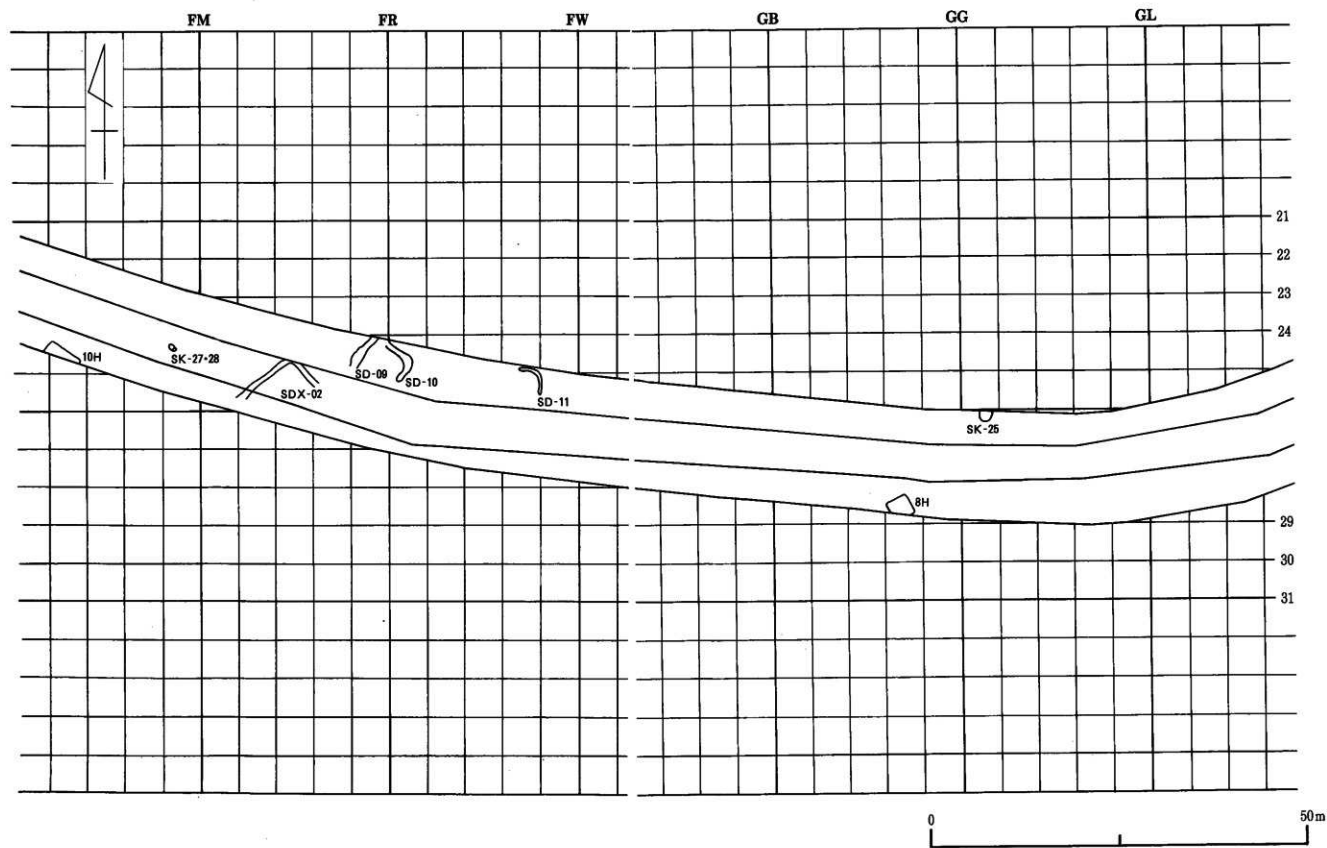




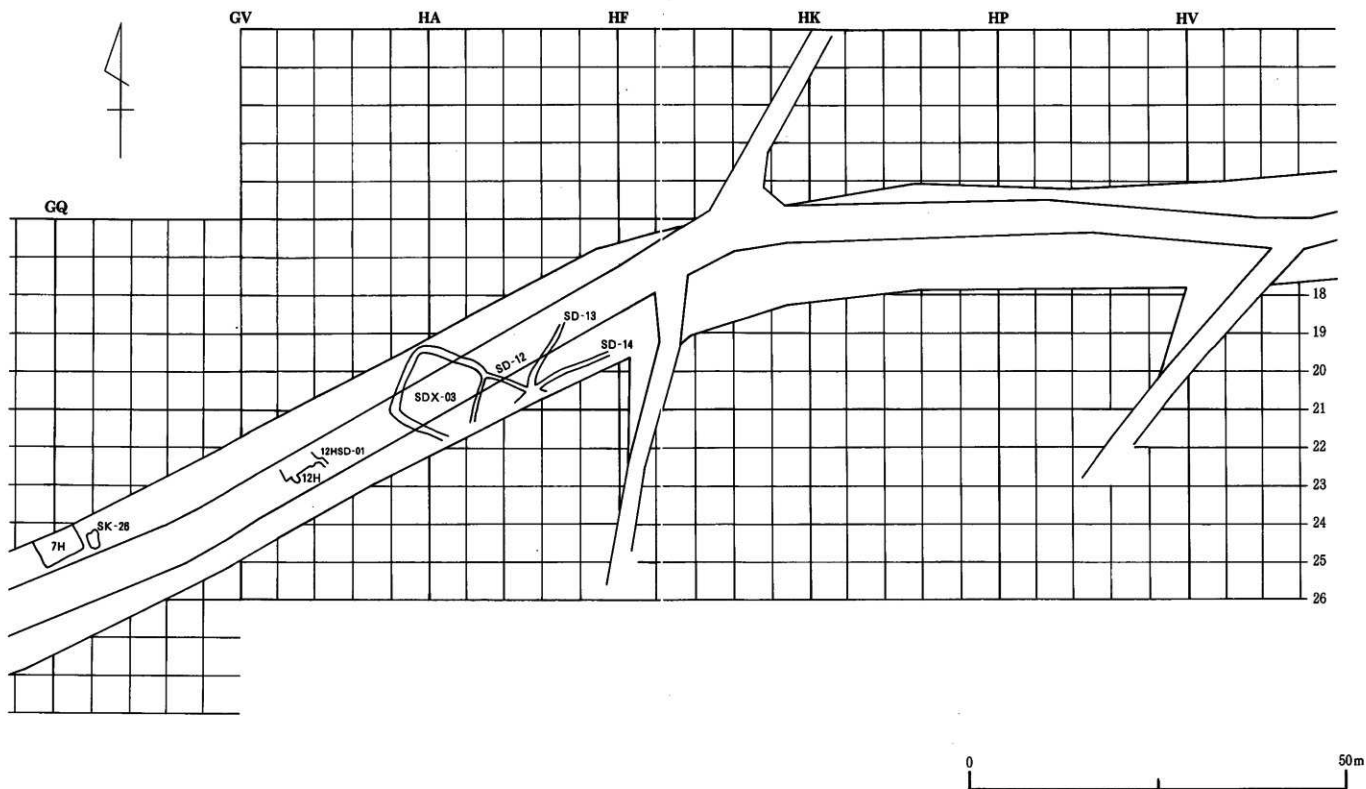
第2-3図 遺構配置図(D・E区)



第2-4図 遺構配置図(F区)



第2-5図 河床構造配置図 (F・G区)



第2-6図 道構配置図 (G区)

11月29日～2月10日 遺物の実測、遺構・遺物のトレースを行う。遺物の実測は今まで経験者がいないものであるから、非常に時間がかかった。

2月14日～ 図面のレイアウト、遺物の写真撮影、報告書の本文執筆を行う。

## 第3章 遺跡周辺の環境

### 第1節 前田野目川流域の自然環境

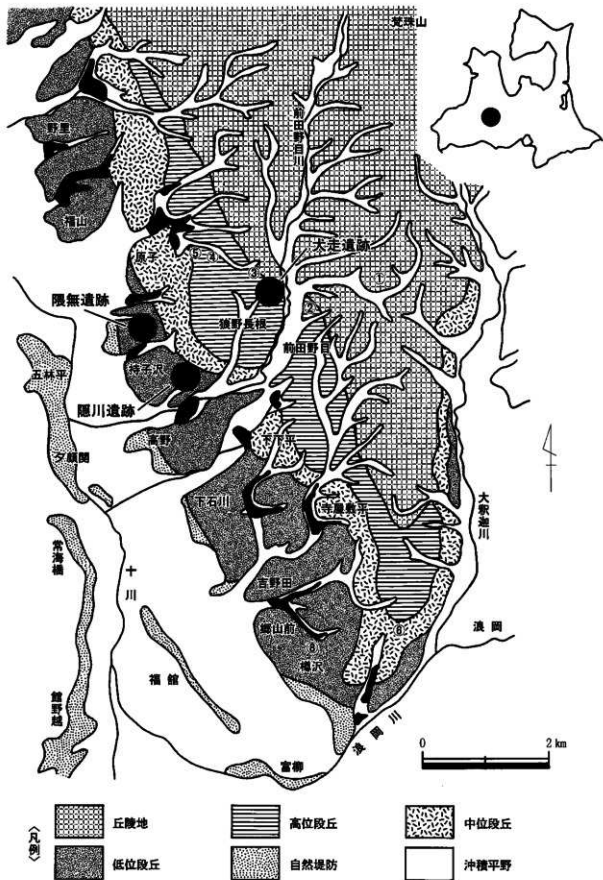
青森県環境生活部県史編さん室総括主幹 山口 義 伸

隠川(2)外遺跡は五所川原市大字持子沢字隠川622外に所在し、津軽山地西縁に分布する低位段丘上に立地している。いずれの遺跡も前田野目川西岸の同段丘面で、標高約42～61mである。段丘面は概ね100分の2程度の勾配で平野部側に緩傾斜している。

津軽半島中央部を南北に縦走する津軽山地は津軽平野と陸奥湾に面した青森平野とを二分する脊梁をなしている。この半島脊梁部には、玉清水山(479m)・袴腰岳(628m)・赤倉岳(559m)・大倉岳(677m)・源八森(353m)・馬ノ神山(549m)・梵珠山(468m)・鐘堂堂山(313m)などの山稜が連なっている。特に、袴腰岳および馬ノ神山の両山稜周辺は、地形学的及び地質学的にドーム状の構造をなしていることが明瞭に識別できる。

第3図には梵珠山系周辺の地形分類を、第4図には同地域における露頭の模式柱状図を示したものである。半島脊梁部南部の馬ノ神山ドームから南方には、緩やかに南傾斜する梵珠山系と大釈迦丘陵が展開している。標高200m以上の等高線はその間隔がせま大きく入り組んでいて開析度が大きく起伏に富んだ山地の様相を呈している。なお、梵珠山系はグリーンタフ地域にみられる軽石質凝灰岩及び頁岩などを主体とする基盤層からなっている。

また標高70m以上は等高線の間隔がやや広く稜線部に平坦面が認められる。これは田代平カルデラに起因する、約65万年前の八甲田第1期火砕流堆積物(村岡・長谷,1990)からなる火砕流台地を示すもので、平坦な大釈迦丘陵として梵珠山系外縁に展開している。そして概ね標高20～60mの等高線はその間隔が広く100分の2～5の緩傾斜面をなし、平野部に隣接する前田野目台地として展開している。なお平野部との境界部には比高数mの急崖あるいは急斜面が認められる。この前田野目台地は3段の段丘群からなる。このうち、高位段丘は標高50～60mであって、前田野目川付近では標高60～100mの狼野長根が相当する。狼野長根は開析度が進み起伏に富むが頂部に平滑な面が認められる。高位段丘は八甲田第1期火砕流堆積物と上位に堆積する軽石質砂・シルト・粘土などを主体とする前田野目層からなる。中位段丘は標高40～50mであり、等高線の配置が平野部にほぼ平行するが、その間隔はやや狭くなっている。五所川原市境山から豊成東方にかけては100分の4とやや勾配のある傾斜面として、また浪岡町花園付近では100分の2の緩傾斜面として分布している。段丘構成層は五所川原付



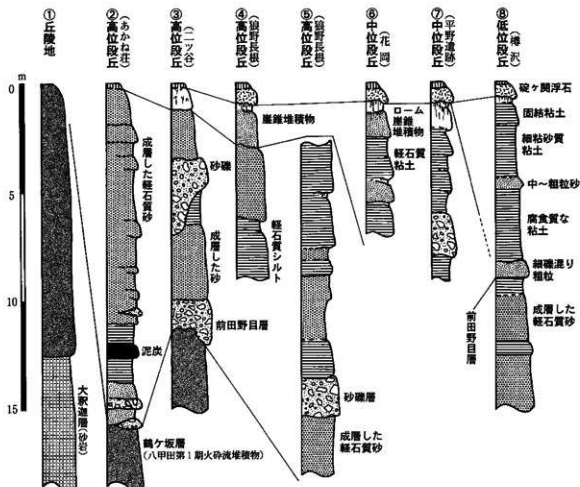
第3図 遺跡周辺の地形分類図

(五所川原市教育委員会・犬走須恵器高跡発掘調査団(1998)より転載)

近では成層した細粒砂・シルトを、浪岡付近では淘汰不良な砂礫層を主体としている。低位段丘は標高20~35mと中位段丘にほぼ連続し、平野縁辺部に1~2kmの幅で分布している。五所川原市野里から豊成付近にかけては標高20~25mで、勾配100分の1とやや平坦であり、また浪岡町郷山前から吉野田付近にかけては標高25~40mとやや高く100分の2と勾配も認められる。構成層は淘汰不良な細礫混じりの粗砂を主体とした腐植質粘土の薄い層を挟み湿地性堆積物と考えられる。

津軽山地南部の水系として大釈迦川および前田野目川があげられる。大釈迦川は梵珠山を発源とし梵珠山系東縁をほぼ南流し、南津軽郡浪岡町で浪岡川と合流した後、前田野目台地を大きく迂回して平野部で十川と合流する。前田野目川は梵珠山北方に位置する馬ノ神山を発源とし梵珠山系を大きく開析しながらほぼ南流する。そして、平野部で北流する十川と合流する。なお、前田野目台地内に小谷が見られ、そのほとんどが平野部への出口付近が塞き止められ、原子溜池、高野大溜池、姥溜池、吉野田新溜池として灌漑用水に利用されている。

次に、隠川(2)外遺跡の調査区域内の基本層序について述べる。第5図には隠川(2)外遺跡の調査区域内におけるメインセクションを示した。各区とも耕作による攪乱及び削平を受けているが、基本的



第4図 遺跡周辺における露頭の模式柱状図(第3図の○を付けた番号と符合する)

(五所川原市教育委員会・大定須恵器窯跡発掘調査(1998)より転載)

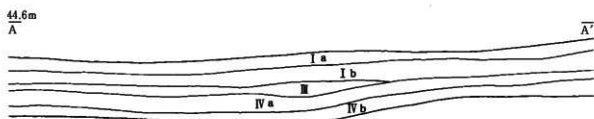
には基本層序に差異がないことからまとめて各層の概要を述べることにする。

**I a 層** 黒色土 (10YR2/1) 耕作による攪乱層あるいは盛り土である。粘性・湿性に欠け、耕作によるかたさはあるが、締まりに欠け脆く崩れやすい。乾くと黒灰色に変色して、格子状の割れが目立ちボソボソとした感じである。

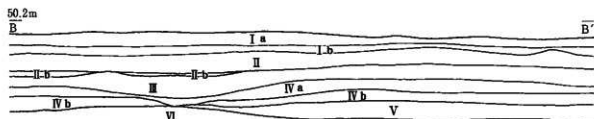
**I b 層** 黒色土 (10YR1.7/1) 耕作土である。粘性・湿性に乏しく、I a層とかたさは同程度であるが、多少締まりがみられる。乾くとクラックが発達し、ブロック状に割れやすい。

**II 層** 黒色土 (10YR1.7/1) 粘性・湿性がややあり、またかたさや締まりも認められる。層全体がシルト質～細粒砂質で、軽石粒および粘土粒の混入が目立つ。なおB区調査区域内では、本層下部に白頭山起源の苫小牧火山灰(B-Tm)がブロック状に堆積する黒褐色土(II b層)が認められた。このII b層は谷地形及び凹地などの低地にのみ堆積し、軽石粒および粘土粒が多量に混入する。

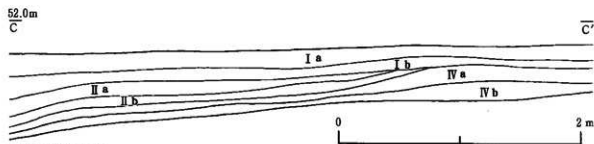
**III 層** 黒色腐植質土 (10YR1.7/1) 腐植質で粘性・湿性が十分である。かたさおよび締まりも



A区セクション



B区セクション



C区セクション

第5図 基本層序



みられる。軽石粒および粘土粒が多少混入する。

IV 層 黒褐色土 (10YR2/2~3/2) 漸移層である。粘性・湿性がややあり、またかたさ及び締まりも多少認められる。下位層の軽石粒や軽石質粘土粒の混入が目立ち、層全体としてソフトな感じがする。なお本層は軽石粒や粘土粒の混入状況により2層に細分される。上部のIVa層は粒子状の混入物が目立ち、全体的にやや腐植質で暗い色調を呈する。下部のIVb層はブロック状の混入物が目立ち、全体的に色調が明るく粘土質でソフトな感じがする。ただ、B区調査区域での谷地形で確認したように、凹地での堆積物は陸水の影響を受けた堆積状況を示し、特に下部のIVb層は淘汰の悪い砂礫層、砂質土層と層相変化する。

V 層 黄褐色軽石層 (10YR5/6) 緻密堅固なラビリ質細粒軽石層で、錠ヶ関浮石(山口 1993)に相当する。調査区域全体において、局部的であるが陸水の影響を受けて黄灰褐色軽石質粘土に層相変化する。

VI 層 明黄褐色凝灰質粘土層 (10YR6/6~7/6) 背後の丘陵及び高位段丘を構成する八甲田第1期火砕流堆積物の浸食再堆積層と思われる。上位のV層と同様に湿地性の環境下で堆積したものと考えられ、低位段丘の形成過程を考える上で貴重な情報である。ところで、隠川(4)遺跡調査区域内でのカッチング面で確認したところ、層相から2層に細分される。上部のVIa層は塊状で細粒軽石質砂層であり、V層との境界部には時間間隙を示す暗色帯が認められ、乾くとクラックが発達する。下部のVIb層は細粒軽石質砂層と黄灰色軽石質粘土層の互層で、砂層中には未淘汰の砂礫層の薄層が認められ、底部にも厚さ50cm程の砂礫層が下位の粘土層を大きくくぐる形で堆積している。

VII 層 におい黄橙色粘土層 (10YR7/4) N値が15を示す固結した粘土層である。浪岡町樽沢でのボーリング試料でも確認しているが、固結粘土の下位には、N値が3~7の軟らかいシルト層~粘土層が約5~6mの厚さで堆積している。

#### 【引用・参考文献】

- 中川久夫(1972) 青森県の第四系 青森県の地質第二部 青森県  
 藤井敬三(1981) 油川地域の地質 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 地質調査所  
 村岡洋文・長谷益和(1990) 黒石地域の地質 地域地質研究報告(5万分の1地質図幅) 地質調査所  
 山口義伸(1993) 平川流域での十和田火山起源の浮石流凝灰岩について 年報市史ひろさき No.2 弘前市  
 青森県教育委員会(1998) 隠川(4)-02 遺跡 I 青森県埋蔵文化財調査報告書第244集  
 五所川原市教育委員会・犬走須恵器窯跡発掘調査団(1998) 犬走須恵器窯跡発掘調査報告書 五所川原市埋蔵文化財調査報告書第21集

## 第2節 前田野目川流域の歴史環境

北奥文化研究会会員 半澤 紀

隠川(2)外遺跡周辺には、『青森県遺跡地図』によると約54カ所の遺跡が登録されている(表4「隠川(2)外遺跡周辺の遺跡とその標高グラフ」参照)。また、近年同地域は、津軽自動車道などの建設に伴う発掘や、五所川原市須恵器窯跡の磁気・レーダー探査等の学術調査の進展により、多くの成果が得られている。特にこれまで当市域では未発見であった縄文時代早期と弥生時代・統縄文/古墳時代の土器が出土したこと、平安時代の須恵器窯が新規に10数カ所も発見されたことは特筆できる事項であろう。これらの登録遺跡と、調査成果を絡めながら、当地域の歴史的環境を時代別に整理してみたいと思う。

### 縄文時代

隠川(4)遺跡と隠川(11)遺跡、そして隈無(4)遺跡から、縄文時代早期の貝殻文土器が出土した。遺構の検出こそなかったものの、当市においては最古の遺物といえる。当地域はこれまで、縄文時代前期の遺跡が多いことで知られ、当市域において人が生活し始めるのはそのころであると考えられていた。しかしこうした遺物の出土によって縄文時代早期ごろからすでに人の生活が開始されていた可能性が高いと考えられる。

もっとも人々が定住的生活を営み、集落的様相を呈してくるのは、他の例に漏れずやはり縄文時代前期になってからであろう。なぜならば原子溜池(1)・(2)・(5)遺跡、原子城遺跡、桜ヶ峰(2)・(3)遺跡、隠川(4)・(11)・(12)遺跡、隈無(4)遺跡など、そのころの遺物・遺構が検出される遺跡数が急増するようになるからである。

### 弥生時代・統縄文/古墳時代

隠川(3)遺跡から念仏間式～天王山式期に並行する弥生土器(甕の破片6点)、隠川(12)遺跡のA地区から天王山式系土器に類似する弥生土器の甕が出土し、真言館跡からは天王山式土器に比定される弥生土器の甕の破片が出土している。また、桜ヶ峰(2)遺跡から弥生時代中期後葉～後期と考えられる甕がほぼ1個体と統縄文時代の後北C2・D式土器の破片1点が出土している。隈無(1)遺跡から後北C2・D式土器が約290点、個体数にして20個体以上出土している。隠川(11)遺跡から後北C2・D式土器と古墳時代の古式土師器(壺釜式並行)が出土している。

これまで当市域では皆無に等しかった、弥生時代の土器が広範に出土したことと、北海道に起源をもつ、いわゆる統縄文時代の後北式土器が多量に出土したことは当時期の歴史を考える上で大きな成果であると考えられる。

古墳時代の土師器の出土は県内では稀で、これまでは南小泉式以降のものが多少確認されているのみであったが、隠川(11)遺跡出土の古式土師器はそれを廻り、最古かつ唯一の資料となった。また統縄文と古墳時代の土器が同時に出土したことは県内では新発見であり、統縄文文化人と古墳文化人との接触を暗示しており、非常に重要な資料を提供したことになる。

No.	遺跡番号	遺跡名	所在地 (玉所川東岸)	種別	時代	標高のグラフ					
						標高	20m	50m	70m	100m	150m
1	050-03	原ノ窟	豊成字田ノ窟	散布地	平安	12m					
2	050-03	松代	松代字松代	散布地	縄文、平安	13m					
3	050-25	境山	神山字境山	散布地	平安	25~30m					
4	050-45	野野	神山字野野	散布地	縄文後・後、平安	20m					
5	050-07	野星	神山字野星	散布地	縄文晩、平安	20~25m					
6	050-03	原子遺跡(1)	原子字山元	集落跡	縄文前・後、平安	27~40m					
7	050-04	原子遺跡(2)	原子字山元	散布地	縄文前・後、平安	20~40m					
8	050-05	原子遺跡(3)	原子字山元	散布地	縄文中	30~40m					
9	050-39	原子遺跡(4)	原子字山元	掘跡、散布地	平安	50m					
10	050-40	原子遺跡(5)	原子字萩原	散布地	縄文前・中、平安	25m					
11	050-06	原子城	原子字山元	城跡跡	縄文前・後、平安、中世	30~40m					
12	050-16	山道遺跡	原子字山元	掘跡、散布地	平安	30~40m					
13	050-65	実吉	羽野本沢字実吉	平安集落	縄文、平安、中世、近世	13.5m					
14	050-61	大志(1)	前田野日字大志	散布地	平安	80m					
15	050-61	大志(2)	前田野日字大志	散布地	平安	90~90m					
16	050-91	大志(3)	前田野日字大志	掘跡	平安	105m					
17	050-17	駒ノ沢遺	前田野日字駒ノ沢	掘跡	平安	100m					
18	050-11	砂浜D1号遺	前田野日字前田野日山	掘跡	平安	170m					
19	050-12	砂浜D2号遺	前田野日字前田野日山	掘跡	平安	140m					
20	050-13	砂浜C号遺	前田野日字砂田	掘跡	平安	110m					
21	050-14	砂浜D1号遺	前田野日字砂田	掘跡	平安	120m					
22	050-15	砂浜D2号遺	前田野日字砂田	掘跡	平安	170m					
23	050-16	砂浜E号遺	前田野日字前田野日山	掘跡	平安	170m					
24	050-08	川端	前田野日字川端	散布地	縄文、平安	50m					
25	050-43	実吉堀	前田野日字桜ヶ峰	掘跡	弥生、平安、中世	89m					
26	050-09	桜ヶ峰(1)	前田野日字桜ヶ峰	掘跡、散布地	縄文、平安	65~70m					
27	050-09	桜ヶ峰(2)	前田野日字桜ヶ峰	散布地	縄文前・後、弥生後、縄文晩、平安	60~70m					
28	050-60	桜ヶ峰(3)	前田野日字桜ヶ峰	平安集落	縄文前・後、弥生前・中、平安	55~75m					
29	050-19	張野長根	神子沢字張野	散布地	縄文晩、平安	100m					
30	050-20	羅川(1)	神子沢字羅川	散布地	縄文中・後、平安	50~70m					
31	050-62	羅川(2)	神子沢字羅川	散布地	平安、近世	80~70m					
32	050-63	羅川(3)	神子沢字羅川	堀布地	縄文晩、弥生、近世	50~55m					
33	050-64	羅川(4)	神子沢字羅川	平安集落	縄文前・後、弥生前・中、平安、近世	45~50m					
34	050-65	羅川(5)	神子沢字羅川	散布地	平安	30~40m					
35	050-66	羅川(6)	神子沢字羅川	散布地	縄文、平安	30~40m					
36	050-67	羅川(7)	神子沢字羅川	散布地	平安、近世	40m					
37	050-68	羅川(8)	神子沢字羅川	散布地	縄文、平安	30~40m					
38	050-69	羅川(9)	神子沢字羅川	散布地	縄文	30m					
39	050-70	羅川(10)	神子沢字羅川	散布地	縄文、平安	50~70m					
40	050-71	羅川(11)	神子沢字羅川	散布地	縄文前・後、弥生前、古墳、平安、近世	40m					
41	050-72	羅川(12)	神子沢字羅川	平安集落	縄文前・後、弥生前・後、平安、近世	45~50m					
42	050-18	神子沢堀	神子沢字羅川	散布地、掘跡	縄文中、平安	40m					
43	050-21	神子沢A	神子沢字羅川	掘跡	平安	50m					
44	050-22	神子沢B	神子沢字羅川	掘跡	平安	55m					
45	050-23	神子沢C	神子沢字羅川	掘跡	平安	50m					
46	050-24	神子沢D	神子沢字羅川	掘跡	平安	60m					
47	050-73	羅無(1)	神子沢字羅無	散布地	縄文、縄文晩、平安	25~30m					
48	050-74	羅無(2)	神子沢字羅無	散布地	縄文、平安	20m					
49	050-75	羅無(3)	神子沢字羅無	散布地	縄文、平安	30m					
50	050-76	羅無(4)	神子沢字羅無	散布地	縄文前・後、平安、近世	30m					
51	050-77	羅無(5)	神子沢字羅無	散布地	縄文	35~40m					
52	050-78	羅無(6)	神子沢字羅無	散布地	縄文	35~40m					
53	050-79	羅無(7)	神子沢字羅無	散布地	縄文、平安	50~80m					
54	050-80	羅無(8)	神子沢字羅無	散布地	平安	15~20m					

備考	遺跡の立地	前田野日台地		
		沖積平野 (20m以下)	50~70m	大野池丘陵残跡山塊 (70m以上)
	遺跡数54 (100%)	6 (11%)	35 (65%)	13 (24%)

表4 羅川(2)外遺跡周辺の遺跡とその標高グラフ

このように従来はまるっきり不明であったことが徐々にではあるが、そのペールを脱ぎ出している。いったい当市域における米の生産・流通はどのようなものであったのか、北海道とはどのような交流をしていたのであろうか、興味津々たるところである。しかし当市域の魅力は、何といても須恵器生産の平安時代であろう。そのころの歴史的環境を次項で多少詳しく述べることにする。

## 平安時代

隠川(3)・(4)遺跡や野尻(3)遺跡(浪岡町)などから、外周溝を伴う竪穴住居跡と掘立柱建物跡がセットになった9世紀後半～10世紀前半ごろと考えられる遺構が検出されている。隠川(3)遺跡の例をみるならば、竪穴住居跡を囲むように「U」字状の外周溝を巡らし、住居のカマド側に溝のない部分を設け出入り口とし、そこに掘立柱建物跡を設置している。床面中央に焼土がある竪穴住居跡が確認されたことから考えて、ある種の火を伴う工房の可能性が指摘されている。また、この外周溝の用途は、雨水の流れ込む傾斜と必ずしも対応していないため排水機能としては考えにくく、カマドと出入口に左右されるところから、一棟の住居を意識するための溝、すなわち区画のための溝の可能性が高いようである。また、当地域からは未発見ではあるが、浪岡町周辺では、墓と考えられる多くの円形周溝が発見されている。これも9世紀後半～10世紀前半ごろ営まれていたようである。

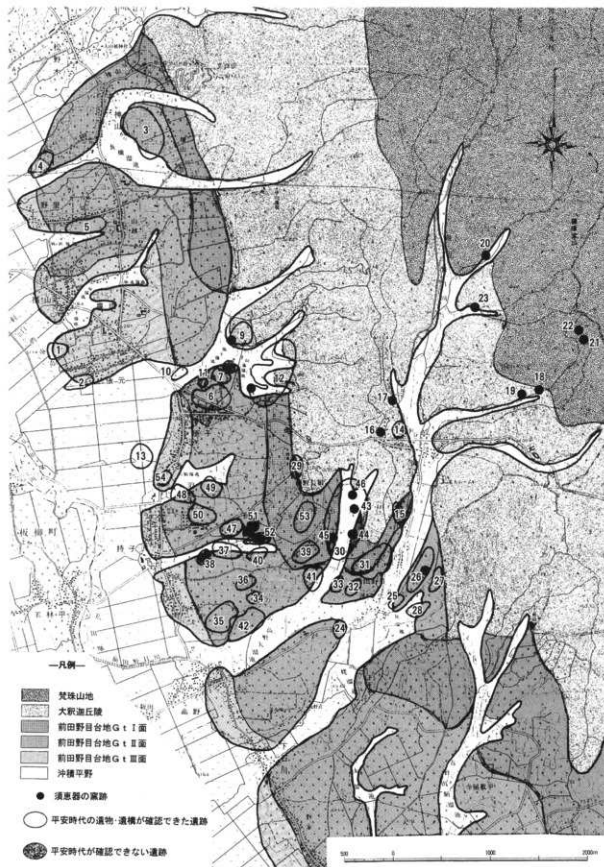
浪岡町の高屋敷館遺跡は、集落全体を環濠で囲んだ10世紀中葉の環濠集落であることが判明した。この高屋敷館遺跡の環濠の機能が、研究者の間で議論の対象となった。代表的主張として防御のための濠とする「防御性集落説」、区画のための濠とし祭祀的要素を重要視した「アジュールの区画領域説」、あるいは製鉄工人集団を隔離し、逃亡を防ぐための濠とする「蛸部屋説？」などいろいろである。結論は未だでない。

しかし、前述した円形周溝や外周溝がやがて高屋敷館遺跡のように集落全体を囲む環濠へと変化したとする見解の示されているところから、高屋敷館の環濠を、筆者は、聖なる祭祀的領域、すなわちアジュールの区画領域とする説を支持したい。もっとも、祭祀的領域区画のための濠であったとしても、不審者や獣などの進入を防ぐ防御的意味合いはあったであろう。

いずれにしろ、現在でこそ五所川原市と浪岡町に行政区画されているものの、古代においては同一地域であったろうから、当地域もこのような歴史的環境に連動していたものと考えられる。

ところで、隠川(4)・(2)遺跡では、住居跡からクロロピットが検出されたこと、また住居跡の土壌から出土した須恵器の窯壁片が胎土分析の結果五所川原領域に納まること等の理由により、須恵器工人の集落跡と考えられている。これらも9世紀後半～10世紀前半の年代が考えられている。本隠川(2)外遺跡も同じような時代と性格の遺跡である。また当地域には須恵器の窯跡も群集し、視点を変えるならば、当地域は多様な遺跡のある特殊地域ということが出来る。ではなぜこの地域には多種多様な遺跡が存在するのであろうか。

第6図に「地形と遺跡の分布概念図」掲げる。これは水野・堀田(1983)両氏による五所川原市七和地域の地形分類図に、筆者が遺跡地図を重ねたものである。ただし、ここで基にした地形分類図は、伊藤昭雄氏が水野・堀田両氏の原因図をトレースし、『実吉遺跡』の報告書に使用したものを孫引きしたものである。筆者は地質学に関しては専門外であり、図の正確さを欠いているかもしれない。そこ



第6図 地形と遺跡の分布概念図

それを補足する意味で周辺遺跡の標高をグラフ化した表4「隠川(2)外遺跡周辺の遺跡とその標高グラフ」を参照して、地形と遺跡の立地をイメージして頂きたいと思う。

水野・堀田両氏は大釈迦丘陵と津軽平野の間に存在する海成段丘を中心とした砂礫台地を前田野目台地と呼び、標高・傾斜・開析状態・構成物を基に、GtⅠ面(上位)、GtⅡ面(中位)、GtⅢ面(下位)の3段に分類している。それぞれの特徴はおおむね次のようである。

GtⅠ面は、標高50～70mで大釈迦丘陵の縁辺に分布し、表面は浸食により波状を呈する。GtⅡ面は、標高30～40m、地形は平坦で、羽野木沢周辺で広く、開析谷には多くの溜池がみられる。GtⅢ面は、標高20～30mで、GtⅡ面の前面に断片的にみられる。

この第6図から、遺跡の多くは、前田野目台地に存在していることが判断できる。これは表4からも確認できる。標高20m以下の沖積平野には全体の遺跡の11%、標高20～70mの前田野目台地には65%、標高70m以上の大釈迦丘陵・梵珠山地には24%が存在していることがわかる。また第6図から、特に遺跡が密に分布している場所は、原子・羽野木沢・持子沢・前田野目の前田野目台地のGtⅡ面であることがわかる。GtⅡ面は、その特徴でも明らかのように、勾配もゆるやかな平坦地であるため、人間が生活するには恰好な場所であったようだ。ただし、前田野目川流域では、大釈迦丘陵の更に奥地の梵珠山地にも遺跡が分布していることも読み取れる。

表4から、標高70m以上の大釈迦丘陵・梵珠山地に存在する遺跡は、犬走(1)遺跡、犬走(2)遺跡、犬走(3)遺跡=窯跡、鞠ノ沢窯跡、砂田B遺跡1号窯、砂田B遺跡2号窯、砂田C遺跡、砂田D遺跡1号窯、砂田D遺跡2号窯、砂田E遺跡、狼野長根遺跡などで、限無(7)遺跡も高いところで80mを指している。しかし、100mを越える立地では犬走(3)遺跡、鞠ノ沢窯跡、砂田B遺跡1号窯、砂田B遺跡2号窯、砂田C遺跡、砂田D遺跡1号窯、砂田D遺跡2号窯、砂田E遺跡と全て須恵器の窯跡であることから、丘陵山地への進出は、おそらく窯業のためと考えられる。

さて五所川原市須恵器窯跡群は、前田野目窯跡群と持子沢窯跡群に大きく分けられ、その活動期は、前者が新しく、後者が古いとされている。今回試みた遺跡の分布論から考えても、古代の早い時期に前田野目台地に連なる大釈迦丘陵を利用した持子沢窯跡群が開始され、その後前田野目川の上流域にある大釈迦丘陵及び梵珠山地を切り開いた前田野目窯跡群へと移行していったという変遷が読み取れ、その新旧の見解は認められるところである。

また須恵器窯跡群は五所川原市による窯跡の分布調査で、従来の前田野目窯跡群と持子沢窯跡群に加えて、原子地区にも1グループが存在することが指摘できるという(工藤清泰氏のご教示による)。それを仮に原子窯跡群としておきたい。この原子窯跡群から出土した須恵器は、持子沢窯跡群に類似しており、かつ、第6図からも判断できるように、前田野目台地と大釈迦丘陵の接点地帯に分布する模様も持子沢窯跡群に類似する。したがって、原子窯跡群は持子沢窯跡群に近い時期に操業していたと考えられる。

このように本隠川(2)外遺跡周辺には、地形的にも緩やかな原野が広がり、前田野目川など水利にも恵まれ、また梵珠山地が生み出す自然の食料・生活物資には半欠かず、人の生活する条件が充分揃っていたものと考えられる。そのため縄文時代以来、同地域周辺には多種多様な遺跡が営まれ、やがて

推定年代	時代区分	津軽地方の主な遺跡(下層は五所川原市域)	特徴・主なできごと	
30,000年前	旧石器	前期	未発見	日本列島に人類が居住し始める
		後期	金木町野野	津軽海峡が成立(約18,000年前)
12,000年前	縄文	草創期	横田町大平山元1	土器の製作使用が始まる
9000年前		早期	木造町神山(3)、黒川(4)、黒川(11)、黒無(4)	尖底土器の使用
6,000年前		前期	森田村石神、青森市三内丸山、市瀬村オセドウ貝塚、原子遺池(1)、原子遺池(2)、原子遺池(5)、原子城遺跡、桜ヶ崎(2)、桜ヶ崎(3)、黒無(4)、黒川(4)、黒川(11)、黒川(12)	平土器の使用 縄文海淵 津軽地方で貝塚や貝塚が形成
5,000年前		中期	森田村石神、青森市三内丸山、今別町山崎1、三蔵村中の平、原子遺池(2)、原子遺池(5)、原子城遺跡、桜ヶ崎(2)、桜ヶ崎(3)、黒川(1)、黒川(4)、黒川(11)、黒川(12)、神子沢館、黒無(4)	厚手・大型土器の使用 黒海の大規模化
4,000年前		後期	弘前市十腰内、青森市小牧野、金木町妻の神(1)、原子遺池(1)、原子遺池(2)、原子城遺跡、桜ヶ崎(2)、桜ヶ崎(3)、黒川(1)、黒川(3)、黒川(4)、黒川(11)、黒川(12)、黒無(4)、黒無	土器の多様化 北海道系土器の南下 カヌバ群の骨董・鹿伏石が顕著
3,000年前		晩期	木造町亀ヶ崎、市瀬村五月女滝、森田村石神、黒無(4)、黒無(11)、黒無(12)、黒無(4)	上层的に優れた黒川土器 透光器土器、ヒスイ、土曜窯 低産地帯が顕著
2,300年前	弥生	前期	弘前市砂沢、松島、黒川(4)、黒川(12)	津軽地方で稲作の開始
2,100年前		中期	田舎館村番柳、黒川(3)、黒川(4)	津軽平野の稲作の大規模化
西暦700年		後期	平賀町鳥海山、黒無(4)、黒無(12)、黒川(12)	稲作の断絶
AD 500年	縄文	木造町神田、青森市小牧野・細越館、平賀町鳥海山、桜ヶ崎(2)、黒川(11)、黒無(11)、黒川(11)	北海道系土器の南下 土師器・須恵器の使用 大化の改新(654年)	
700年	古代	奈良	市瀬村中島、尾上町幸平・原	平城京に遷都(710年) 県内で土師器・須恵器・鉄器を使用、黒無形成
800年		平安	市瀬村福島城、神ヶ沢町志沢、木造町石上神社、黒無(4)、土三盛、黒無(4)、黒無(11)、黒無(12)他 五所川原市東宮野遺跡群(神子沢原東宮野遺跡群・前田野貝須賀遺跡群・原子原東宮野遺跡群)	平安京に遷都(794年) 土師器・須恵器・縄文土器を使用 大規模集落形成 五所川原東宮野の開始
1200年		鎌倉	弘前市復興館・中崎館、青森市内真朝(4)、黒無(4)、黒無(11)、黒無(12)他	鎌倉幕府成立(1192) 城郭形成、かわむけ・海防器の使用
1300年	中世	南北朝	市瀬村十三湊、中里町中里城、青森市八郎、弘前市復興館、黒無(4)、金山館、原子城	室町幕府成立(1336) 陶磁器の消費量が增大 津軽市十三湊の隆盛
1500年		室町	戦国	浪岡町浪岡城、神ヶ沢町福里館、平賀町大光寺新館、黒無(4)、原子城
1600年		安土桃山	東通村浪通り、石道	中国製品の流通、唐津・志野の出現
1700年	近世	前期	弘前市弘前城・野藤、市瀬村十三湊、五田	江戸幕府成立(1603)、近世城下町形成 中国陶磁器の消滅、肥前陶磁器の消費量増大 弘前藩では大規模新田開発積極推進期
		中期	弘前市弘前城・野藤、市瀬村十三湊、常盤村水木館、稲垣村久米川 黒川 浪の平山家住宅 弘前平清水千丁蔵	肥前陶磁器の消費量の最盛期 陶磁器の大衆化時代の到来 弘前藩では新田開発止期 地方窯の開始(弘前では平清水千丁蔵開始)
1800年		後期	弘前市弘前城・野藤、市瀬村十三湊、常盤村水木館、稲垣村久米川 弘前市野戸蔵	肥前系陶器と地方系陶器の両立 地方窯の最盛期(弘前では野戸蔵の隆盛) 弘前藩では堀田復興・小新田開発期
1900年	近代	明治	明治維新 肥前、黒川、浪の平山、新田開発の隆盛	

※西暦0年以前の年代は現在を基準にした推定年代

(編者1993に半澤日記)

表5 五所川原市域の考古年表

平安時代の9世紀後半～10世紀前半を前後して、須恵器生産が地域を代表する一大産業へと発展していったのである。そして、このような歴史的環境に育まれた息吹は、浪岡城や原子城が活躍する中世という次代へと引き継がれていったのである。

【参考文献】

- 青森県教育委員会編（1999）『青森県の遺跡地区』
- 相澤 治・赤羽真由美（1997）『実吉遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第207集
- 相澤 治・赤羽真由美（1997）『桜ヶ峰(2)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第208集
- 木村 高・坂本真弓（1997）『隈無(4)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第209集
- 木村鐵次郎・田澤賢治（1997）『隠川(3)遺跡』 青森県埋蔵文化財調査報告書 第210集
- 工藤清泰（1997）「考古学における境界性—古代・中世の視点から—」『青森県史研究 第1号』
- 木村 高・三林健一（1998）『隠川(4)遺跡・隠川(2)遺跡Ⅰ』  
青森県埋蔵文化財調査報告書 第244集
- 木村 高・中村博文・浅田智晴（1999）『隠川(1)遺跡Ⅰ・隠川(2)遺跡Ⅱ』  
青森県埋蔵文化財調査報告書 第260集
- 犬走窯跡発掘調査(1)（1999）『犬走窯跡発掘調査報告書』



## 第4章 遺跡の概要

隠川(2)外遺跡は五所川原市の南東前田野目川右岸の丘陵地帯に立地し、現状はリンゴ畑である。標高は約42～61mを数え、隠川(4)・02遺跡よりは、比高差にして低位で-3m、高位で+9mと遺跡の比高差はかなり激しいものとなっている。しかし遺物、遺構の集中している場所は標高55m前後の丘陵の緩斜面及び比較的平坦な場所である。

検出された平安時代の遺構は平成10・11年度の2カ年で、住居跡15棟(拡張している住居を2棟として)、土壇35基(焼成遺構も含む)、溝跡14条、方形溝状遺構3条、並列溝状遺構1面であり(第2図)、遺物は土師器・須恵器を中心として、各種土製品、鉄滓等である。その他遺構外からではあるが、旧石器、縄文土器、石器が出土している。

遺物の製造及び遺構の構築された年代は、隠川(4)・02遺跡と同様に、白頭山苦小牧火山灰(以下B-Tmと記す)が、遺構構築面より上位の堆積土や遺構の覆土から検出されている点から、B-Tmの年代を923ないしは946年とするとそれ以前と考えられ、平安時代の中頃9世紀末から10世紀前半と考えられる。

この遺跡の特徴としては、①集落内からの須恵器の出土量が他の一般的な集落跡と比較して、圧倒的に多いこと、②明らかに失敗作と考えられる企んだ須恵器が多数出土している点、③遺跡の立地場所が持子沢A遺跡、持子沢B遺跡、持子沢D遺跡、隈無(7)遺跡、桜ヶ峰遺跡の各窯跡と隣接する点、④須恵器の工人集落跡と推定されている隠川(4)・02遺跡に隣接し、かつ、同様の性格を持つ遺跡(ロクロビットを有する住居跡の検出等)である点、⑤遺跡の開始時期が9世紀末から10世紀初め頃と五所川原市須恵器窯が操業を開始した時期とほぼ同時期であることが挙げられる。以上の点から本遺跡も隠川(4)・02遺跡同様に須恵器工人の集落跡である可能性が高いと考えられる。

次に各種遺構について概略を述べる。住居跡に関しては、隠川(4)・02遺跡で検出されたような掘立柱建物跡等の付属施設をもつ住居跡は検出されず、付属施設としては住居跡内から外に延びる溝跡を有する住居跡が4棟検出されている。

住居跡の基軸方位はすべて南東方向であり、これは隠川(4)・02遺跡の住居跡の基軸方位と一致し、その方位も同一地区では僅差である。また1棟のみであるが、ロクロビット及び土器の原材料と考えられる白色粘土が検出されている。

溝跡では形態別に直線状、方形状、円弧状の3形態の溝跡が検出され、少数の溝跡を除き幅が30～50cm前後と規格が統一されている。いずれの溝も付属施設が確認されなかったために、排水施設として機能していたものと考えられる。

土壇では焼成土壇が検出されたが、いずれの土壇も出土遺物は炭化材のみであり、被熱も充分受けていないことから、機能は不明である。

出土遺物では、住居内からの須恵器、土師器が多量に出土していることから、現在窯跡の須恵器資料が少ないために、その他の隠川遺跡の出土遺物も含めて、須恵器製作開始時期の器種類型を考える上では貴重な資料であると考えられる。

## 第5章 検出遺構と出土遺物

### 第1節 平安時代の検出遺構

#### 1 住居跡

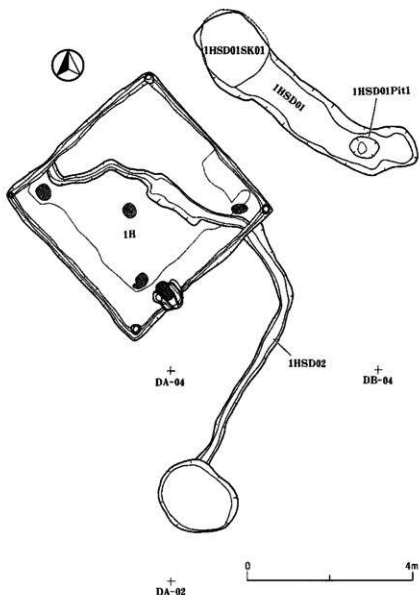
##### 第1号住居跡 [1H](第7・8図)

**検出状況** 本住居はグリッドCZ・DA03、04の緩斜面上に位置し、IV層上面で検出された。外周溝(1HSD01)が付属する。

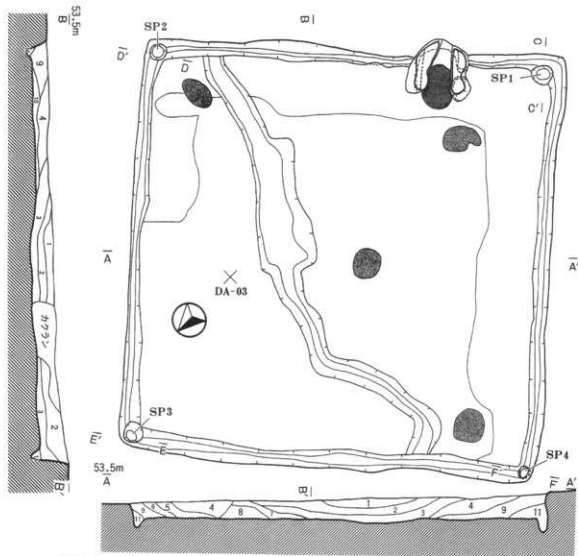
住居西壁から溝(1HSD02)が1条認められた。

**重複** 1HSD02は住居構築時の溝跡で、同時性を示している。

**構造** 規模は459×462cmを測り、平面形はほぼ方形を示す。床面積は16.8㎡で、主軸方位はN-143°-Eである。床面は地山を30~40cm程掘りこんだ後、厚さ4~12cm前後の黒色土のやや混入したロームを主体とした上で、貼床を構築している。幅18~20cm、深さ8~21cmの壁溝が周囲を巡る。支柱穴は住居内の4隅、壁溝内に認められ、SP1~SP4が該当する。規模は小さく半径18.5~20cm、深さ14~30cm程である。貼床直上に炭化物の集中する範囲が4カ所認められる。なお住居内に西から東にかけて貼床の構築し

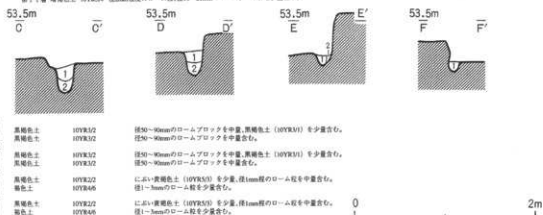


第7図 第1号住居跡(1)

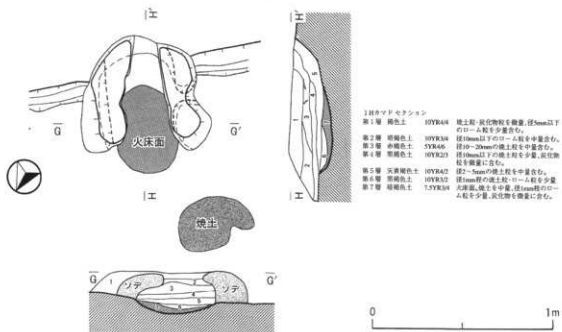


## 1号モザイク

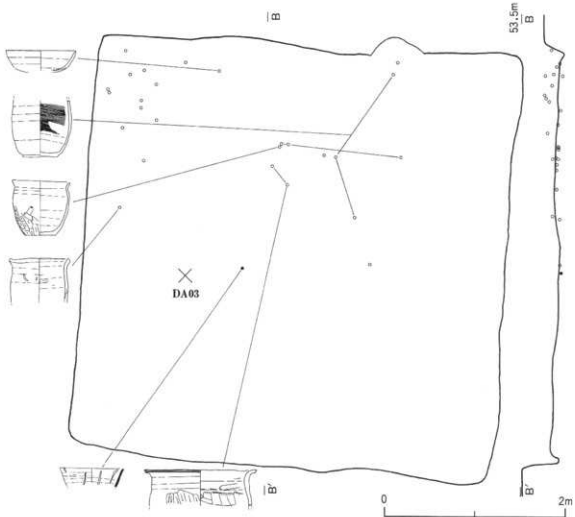
- 第1層 黒褐色土 HVK21 径10～20mmのロームブロックを散見、径1～3mmのローム粒を中量含む。  
 第2層 黒褐色土 HVK22 径10～30mmのロームブロックを、径1～2mmのローム粒を多量に含む。炭化物を散見、径1～2mmの焼土粒を稀散量含む。  
 第3層 黒褐色土 HVK23 径10mm程度のロームブロックを散見、径1mm程度のローム粒を少量含む。黒褐色土 (HVK23) 、径1～2mmの炭化物を少量含む。  
 第4層 黒褐色土 HVK24 径3mm程度のローム粒を少量、径1～2mmの炭化物を中量含む。  
 第5層 暗褐色土 HVK25 径15mm程度のロームブロックを散見、径1mm程度の炭化物を少量含む。  
 第6層 黒褐色土 HVK26 径10mm程度のローム粒を、径1mm程度の炭化物を少量含む。  
 第7層 暗褐色土 HVK27 径10mm程度のローム粒、黒色土 (HVK27) を少量含む。  
 第8層 黒褐色土 HVK28 径1～5mmのローム粒を中量、径1mm程度の炭化物を散見を含む。  
 第9層 黒褐色土 HVK29 径10～20mmのロームブロックを散見、径1～5mmのローム粒を中量含む。黒色土 (HVK29) 、径1mm程度の炭化物を少量含む。  
 第10層 黒褐色土 HVK44 径20～30mmのロームブロックを多量に含む。  
 第11層 暗褐色土 HVK34 径2mm程度のローム粒、径10～20mmのロームブロックを少量含む。



第8図 第1号住居跡(2)



第9図 第1号住居跡カマド



第10図 第1号住居跡出土遺物分布図

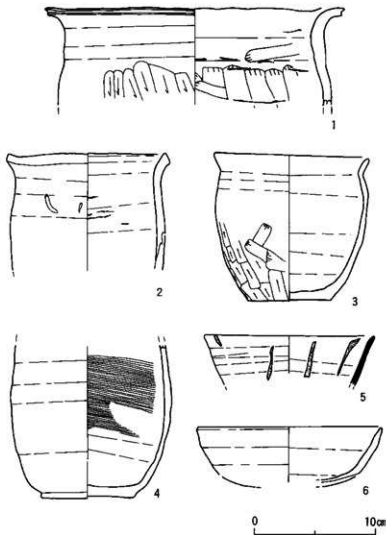
ていない場所に1条の掘り込み面が形成され、それが住居外へと延び1HSD02を形成している。

**覆土堆積状況** 覆土は11層確認され、下層ではロームブロック・炭化物の混入が多く見られることから使用時もしくは、廃絶時の人為的堆積が考えられるが、上層は自然堆積によるものと考えられる。  
**カマド(第9図)** 南東壁に構築されており、壁の南側に位置する。残存状況は不良であり、煙道部は検出されなかった。住居内側壁部(ソデ)と火床面が検出された。ソデは褐灰色粘土で構成されており、ハの字形を呈する。使用頻度は少なく、やや軟質のものである。覆土は7層確認され、第5層は天井崩落土であり、住居廃絶後ある程度期間が経過したのち崩落したことが判明した。また火床面の形成状況から使用頻度が低いものと考えられる。

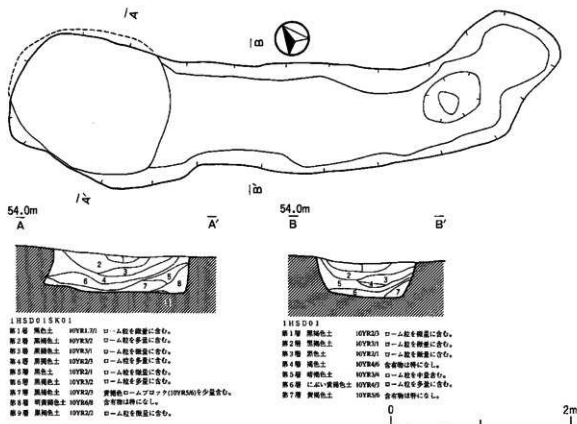
**遺物の出土状況(第10図)** 遺物の出土量は多くないが、住居の東壁際付近、及びカマド前庭部付近に遺物の集中がみられる。東壁付近の遺物はレベルが高いため、住居付近からの流入であると考えられる。全体に土師器の出土数が多く、須恵器は1点のみである。

#### 出土遺物の概要 復元可能な個

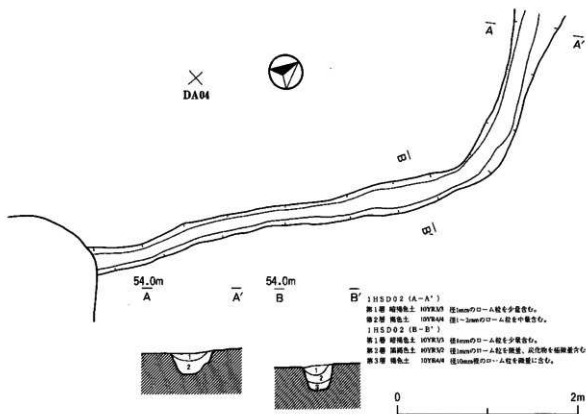
体は第11図に示すように全部で6個体である。1は土師器の長胴壺であり、ロクロ成形後、外面にケズリ調整、内面にはナデ調整が施されている。2～4は土師器の小型壺であり、いずれもロクロ整形がなされている。底面の様相は3が回転糸切り痕、4が砂底である。6は土師器の坏であり、ロクロ成形のみで無調整である。酸化軟質であり、一部外面に被熱してスガが付着している。5は須恵器の坏であり、ロクロ成形である。焼成は還元硬質であり、重ねて煮入れたときに付着した火禿痕がみられる。なお5、6は底部欠損のため底面の調整は不明である。



第11図 第1号住居跡出土土器



第12図 第1号住居跡付属外周溝



第13図 第1号住居跡付属外延溝

## 第1号住居跡付属外周溝 [1 HSD01] (第12図)

**検出状況** 1Hの北側、緩斜面の上部、グリッドDA・DB02、03にやや外反する弧状の形で検出された。隠川(4)遺跡で見られたように複数の溝によりコの字形にはならず、1条の溝しか検出されなかった。北西端に土塊(1 HSD01SK01)、南東隅にピット(1 HSD01Pit01)が検出された。その両端を結ぶような形で溝が構築されている。

**構造** 1 HSD01の規模は長さ437cm、幅90~136cm、深さ35~39cmを測る。1 HSD01SK01の規模は長径182cm、短径144cm、深さ30~42cmを測り、形態は不整形円形を呈する。北東側では横に掘り込んでいる。1 HSD01Pit01の規模は長径71cm、短径48cm、深さ14~18cmを測り、楕円形を呈する。これらの土塊は隠川(4)遺跡の1 HSD01と同様の粘土採掘坑の可能性が高いと考えられる。

**重複** 1 HSD01SK01、1 HSD01、1 HSD01Pit01の順で遺構が構築されたことが確認面及び堆積層の層序関係から確認された。

**覆土堆積状況** 住居跡と同様、自然堆積のものであると考えられる。

**遺物の出土状況** 少数の土師器、須恵器片が出土したにすぎない。

## 第1号住居跡付属外延溝 [1 HSD02] (第13図)

**検出状況** グリッドCZ・DA04に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 1Hの住居内床面から住居外へと南東方向からしだいに西へと蛇行し、南へと延び、SK07と重複する溝跡である。長さ11m12cm、幅21~58cm、深さ10~27cmを測る。排水の目的で構築されたものと考えられる。

**重複** 1H、SK07と重複関係があり、確認面及び堆積層の観察から1Hとは同時期、SK07よりも古いことが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は4層確認され、ローム粒の混入が若干認められるものの自然堆積であると考えられる。

## 第2号住居跡 [2H] (第14図)

**検出状況** グリッドFC、FD19に位置し、IV層上面、調査区外に約半分程かかった状態で検出された。

**構造** 規模は1辺の長さのみであるが304cmを測り、推定床面積8.9㎡、主軸方位はN-138°-Eである。各コーナーの形態から隅丸方形であると考えられる。地山を42~61cm程掘り下げた後、厚さ4~8cm前後の黒色土のやや混入したロームを主体とした土で、貼床を構築している。壁溝・支柱穴は検出されず、1Hと同様に住居中央部に一条の溝(2 HSD01)が確認され、それが南西壁を貫して住居外へと延びている。

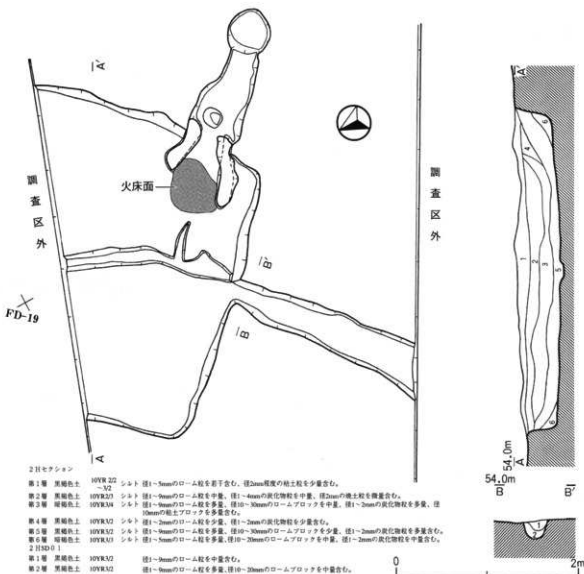
**覆土堆積状況** 上層は自然堆積層であるが、中位から下位にかけて、ロームの混入が目立つようになり、特に下位では多量のロームが認められ、住居使用時もしくは、廃絶時の壁面崩落土の可能性が高いと考えられる。

**カマド**(第15図) 南東壁に構築されており、壁の南側に位置する。残存状況は良好で、煙道部の上部は削平されていたが、煙道部掘り込み面、煙出部及び煙道部にピット状の掘り込み面、住居内の側

壁部(ソデ)と火床面が確認され、火床面から煙出部までの主軸方位はN-136°-E、水平距離は233cmを測る。ソデはハの字形をしており、褐色の粘土を素材として構築されている。ソデ、火床面ともに煉瓦状に硬質となっており、強い被熱を受けたことを示している。覆土は13層確認され、下層付近に天井崩落土が検出されていることから、住居廃絶時もしくは廃絶後期間をおかないで天井部が崩落したことがわかる。

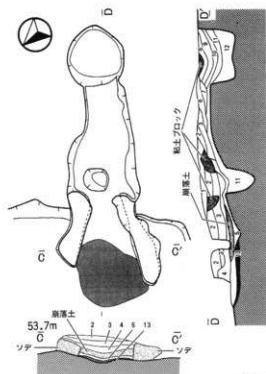
**遺物の出土状況(第16図)** 検出面全域にわたって遺物の出土がみられるものの、住居中央部の遺物は覆土上層より出土したものであり、2日本来の遺物というよりは外から流入してきた遺物と考えられる。2日本来の遺物と考えられるものとして、カマドの支脚として使用されたと考えられる倒立した坯および小型壺、床面直上より出土したミニチュア、土師器環が挙げられる。

**遺物の概要** 個体復元可能な遺物は第17図に示すように全部で18個体である。1~4は土師器の小型甕であり、1以外口クロ成形である。3の底面はケズリ調整が施されている。5~8は土師器の坏



第14図 第2号住居跡

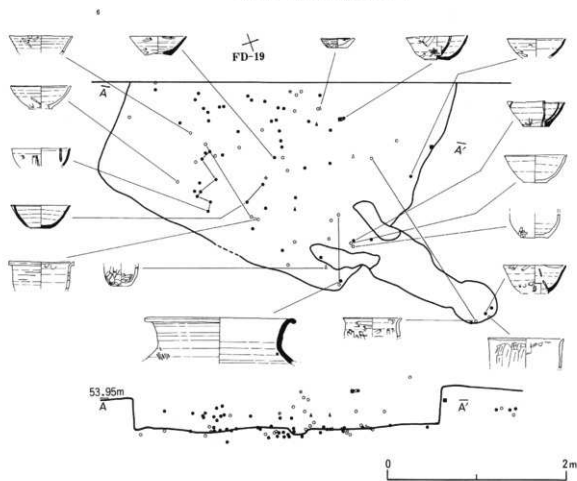




2階カマド

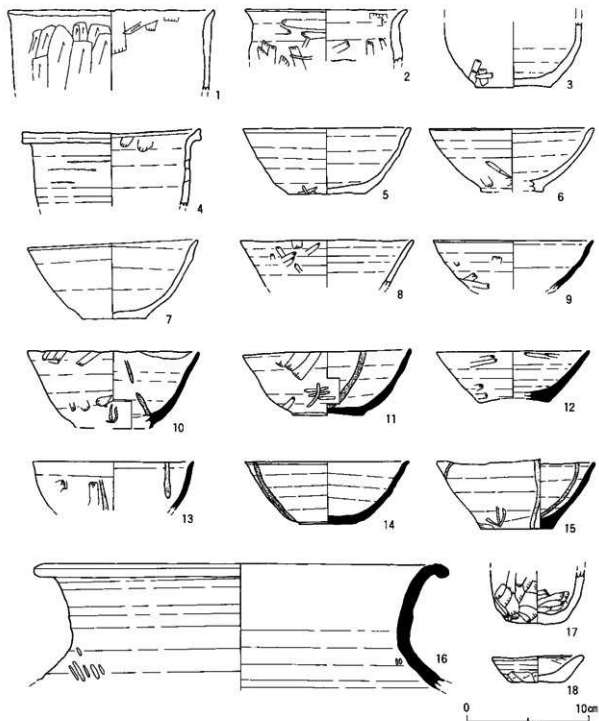
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 埋25cm以下のローム状、埋1~25cmの炭化物を少量含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR3/2 埋1~25cm以下のローム状を中量、埋1~25cmの炭化物を少量含む。
- 第3層 暗褐色土 10YR3/3 埋1~25cmのローム状、埋15cm以下の焼土粒を微量に含む。
- 第4層 暗褐色土 10YR3/3 埋1~25cmのローム状を少量、埋15cm以下の焼土粒を少量含む。
- 第5層 暗褐色土 7.5YR3/3 埋15cm以下のローム状を微量、埋1~25cmの焼土粒を少量、埋1~25cmの炭化物を少量含む。
- 第6層 暗褐色土 10YR3/4 埋1~25cmのローム状を少量含む。
- 第7層 暗褐色土 10YR3/5 埋15cm以下のローム状、船土粒を少量含む。
- 第8層 暗褐色土 10YR3/2 埋1~25cmのローム状を少量、埋1~25cmの炭化物を少量、埋15cm以下の焼土粒を微量に含む。
- 第9層 黒褐色土 7.5YR3/2 埋1~25cmのローム状を少量、埋1~25cmの炭化物を少量、埋1~25cmの炭化物を少量含む。
- 第10層 黒褐色土 10YR2/3 埋1~25cmのローム状を微量に含む。
- 第11層 黒褐色土 10YR3/2 埋1~25cmのローム状を少量、埋15cm程度の焼土粒を微量に含む。
- 第12層 暗褐色土 10YR3/4 埋15~25cmのローム状を少量、埋1~25cmの炭化物を少量含む。
- 第13層 赤褐色土 5YR3/4 赤褐色、暗褐色粘土 (10YR3/3) を中量含む。

第15図 第2号住居跡カマド



第16図 第2号住居跡出土遺物分布図

であり、ロクロ成形であり、底面の判明するものはいずれも回転糸切痕を留めている。9～15は須恵器の坏であり、10・11・15にはへら記号が、10・11・13～15には火罨痕が認められる。底面の調整は11・12・14が回転糸切痕を留めており、15は回転糸切り離後、ナデ調整が施されている。16は須恵器大甕であり、口縁部から頸部にかけて丁寧にロクロナデが施され、体部上半は平行タキの後、ロクロナデが施されている。17・18はミニチュア土器で17は甕もしくは鉢形の手づくね土器で、内外面ともナデ調整が、底面はケズリ調整が施されている。18は皿形でロクロ成形後体部下



第17図 第2号住居跡出土土器

外面に粘土を張り付け厚みを増した後、焼成後ケズリ調整が施されている。底面は回転糸切り離した後、ケズリ調整が施されている。

### 第2号住居付属外延溝 [2HSD01]

**検出状況** 2号住居跡の南西壁の中央付近から南西方向へのびる溝跡であり、調査区内において長さ214cm、幅29～63cm、深さ14～20cmを測る。住居跡の壁面の堆積状況の観察より、住居跡内の堆積土と同様の堆積状況を呈しているため、住居に付属する溝跡と考え、住居内に浸入した水を排水するための溝跡ではないかと考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は2層確認され、自然堆積であると考えられる。

### 第3号住居跡 [3H] (第18図)

**検出状況** グリッドFB・FC18・19に位置し、確認面はⅢ層である。

**構造** 正確な規模は不明であるが、長さ237cm、深さ30～37cmを測る。推定床面積5.65㎡、主軸方位はN-120°-Eである。検出面の平面形は各コーナーがやや丸みがあった不整形を呈する。掘り込み面が地山直上までであり、ロームの殆ど混入しない黒色土を利用して、厚さ2～12cm程の貼床を構築している。検出面では殆ど確認できなかったが、セクション面において壁溝が確認された。Pitは住居内外で6基確認され、いずれが3Hに対応する柱穴であるかは不明である。

**重複** 4Hの住居の北西壁を南東方向に縮小して住居の形態を変更していることがセクションにより観察され、新たに縮小した住居を3Hとし、4Hから3Hへの住居の移行が窺える。

**覆土堆積状況** 平成9年度の試掘調査の際、既に壁は削平されており、貼床及びカマド部分のみ残存するだけであったが、調査区外のセクションによって覆土は8層確認され、各層において多量のローム粒を含んでいるが、黒色土を基調とした自然堆積であると考えられる。

**カマド**(第19図) 南東壁に構築されており、壁の南側に位置する。残存状況は不良で、煙道部は削平されて残存しておらず、ソデのみが確認されたが、形態は壁面より垂直方向に住居内に伸びており、各ソデは平行である。また火床面も殆ど観察できず、僅かに焼上粒、微細な炭化物の混入する床面を火床面と想定した。ソデは褐白色の粘土を素材として構築されており、あまり被熱を受けてない状態なのか軟質であった。

**遺物の出土状況**(第20図) 試掘により埋土は既に削平されていたので床面の遺物の出土状況は不明であるが、カマド焼成部付近に遺物の集積がみられる。

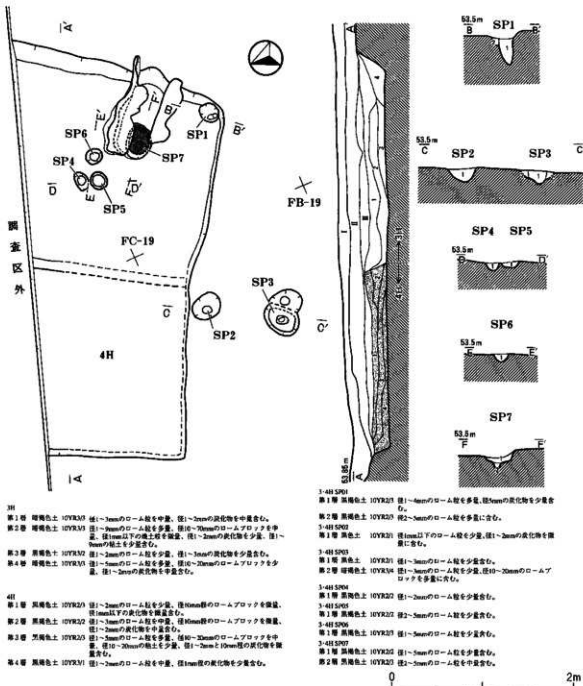
**遺物の概要** 復元可能な遺物は第21図に示すように5点である。1・2は土師器の小型甕であり、1・2ともにロクロ調整が施されている。1は頸部にヨコナデ、体部上半にナデ調整が施されている。3・4は須恵器の坏であり、いずれもヘラ記号が刻まれている。3の底面は回転糸切り離した後、ナデ調整が施され、4の底面は回転糸切り痕を留めている。5はミニチュア土器でありロクロ成形後、ナデ調整が施されている。底面はナデ調整が施されている。

第4号住居跡 [4H] (第18図)

検出状況 グリッドFB・FC18・19に位置し、確認面はⅢ層であり、3H同様調査区外に2分の1程掛かった状態で検出された。

構造 正確な規模は不明であるが、長さ352cm、深さ21~30cmを測る。推定床面積12.4㎡、主軸方位はS-120°-Eである。検出面の平面形はほぼ方形になると考えられる。3H同様掘り込み面は地山直上であり、ロームの殆ど混入しない黒色土を利用して厚さ2~5cm程の貼床を構築している。

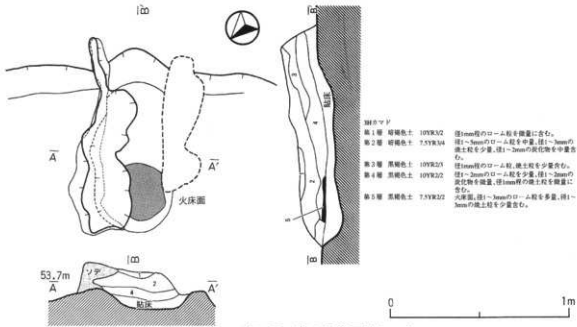
重複 3Hで述べたように3Hを縮小する以前の住居である。



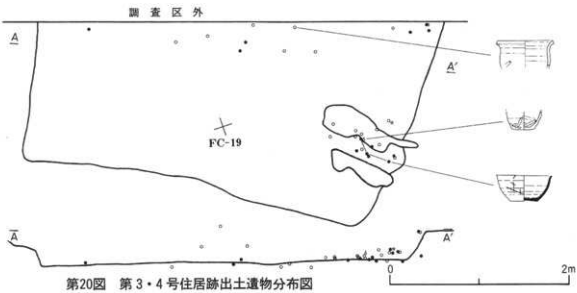
- 3H
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 厚1~3mmのローム粒を中量、径1~2mmの炭化物を中量含む。
  - 第2層 暗褐色土 10YR3/3 厚1~9mmのローム粒を多量、径10~20mmのロームブロックを少量、径1mm以下の炭化物を少量、径1~2mmの炭化物を少量、径1~2mmの粘土を少量含む。
  - 第3層 黒褐色土 10YR3/2 厚1~2mmのローム粒を少量、径1~3mmの炭化物を少量含む。
  - 第4層 暗褐色土 10YR3/3 厚1~5mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームブロックを少量、径1~2mmの炭化物を少量含む。
- 4H
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 厚1~2mmのローム粒を少量、径10mm程のロームブロックを少量、径1mm以下の炭化物を少量含む。
  - 第2層 黒褐色土 10YR2/2 厚1~3mmのローム粒を中量、径10mm程のロームブロックを少量、径1~2mmの炭化物を少量含む。
  - 第3層 黒褐色土 10YR2/3 厚1~5mmのローム粒を多量、径10~20mmのロームブロックを少量、径10~20mmの粘土を少量、径1~2mmと10mm程の炭化物を少量含む。
  - 第4層 黒褐色土 10YR2/1 厚1~2mmのローム粒を中量、径1mm程の炭化物を少量含む。

- 3-4H SP1
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 厚1~4mmのローム粒を少量、径5mmの炭化物を少量含む。
  - 第2層 黒褐色土 10YR2/3 厚2~5mmのローム粒を少量含む。
- 3-4H SP2
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 厚1mm以下のローム粒を少量、径1~2mmの炭化物を少量含む。
- 3-4H SP3
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 厚1~3mmのローム粒を少量含む。
  - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 厚1~3mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームブロックを少量含む。
- 3-4H SP4
- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 厚1~2mmのローム粒を少量含む。
- 3-4H SP5
- 第1層 黒褐色土 10YR2/2 厚2~5mmのローム粒を少量含む。
- 3-4H SP6
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 厚1~3mmのローム粒を少量含む。
- 3-4H SP7
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 厚1~5mmのローム粒を少量含む。
  - 第2層 黒褐色土 10YR2/3 厚2~5mmのローム粒を少量含む。

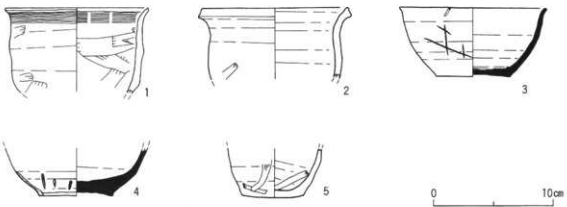
第18図 第3・4号住居跡



第19図 第3号住居跡カマド



第20図 第3・4号住居跡出土遺物分布図



第21図 第3・4号住居跡出土土器

**覆土堆積状況** 調査区外セクション図より、覆土は3層観察され、人為的堆積層であり、3Hを構築するさいに埋め戻したものと考えられる。

**カマド** カマドは3H改築時に破壊されたものと考えられ、3Hのカマドのソデより、北西方向へと20~30cmほどずれた位置に、ソデの底面付近のみ確認されたにすぎない。3Hのカマドの貼床面下から火床面のみが検出された。以上のことから4Hから3Hへ住居を改築した時に4Hのカマドを壊し、一旦貼床を構築した後に3Hのカマドが構築され、使用回数が少ない(火床面が形成されない)内に廃絶されたものと考えられる。

**遺物の出土状況** 少数の須恵器片、土師器片が出土しているにすぎない。

#### 第5号住居跡 [5H](第22図)

**検出状況** グリッドFFD・FE20、21に位置し、確認面はHリング畑部分では表土直下に貼床のみが確認され、道路部分ではIV層上面で確認された。

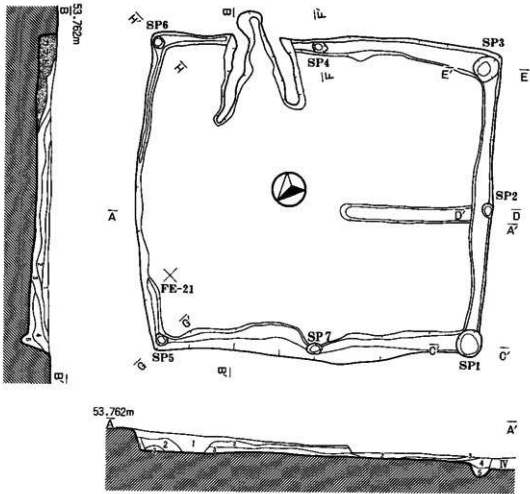
**構造** 規模は長辺392cm、短辺364cmを測り、不整な方形を呈する。床面積は10.9㎡、主軸方位はN-136°-Eである。2H同様やや小型の住居である。幅19~30cm、深さ14~29cmの壁溝が北東壁の一部を除いて周囲を巡り、1Hと同様にその壁溝内に主柱穴と考えられるピットが7基確認された(SP1~SP7)。また住居中央付近に幅16~20cm、深さ4~7cmを測る一条の溝が走り、間仕切り道構ではないかと考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は農道部分でのみ5層確認され、黒褐色を基調としたシルト質の堆積土で構成されており、微量のローム粒及びロームブロックが混入するが、自然堆積であると考えられる。

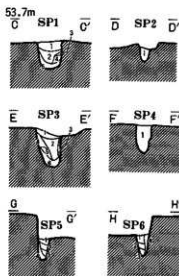
**カマド(第23図)** 南東壁西側部分に構築されており、覆土は4層確認された。ソデの材質は白色粘土が使用されており、使用頻度が低いためか軟質である。また火床面も殆ど確認されなかった。煙道部は主軸N-128.2°-Eであり、カマドの位置する壁面を掘り込んで形成されて、住居外部に行くにつれてゆるやかに立ち上がる構造である。残存する火床面から煙道部の水平距離は112cmであり、煙出部の床面はカマドの焼成不良に比べると、比較的焼成が良好で硬質であった。

**遺物の出土状況(第24図)** 住居西側部分は煙道成の際削平されているため詳細は不明であるが、カマド付近に遺物の集中が認められるのみで他は分散した状況であり、器種ごとのまとまりも認められなかった。接合状況はカマド付近で接合するものが多く認められ、遺物間の距離は最小で8cm、最大で297cmを測る。

**遺物の概要** 個体復元可能なものは第25図に示すように全部で9点であった。1~4は土師器の長胴甕であり、いずれもロクロ成形が認められる。いずれの個体もロクロ成形後上部半から底部にかけて外面はケズリ調整、内面はナデ調整が施されている。1・3・4には頸部外面に横ナデが施されている。5・6は土師器の小型甕であり、5はロクロ成形で、底面には回転糸切痕を留めている。6は手づくね土器で内外面ともナデ調整が施されている。7は土師器の坏でありロクロ成形後、内面にナデ、ケズリ調整が施されている。底面は回転糸切痕を留めている。8は須恵器の坏であり、ロクロ成形のみである。内外面に火禿痕が認められる。9は須恵器の長頸甕であり、頸部と体部を個別に製作したのち、接合しており、その接合部に丁寧な指ナデ調整が施されている。



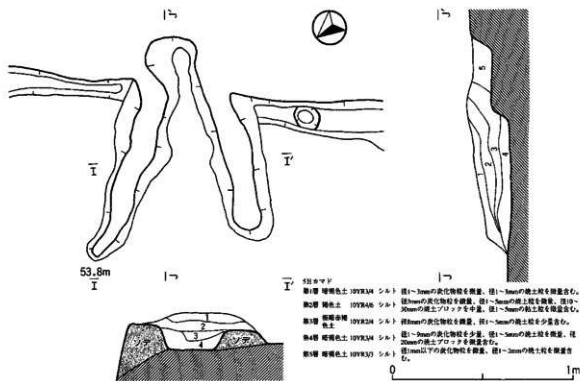
3段セクション			
第1層 黒褐色土	10YR3/0	シルト	径1~3mmのローム粒を散見。径1~3mmの炭化物粒を散見含む。
第2層 黒褐色土	10YR2/0	シルト	径1~3mmのローム粒を散見。径10~30mmのロームブロックを散見。径1~3mmの炭化物粒を散見含む。
第3層 黒褐色土	10YR2/0	シルト	径1~3mmのローム粒を散見。径1~3mmの炭化物粒を少量含む。
第4層 黒褐色土	10YR3/0	シルト	径1~3mmのローム粒を少量。径10~30mmのロームブロックを中量。径1~3mmの炭化物粒を散見含む。
第5層 黒褐色土	10YR2/0	シルト	径1~3mmローム粒を少量。径3mm以下の炭化物粒を散見含む。



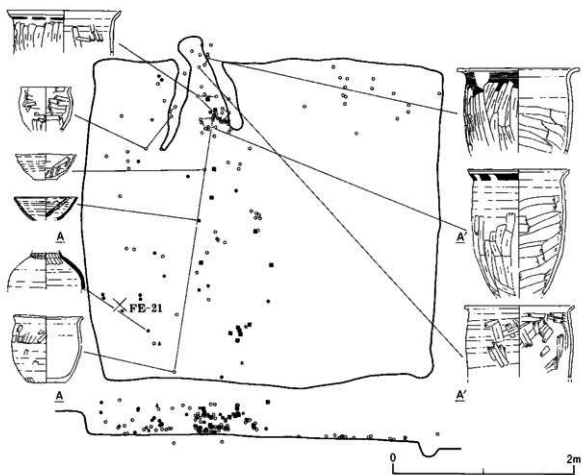
5H SP4	第1層 黒褐色土	10YR3/0	シルト	ローム粒を少量含む。	
	第2層 にごい黄褐色土	10YR4/0	シルト質粘土	細かいローム粒を比較的多く含む。	
	第3層 黒褐色土	10YR3/0	シルト	含有物は特になし。	
	第4層 黒褐色土	10YR4/0	シルト	ロームブロックを中量含む。	
	第5層 にごい黄褐色土	10YR4/0	シルト質粘土	ローム粒、ロームブロックを多量に含む。	
5I SP2	第1層 にごい黄褐色土	10YR4/0	シルト質粘土	ローム粒、ロームブロックを多量に含む。	
	5I SP3	第1層 黒褐色土	10YR2/0	シルト	含有物は特になし。
	第2層 暗褐色土	10YR2/0	シルト	含有物は特になし。	
	第3層 にごい黄褐色土	10YR4/0	シルト質粘土	細かいローム粒を若干含む。	
	第4層 黒褐色土	10YR3/0	シルト	径1~3mmのローム粒を中量含む。	
	第5層 にごい黄褐色土	10YR4/0	シルト質粘土	ローム粒を多量に含む。	
	第6層 にごい黄褐色土	10YR4/0	シルト質粘土	径10~20mmのロームブロックを多量に含む。	
	5I SP5	第1層 にごい黄褐色土	10YR4/0	シルト質粘土	ローム粒、ロームブロックを多量に含む。
	第2層 暗褐色土	10YR3/0	シルト	径1~3mmのローム粒を中量含む。	
	第3層 暗褐色土	10YR3/0	シルト	径1~3mmのローム粒を中量。径10mmのロームブロックを中量含む。	
	第4層 暗褐色土	10YR4/0	シルト質粘土	径1~3mmのローム粒を少量。径10mmのロームブロックを少量含む。	
	第5層 暗褐色土	10YR3/0	シルト質粘土	径3mmのローム粒を少量。火山灰を少量含む。	
	第6層 暗褐色土	10YR3/0	シルト質粘土	径1~3mmのローム粒を中量。径10~20mmのロームブロックを少量含む。	



第22図 第5号住居跡

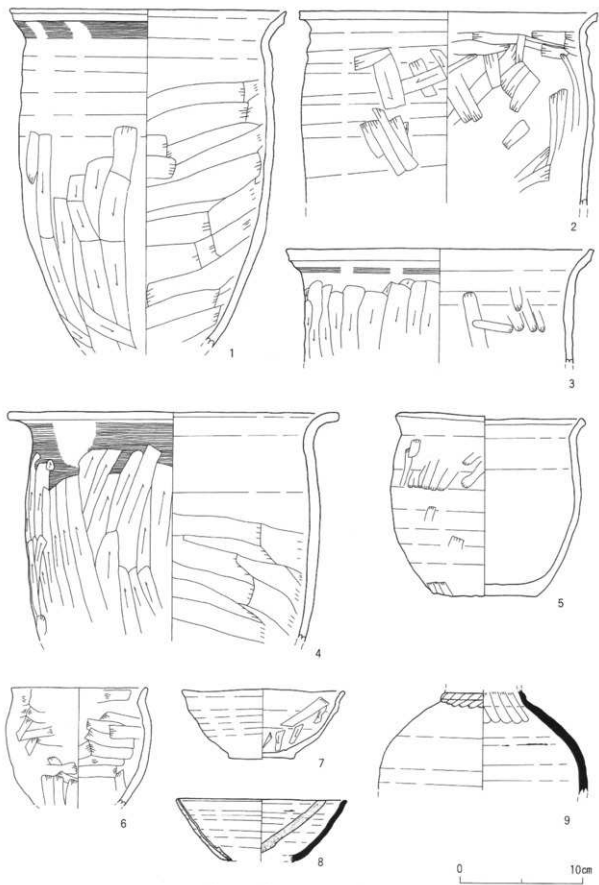


第23図 第5号住居跡カマド



第24図 第5号住居跡出土遺物分布図





第25図 第5号住居跡出土土器

## 第6号住居跡 [6H](第26図)

**検出状況** グリッドFF・FG22に位置し、IV層上面で確認された。住居の2分の1程度が調査区外に掛かっている。

**構造** 正確な規模は不明であるが、一辺の長さが385cm、確認面からの深さ15～26cmを測る。検出面からはほぼ隅丸方形の平面形であると考えられる。検出面においてカマド、壁溝、柱穴は確認されなかった。

**覆土堆積状況** 覆土は8層確認され、自然堆積層であると考えられる。

**遺物の出土状況(第27図)** 検出面のほぼ全体にわたって少数の遺物が出土している。接合個体は1個体でその距離は186.6cmである。

**遺物の概要** 復元可能な個体は第28図に示すように2個体である。1は土師器の小型甕であり、口縁部が強く外反している。若干の指ナデがみられるもののロクロ成形のみで、底面も回転糸切痕を留めている。頸部内面にススの付着がみられ、煮炊き用に使用されたものと考えられる。2は還元硬質の須恵器の環であり、ロクロ成形後体部下半にヘラ記号が刻まれている。

## 第7号住居跡 [7H](第29図)

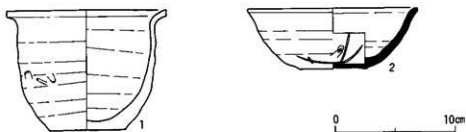
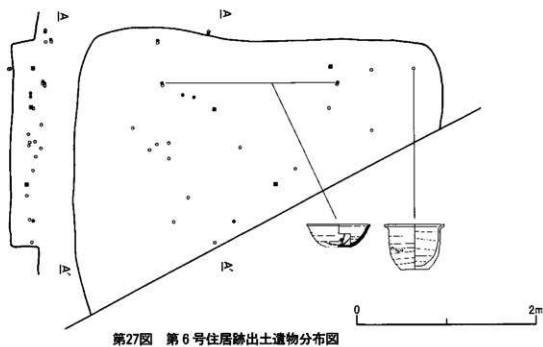
**検出状況** グリッドGP23・GQ22、23に位置し、IV層上面で確認された。標高60m前後であり、本遺跡では最も標高の高い場所に存在する住居跡である。住居の3分の1程度が調査区外に掛かっている。

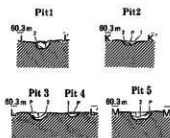
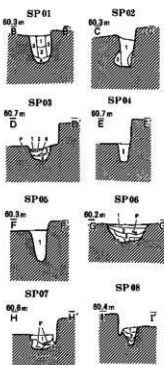
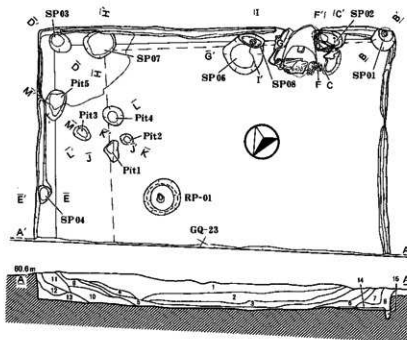
**構造** 正確な規模は不明であるが、1辺の長さが580cm、確認面からの深さ6.7～67.7cmを測る。検出面からはほぼ隅丸方形の平面形であると考えられる。推定床面積は31.3㎡、主軸方位はN-148°-Eである。一部検出されない部分もあるが、ほぼ全体に深さ6.3cm～31.5cmの壁溝が巡っている。柱穴は8基検出され、貼り床面からSP01、02、03、04、貼り床下からSP05、06、07が検出され、最低でも1回の建て替えがあったことが窺える。また貼り床下からは土壌2基(7HSK01、02)が検出され、建て替え以前の付属施設の可能性が高い。住居内中心部より内側にずれた位置にロクロピット(7HRP01)が検出された。また、南西壁際には土器制作に使用する目的であると考えられる粘土が住居廃絶後に投棄された状態で検出された。上記のことから当住居は生活の場兼、工房跡の可能性が高いと考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は15層確認され、壁際付近にはロームブロックの混入が目立つが、これは住居廃絶後の壁面崩落土であると考えられる。黒色～黒褐色土を基調とした含有物のあまりない自然堆積であると考えられる。

**カマド(第30図)** 焼き口部にブロック状に切り出した凝灰岩及び丸石を使用して、支柱及び天井高架材としている。焼成部及び煙道部には通常のカマドと同様に粘土が使用されている。覆土は12層確認され、自然堆積であると考えられる。火床面もよく発達しており、当遺跡の住居の中でも使用頻度が高いカマドである。

7HRP01(第31図左) 住居の中央部よりやや西側に位置し、覆土は9層確認された。直径62.5cmを測る。円形を呈し、確認面より深さ53.5cm掘り込んだ後に、厚さ22～24.6cmの粘土をロクロ軸受け部





7号セグメント

第1層	褐色土	10YR1.7/3	シルト	含有物は特になし。
第2層	褐色土	7.5YR2/3	シルト	径1mm以下のローム粒を中量含む。
第3層	褐色土	10YR2/3	シルト	径1~2mmのローム粒を中量含む。
第4層	灰褐色土	10YR2/2	シルト質粘土	径1~5mmのローム粒を少量含む。
第5層	褐色土	7.5YR1.7/3	シルト	径1mm以下のローム粒を少量含む。
第6層	褐色土	10YR4/6	シルト	径1~5mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームブロックを少量含む。
第7層	灰褐色土	10YR2/6	シルト	径10~30mmのロームブロックを少量含む。
第8層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	径10~30mmのロームブロックを少量含む。
第9層	にんい質褐色土	10YR4/3	シルト	径1~2mmのローム粒を少量、径10~30mmのロームブロックを少量含む。
第10層	にんい質褐色土	10YR4/3	シルト	径2mmの焼土粒を少量含む。
第11層	にんい質褐色土	10YR2/6	シルト	径1~5mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームブロックを少量含む。
第12層	にんい質褐色土	10YR4/3	シルト質粘土	径10~15mmのロームブロックを少量含む。
第13層	灰黄褐色土	10YR4/2	シルト質粘土	径10~15mmのロームブロックを少量含む。
第14層	褐色土	10YR4/6	シルト質粘土	径10~30mmのロームブロックを少量含む。粘り強
第15層	褐色土	10YR4/6	シルト	径30mmのロームブロックを少量含む。

7号P01

第1層	褐色土	10YR4/6	シルト	径10~30mmのロームブロックを中量含む。
第2層	暗褐色土	10YR2/2	シルト	径10~30mmのロームブロックを中量含む。
第3層	灰褐色土	10YR2/2	シルト質粘土	径10~30mmのロームブロックを中量含む。
第4層	暗褐色土	10YR2/2	シルト	径10~30mmのロームブロックを中量含む。

7号P02

第1層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質粘土	径2mmのローム粒を少量含む。
第2層	褐色土	10YR4/6	シルト質粘土	径2mmのローム粒を少量含む。

7号P03

第1層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質粘土	径10~30mmのロームブロックを少量含む。
第2層	褐色土	10YR4/6	シルト質粘土	径1~5mmのローム粒を少量、土器片を含む。
第3層	暗褐色土	10YR2/2	シルト質粘土	径1~5mmのローム粒を少量、土器片を含む。
第4層	褐色土	10YR4/6	シルト質粘土	含有物に特になし。
第5層	褐色土	10YR4/6	粘土	粘土ブロックの層

7号P04

第1層	褐色土	10YR4/6	シルト	径2mmのロームブロックを中量含む。
第2層	褐色土	10YR4/6	シルト	径30mmのロームブロックを中量含む。

7号P05

第1層	褐色土	10YR4/6	シルト	径30mmのロームブロックを中量含む。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質粘土	径5mmのローム粒を中量含む。
第3層	暗褐色土	10YR2/2	シルト	径1~5mmのローム粒を少量、土器片を含む。

7号P06

第1層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質粘土	ロームを少量含む。
第2層	暗褐色土	10YR3/4	シルト質粘土	ロームブロックを少量含む。
第3層	暗褐色土	10YR2/2	シルト質粘土	含有物に特になし。

7号P07

第1層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質粘土	径1~5mmのローム粒を少量、径10mmのロームブロックを少量含む。
第2層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質粘土	径1~5mmのローム粒を少量、径10mmのロームブロックを少量含む。
第3層	暗褐色土	10YR2/2	シルト質粘土	含有物に特になし。

7号P08

第1層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質粘土	径1~5mmのローム粒を少量、径10mmのロームブロックを少量含む。
第2層	暗褐色土	10YR3/3	シルト質粘土	径1~5mmのローム粒を少量、径10mmのロームブロックを少量含む。
第3層	暗褐色土	10YR2/2	シルト質粘土	含有物に特になし。

7号P11

第1層	暗褐色土	7.5YR3/3	シルト	径1~2mmのローム粒を少量、径10mmの炭化物粒を少量含む。径1~5mmのロームブロックを少量含む。
-----	------	----------	-----	-----------------------------------------------------

7号P12

第2層	にんい質褐色土	10YR4/4	粘土質シルト	径10~30mmのローム粒を少量、径1~5mmの炭化物粒を少量含む。径4~8mmのロームブロックを少量含む。
-----	---------	---------	--------	--------------------------------------------------------

7号P13

第1層	暗褐色土	10YR3/3	粘土質シルト	径10~30mmのローム粒を少量、径1~5mmの炭化物粒を少量含む。土器片を含む。
-----	------	---------	--------	-------------------------------------------

7号P14

第2層	にんい質褐色土	7.5YR3/4	粘土	粘土層
-----	---------	----------	----	-----

7号P15

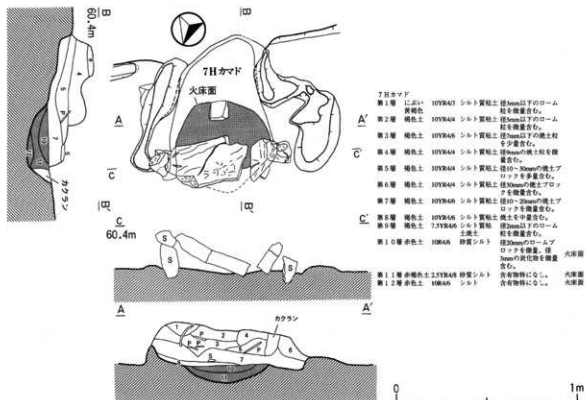
第1層	暗褐色土	10YR3/3	シルト	径1~2mmのローム粒を少量、径10mmの炭化物粒を少量含む。径1~5mmのロームブロックを少量含む。
-----	------	---------	-----	-----------------------------------------------------

7号P16

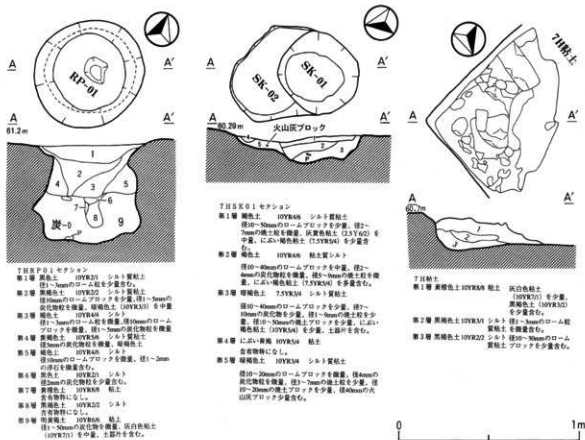
第2層	褐色土	10YR4/6	シルト質粘土	径1~2mmのローム粒を少量、径10mmの炭化物粒を少量含む。径2mmの土器片を少量含む。
-----	-----	---------	--------	-----------------------------------------------



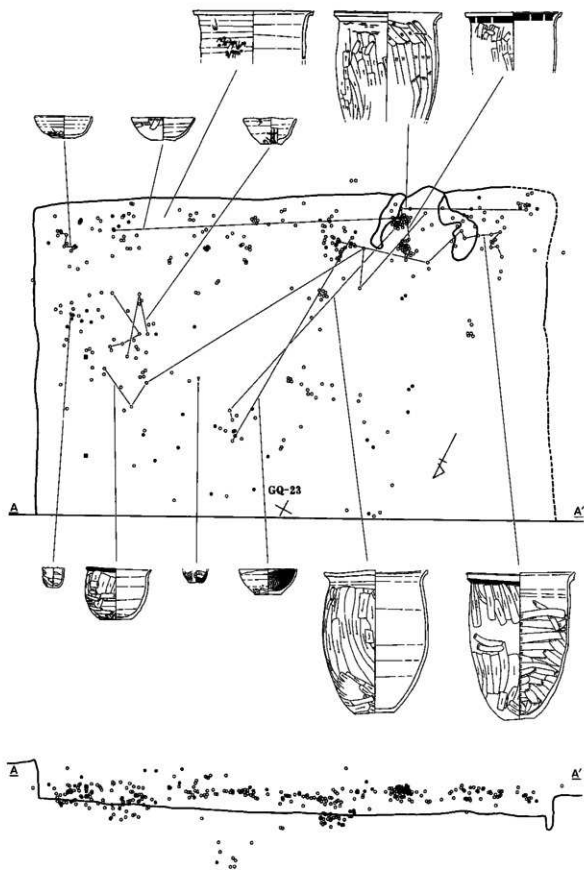
第29図 第7号住居跡



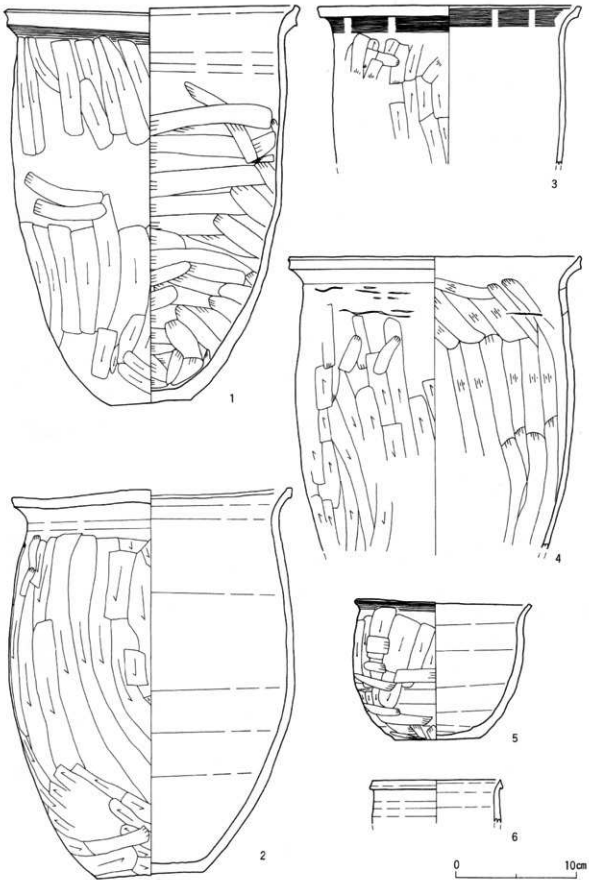
第30図 第7号住居跡カマド



第31図 第7号住居跡検出遺構



第32図 第7号住居跡出土遺物分布図



第33図 第7号住居跡出土土器(1)

分を残し、敷き詰めている。また粘土中より、細かな土器片が検出しており、補強材の目的で粘土に混入した可能性が考えられる。心材等の木製品は検出されなかった。当遺跡で確認されたロクロビットは、隠川(4)遺跡で検出された4HRP01と同様の規模、構造をもつ(木村・三林1998)。

7 HSK01(第31図中) 貼り床下より検出され、直径92cmを測る円形の土壇である。覆土は6層確認され、住居改築時に埋め戻されたと考えられる。7 HSK02と重複関係があり、それよりも新しい。

7 HSK02(第31図中) 貼り床下より検出され、SK01よりも古い。現存長101cmを測る不整楕円形を呈する。

7 H粘土(第31図右) 住居南西壁際に検出され、下層に黒褐色土の堆積が認められることから、住居廃絶後、ある程度の期間を経て、投棄されたものと考えられる。

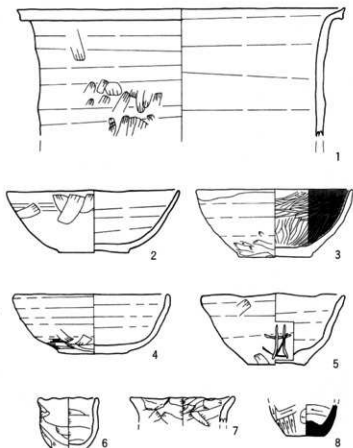
**遺物の出土状況(第32図)** カマド周辺、SP06・07、RP01、住居南東壁隅に遺物の集中が認められる。接合した個体も多く、全部で11個体あり、接合距離は最短で6.4cm、最長で289.6cmを測り、遺物投棄後、覆土堆積時の移動の大きさが窺える。

**遺物の概要** 復元可能な個体は第33・34図に示すように全部で14個体である。33図1～4、34図1は、土師器の長胴甕であり、34図1を除きいずれもロクロ成形後体部外面は丁寧なケズリ調整が施されている。33図の1・3には頸部に横ナデが施されている。内面調整は33図の1・4がナデ調整、33図の2・3、34図の1はロクロナデのみの調整である。

第33図5・6は土師器の小型甕である。いずれもロクロ成形であるが、5は頸部外面に横ナデ、体部外面にケズリ調整が施されている。底面はケズリ調整である。

第34図2～5は土師器の坏で2・5が直上口縁、3・4は内彎口縁である。3は内面黒色処理後丁寧なミガキ調整が施されている。5にはヘラ記号が刻まれている。

第34図6～8はミニチュア土器で、6・7が土師器、8が須恵器である。6・7は内外面とも丁寧なナデ調整が施されている。6の底面は無調整である。8はロクロ成形後外面及び内面にケズリ調整が施されている。



第34図 第7号住居跡出土土器(2)



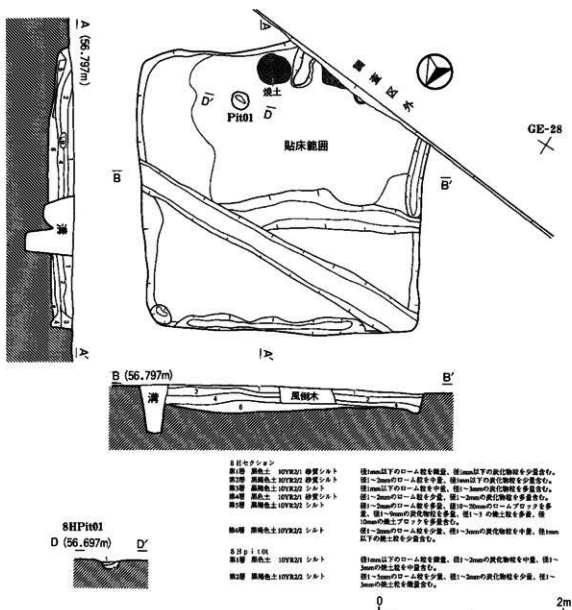
## 第8号住居跡 [8H] (第35図)

**検出状況** グリッドGE27に位置し、Ⅲ層中で確認された。住居南西部が調査区外に掛かり、後世の暗渠排水により東西に切られている。

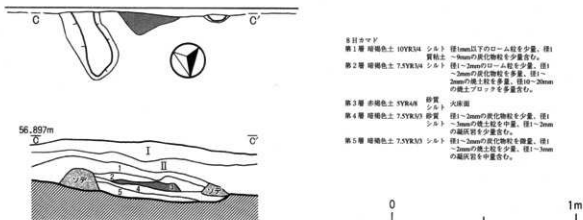
**構造** 規模及び形状は長軸309cm、短軸303cm、深さ8.4~27.3cmを測り、ほぼ方形である。推定床面積は7.2㎡、主軸方位はN-148.1°-Eである。深さ3.2~7.1cmの壁溝が北壁と西壁南半を巡り、柱穴は検出されなかった。

**覆土堆積状況** 覆土は6層確認され、Ⅱ層及びⅢ層を基調とした覆土で構成されており、自然堆積層であると考えられる。

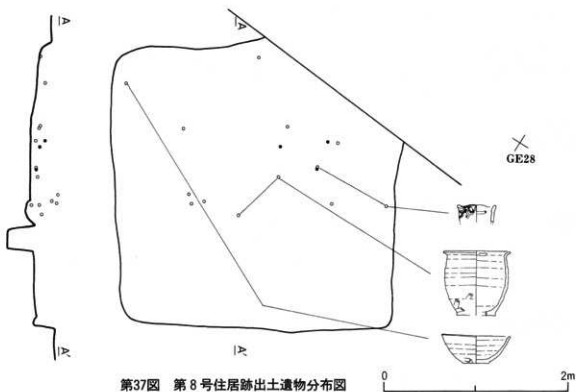
**カマド** (第36図) 南東壁中央部に検出され、大半が調査区外であり、形状は確認できなかったが、断面の形状からみると、白色の粘土を使用し、高い被熱を受けて赤褐色化し硬質であり、調査区外に



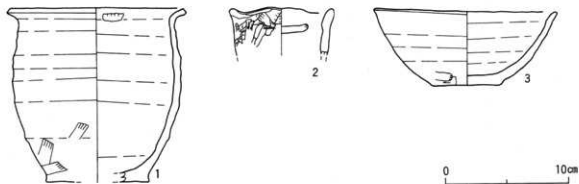
第35図 第8号住居跡



第36図 第8号住居跡カマド



第37図 第8号住居跡出土遺物分布図



第38図 第8号住居跡出土土器

掛かる断面をみると、覆土は5層確認され、焼土粒、炭化物の混入が多い堆積土で構成されている。火床面が発達しており、厚さ4cm程被熱の影響を受けた様子が見られる。

**遺物の出土状況(第37図)** 遺物の出土数は少なく、検出面中央部付近に若干まとまりがみられる。接合した個体は2個体であり、その距離は84.6cm、59cmを測る。

**遺物の概要** 復元可能な個体は第38図に示すように全部で3個体である。1は土師器の小型甕であり、内外面とも若干の指ナデが施されているもののロクロ成形が主体をしめる。底面は回転糸切痕を留めている。頸部内面にスガが付着しており煮炊き用として使用されたものと考えられる。3は土師器の環でロクロ成形後無調整であり、底面も回転糸切痕を留めている。2は手づくねのミニチュア土器で内外面ともナデ調整が施されている。

#### 第9号住居跡 [9H](第39図)

**検出状況** グリッドFD・FE19に位置し、確認面はV層上面で、壁面は確認できず、貼り床面と柱穴(9HSP01、02)でのみ確認された。住居のおよそ3分の1が調査区外に掛かっている。

**構造** 正確な規模は判明しないが、2柱穴間の距離は334cmを測る。SP01は長径35cm、短径19.5cm、深さ42cmを測り、不整楕円形を呈する。SP02は長径44cm、短径36.5cm、深さ47.1cmを測り、楕円形を呈する。各小穴とも覆土の堆積状況から柱の埋め方が検出され、柱穴であることが確認された。貼り床面に夥しい量の鉄滓が出土し、付近に製鉄関連の遺構が存在する可能性が高い。

**遺物の出土状況(第40図)** 床面より多数の鉄滓、SP01及び床面より、少数の土師器・須恵器が出土している。

**遺物の概要** 復元可能な個体は第41図に示したように全部で3個体である。1は土師器の長胴甕でありロクロ成形後、体部上半内外面にケズリ調整が施されている。2は土師器の環であり、口径15.5cmと本遺跡出土の環の中でも大型の個体である。3は土師器の皿であり、SP01から出土した。ロクロ成形で、底部は回転糸切痕を留めている。

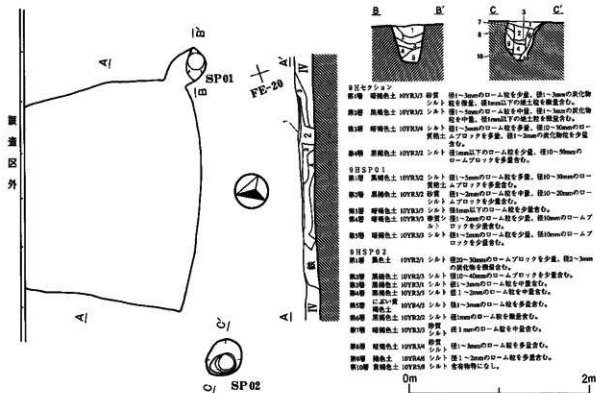
#### 第10号住居跡 [10H](第42図)

**検出状況** グリッドFH・FI23に位置し、確認面はIV層上面で、北東部分のおよそ3分の1が検出された。

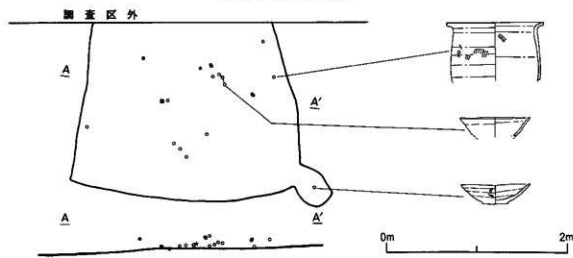
**構造** 正確な規模は判明しないが、検出面から北東壁578cmを測り、方形であると考えられる。推定床面積は31.1㎡、カマドは調査区内からは検出されなかったため主軸方位は不明である。検出面からの深さは15.9cm～43.6cmを測る。深さ9.3cm～22.1cmの壁溝が北壁及び西壁全体に巡る。柱穴SP1が検出され、直径30cm、深さ12.4cmを測る。南西部床面直上より、被熱した集石が検出されている。又、東部床面直上より、粘土が検出されている。

**覆土堆積状況** 覆土は14層確認され、下層はロームブロックの混入が多いことから住居廃絶時の人為的堆積であると考えられ、上層は夾雑物の少なから自然堆積であると考えられる。

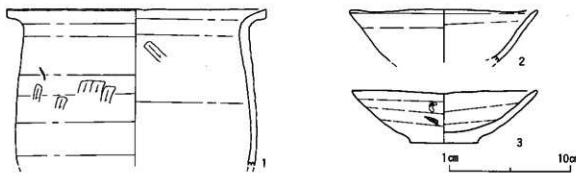
**遺物の出土状況(第43図)** 検出面の東側に若干集中している箇所があるが、ほぼ全域にわたって遺物が出土している。接合した個体は1個体で、その距離は68.8cmである。須恵器、土師器及び器種ご



第39図 第9号住居跡



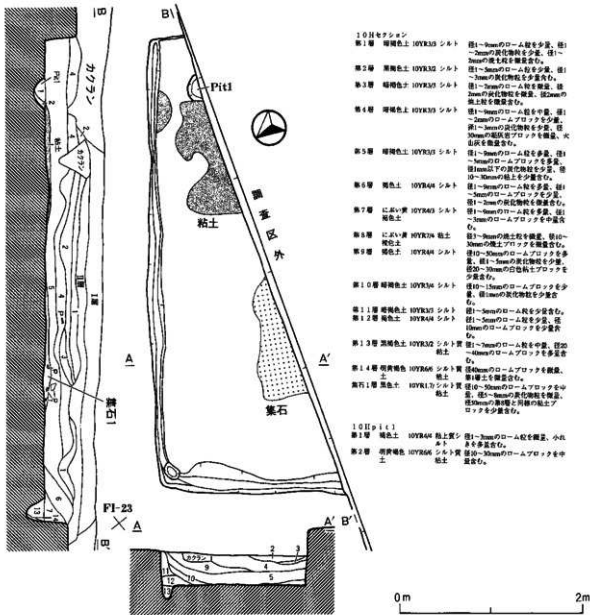
第40図 第9号住居跡出土遺物分布図



第41図 第9号住居跡出土土器

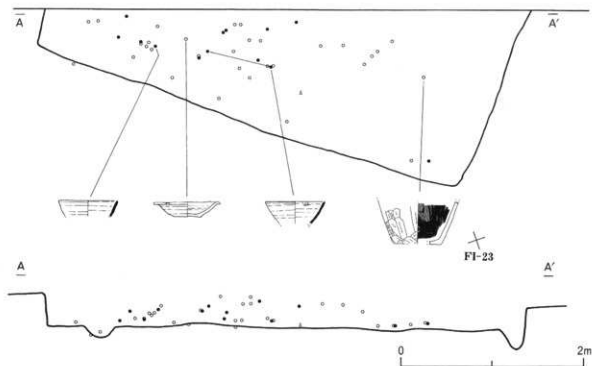
とでのまとまりは認められなかった。

出土遺物の概要(第44図) 復元可能な個体数は全部で4個体であった。1は土師器の甕の底部破片であり、外面はケズリ調整、内面はヘラナデが施されている。2・3は須恵器の坏であり、ロクロ成形後2は無調整、3は口縁部に指ナデが施されている。4は土師器の皿であり、口縁部が強く外反している。調整はロクロナデのみであり、底面は回転糸切痕を留めている。

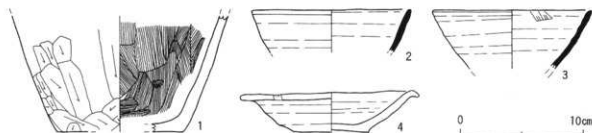


- 10日セクション
- 第1層 暗褐色土 10YR3/3 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化植物を少量含む。
  - 第2層 暗褐色土 10YR3/3 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化植物を少量含む。
  - 第3層 暗褐色土 10YR3/3 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径2mmの炭化植物を少量含む。
  - 第4層 暗褐色土 10YR3/3 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmのロームプロットを少量、径30mmの炭化植物プロットを少量、火山灰を微量含む。
  - 第5層 暗褐色土 10YR3/3 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmのロームプロットを少量、径10~30mmの炭化植物を少量含む。
  - 第6層 褐色土 10YR4/4 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmのロームプロットを少量、径1~2mmの炭化植物を微量含む。
  - 第7層 灰色土 10YR6/3 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmのロームプロットを少量含む。
  - 第8層 灰色土 10YR6/3 粘土 径1~2mmの粘土粒を少量、径10~30mmの炭土プロットを少量含む。
  - 第9層 褐色土 10YR4/4 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径10~30mmの炭化植物を少量、径10~30mmの白色粘土プロットを少量含む。
  - 第10層 暗褐色土 10YR3/3 シルト 径10~15mmのロームプロットを少量、径10mmの炭化植物を少量含む。
  - 第11層 暗褐色土 10YR3/3 シルト 径1~2mmのローム粒を少量含む。
  - 第12層 褐色土 10YR4/4 シルト 径1~2mmのロームプロットを少量含む。
  - 第13層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 径1~2mmのローム粒を少量、径20~40mmのロームプロットを少量含む。
  - 第14層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 径10mmのロームプロットを少量、暗褐色土を微量含む。
  - 第15層 褐色土 10YR4/4 シルト質 径10~30mmのロームプロットを少量、径10mmの炭化植物を少量、径30mmの炭土プロットを少量含む。
- 10日 Pit I
- 第1層 褐色土 10YR4/4 粘土質 径1~2mmのローム粒を少量、小石を少量含む。
  - 第2層 暗褐色土 10YR3/3 シルト質 径10~30mmのロームプロットを少量含む。

第42図 第10号住居跡



第43図 第10号住居跡出土遺物分布図



第44図 第10号住居跡出土土器

11号住居跡 [11H] (第45図)

**検出状況** グリッドDG・DH04、05に位置し、確認面はIV層上面で、北隅が若干調査区外に掛かる程度でほぼ全体が検出された。

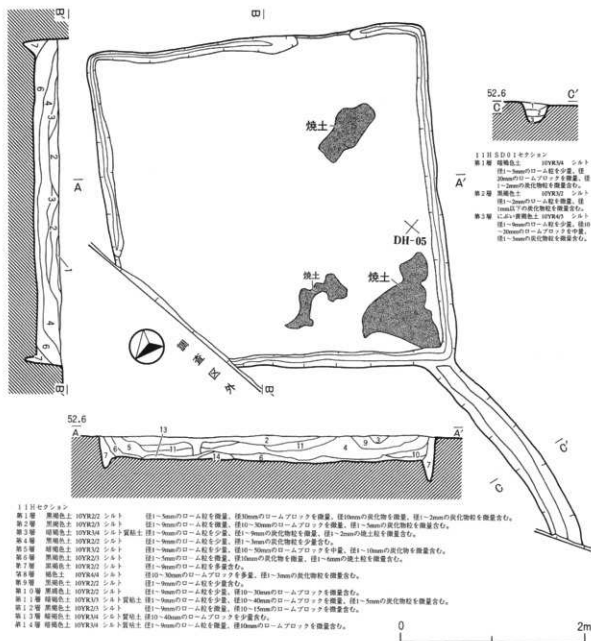
**構造** 長軸394cm、短軸355cmを測り、ほぼきれいな方形を呈する。推定床面積は11.1㎡で、主軸方位はN-139°-Eである。深さ6.8cm～22.1cmの壁溝がほぼ全体に巡る。カマドは検出されず、壁溝が止まっている場所に存在したものと考えられ、堆積土中に焼土ブロックが混入することから破壊されたものと考えられる。また堆積土もローム、焼土、炭化物の混入度から推定して明らかに人為堆積であるため、意図的に破棄され埋められた住居である可能性が高いと考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は14層確認され、下層は自然堆積の様相を呈するが、上層はロームブロックの混入が目立つことから人為的堆積である可能性が高いと考えられる。

**遺物の出土状況**(第46図) 住居を意図的に廃絶した際に埋め戻した堆積土中より多量の須恵器、土師

器が出土した。遺物の分布が北西壁際付近を密にして、南東方向へとしだいに分布が疎になっていくことから北西壁から南東方向へと遺物の投棄が行われたことが窺える。接合個体は全部で12個体あり、接合距離は最短で4.8cm、最長で202cmであり、投棄時の遺物の移動が窺える。

**遺物の概要** 復元可能な個体は第47・48図に示したように全部で17個体である。第47図1・2は土師器の長割壺で口縁部端面形が丸みを帯びている。1はロクロ成形後体部外面はケズリ調整、内面は刷毛目状の調整が施されている。2はロクロを使用せず、外面をケズリ調整、内面をナダ調整により成形されている。底面は砂底である。第47図3・4は土師器の小型壺であり、両個体ともロクロ成形後、頸部外面に横ナデ、体部外面にケズリ調整が施されている。内面はロクロナデのみである。



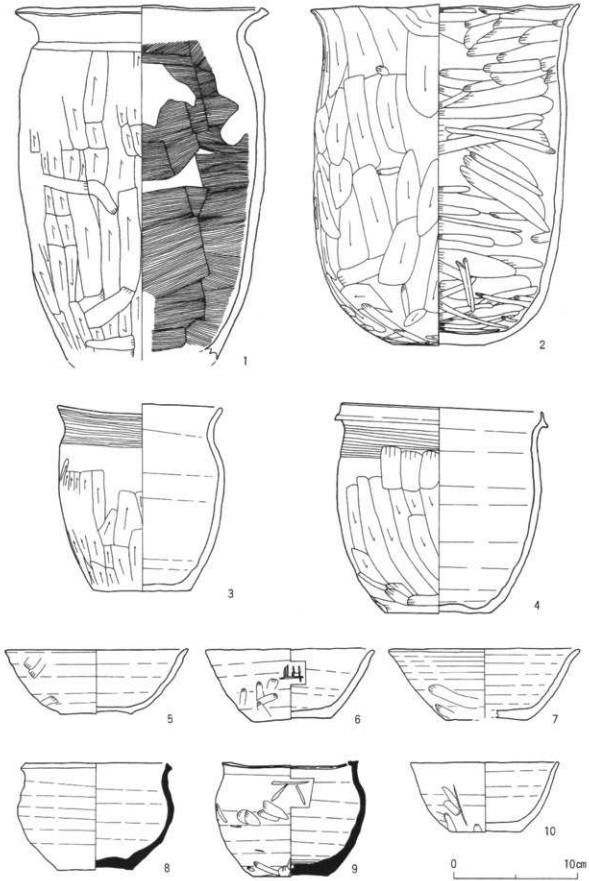
第45図 第11号住居跡

底面は3は砂底で、4は無調整である。第47図5～7・10は土師器の坏であり、いずれもロクロ成形である。6・10は体部下半にヘラ記号が刻まれている。底面は5・7・10が回転糸切痕であり、6が回転糸切り後、ケズリ・ナデ調整が施されている。第47図8・9は須恵器の鉢であり、いずれもロクロ成形である。8は頸部から体部上半にかけてヘラ記号が刻まれている。底面はいずれも回転糸切痕を留めている。第48図3～7は須恵器の坏でいずれもロクロ成形であり、火漉痕がみられる。4～7には体部下半にヘラ記号が刻まれている。底面はいずれも回転糸切痕を留めている。第48図1は須恵器の中甕で、頸部にヘラ記号が刻まれている。調整は頸部下半から体部上半、体部下半に

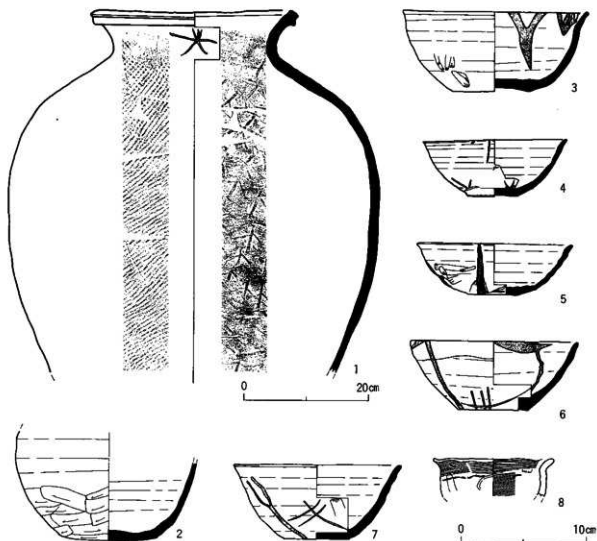


第46図 第11号住居跡出土遺物分布図





第47図 第11号住居跡出土土器 (1)



第48図 第11号住居跡出土土器(2)

格子タタキ目、体部に平行タタキ目が施され、内面には矢羽状の当て具痕が残されている。第48図2は須恵器の甑であり、ロクロ成形後丁寧なケズリ調整が体部及び底面に施されている。第48図7は上師器のミニチュア土器である。手づくね土器で、頸部外面及び内面に横ナデが施され、体部外面にはナデが施されている。

#### 第12号住居跡 [12H](第49図)

**検出状況** グリッドGW21、22に位置し、道路建設時に削平されたのか、砂利を除いたV層(地山面)で確認され、南側約4分の1程度が検出された。

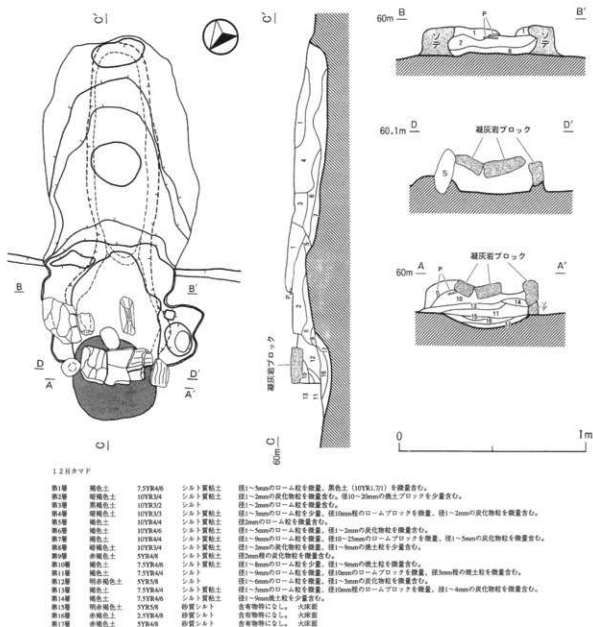
**構造** 正確な規模、形態は不明であるが、南壁502cm、確認面からの深さ4.5~27cmを測り、方形であると考えられる。推定床面積は26.0㎡で、主軸方位はN-150°-Eである。深さ15.9~16.3cmの壁溝が東壁北側部分と西壁全体に巡る。住居内外から小穴・柱穴は全部で12基確認され(SP01~12)、



内床面検出の柱穴が、SP01、07、08であり、貼り床下で確認されたものがSP02、03、04、05、06、であり、SP05、06は切り合っている。よって当住居は最低でも2回の建て替えがあったと考えられる。なお住居外からSP09が検出され、住居外付属施設のある可能性が考えられる。住居南東壁から外に延びる外延溝(12HSD01)が検出されている。

**覆土堆積状況** 覆土は11層確認され、6層にB-Tmが確認された。いずれの層にもローム粒が若干見られるものの、自然堆積であると考えられる。

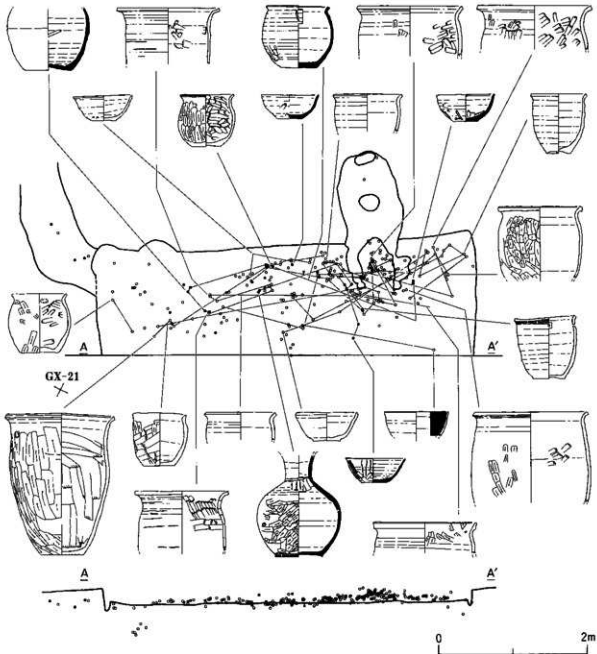
**カマド(第50号)** 住居南壁西側よりに位置し、焼成部に凝灰岩の切石、ソデの心材として、火成岩の丸石、煙道部分の天井部分には白色粘土を使用している。いずれの部分も強い被熱を受けており、



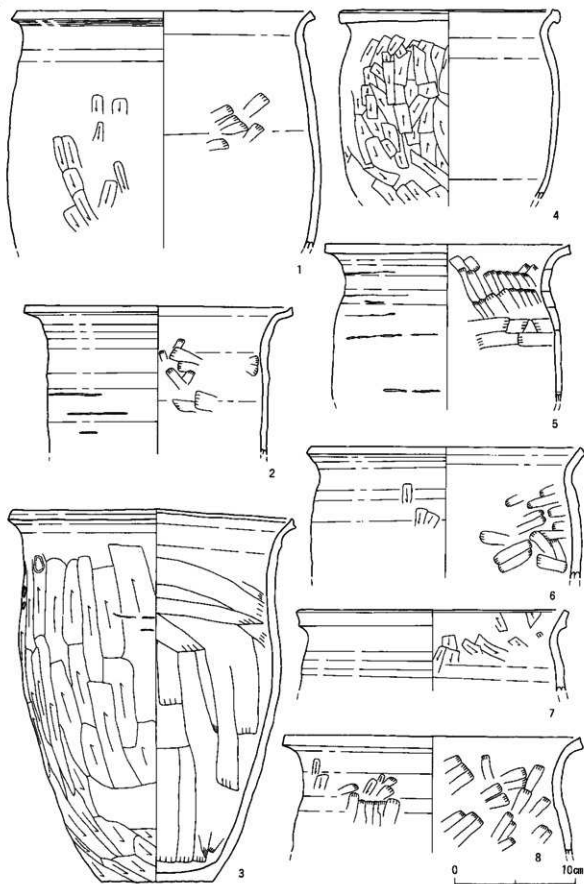
第50号 第12号住居跡カマド

素材の粘土、切り石とも酸化焼成により、赤変している。煙道部が検出されており、主軸方位はN-147°-Eであり、火床面から、残存する煙道部の水平距離192cm、最深度で18.5cmを測る。形態は浅く掘り深めた後、天井部に粘土を張り、煙出の穴を2カ所設けている。覆土は14層確認され、いずれの層にもローム粒、炭化物、ソデの崩落土等が混入しており、住居廃絶前後にカマド火床部が崩落して一気に堆積した様子が窺える。火床面も非常に発達しており、4層確認され、深さ9cmを測る。

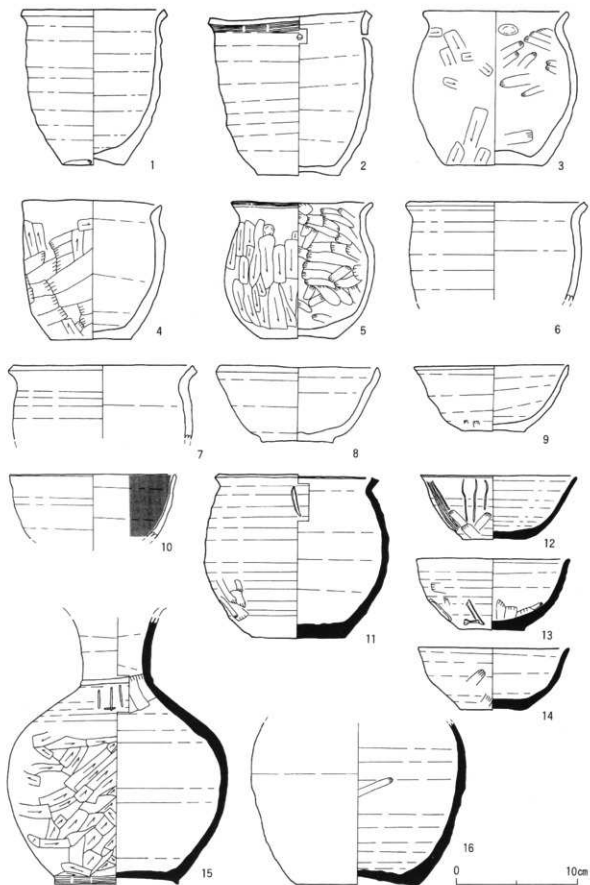
12HSD01 住居内東壁付近から南東壁隅を貫入して南東方向へと延びる溝である。検出面での幅30~62.5cm、深さ27~35cmを測る。覆土は6層確認され、いずれもローム粒、炭化物粒を若干含むも



第51図 第12号住居跡出土遺物分布図



第52圖 第12号住居跡出土土器(1)



第53図 第12号住居跡出土土器 (2)

の、自然堆積であると考えられる。また12Hとの明確な重複関係がみられなかったため、12Hに付属する排水用の溝跡である可能性が高いと考えられる。

**遺物の出土状況(第51図)** 検出面全域にわたり高密度で遺物が分布している。特にカマド周辺の遺物密度は高く、住居廃絶時にカマドを中心にして遺棄された状況が考えられる。接合個体は全部で24個体であり、非常に遺物のまとまりが高い事が窺える。接合間距離は、最短で1.3cm、最長で240cmを測る。

**遺物の概要** 個体復元可能な遺物は第52・53図で示すように全部で24個体である。第52図は上師器の長胴甕であり、いずれも輪積み技法での成形の後ロクロナデが施されている。外面調整は2・5・7がロクロナデのみ、その他はケズリ調整が施されている。内面調整は4がロクロナデのみで、他はすべてナデ調整が施されている。3の底面はケズリ調整である。第53図1～7は七師器の小型甕であり、3・5はロクロを使用せず、外面ケズリ調整、内面はナデ調整が施されている。その他はロクロ成形が施されている。2はロクロナデ後、頸部に横ナデが施され、4はケズリ調整が施されている。底面は1がナデ調整、2・4はケズリ調整が施され、3は砂底である。第53図8～10は十師器の坏であり、いずれもロクロ成形である。底面は8が静止糸切り痕、9は回転糸切り痕である。10は内面黒色処理の施された土器であるが、内面に明瞭なミガキ調整は確認できなかった。第53図11は還元軟質の須恵器の鉢であり、頸部から体部上半にかけてヘラ記号が刻まれている。調整はロクロナデのみである。底面は回転糸切り離した後、ケズリ調整が施されている。第53図12～14は須恵器の坏であり、いずれもロクロ成形である。12には火傷痕がみられ、12・13には体部下半にヘラ記号が刻まれている。底面は12・14が回転糸切り痕を留め、13は回転糸切り離した後、ケズリ調整が施されている。なお13は11と同様の色調及び、底面の調整をしているため、同一窯で作製された可能性が考えられる。第53図15・16は須恵器の壺であり、15は長頸壺である。頸部～肩部外面及び内面はロクロナデのみであり、体部外面は丁寧なケズリ調整により整形されている。底面は幅の狭いヘラ状の工具によりケズリ調整が施され高台状につくりあげられた菊花文を呈し、高台部は横ナデが施されている。頸部と体部は個別に作製されており、接合部は内面から指ナデ調整が施されている。また肩部にヘラ記号が刻まれている。16はロクロナデのみであり、底面も無調整である。

### 第13号住居跡 [13H](第54図)

**検出状況** グリッドEY・EZ18、19に位置し、Ⅲ層で確認された。南西部角のみが検出し、他は調査区外にかかっている。

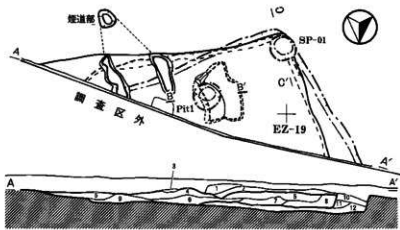
**構造** 検出面がわずかのために全体の規模及び形態は不明であるが、コーナーの形状から方形であると考えられる。主軸方位はN-172°-Eである。同一地点で方角を変えて最低でも3回の建て替えが確認されたので、それぞれ13、14、15Hとした。

**覆土堆積状況** 貼床面のみを確認のため、覆土は検出されなかった。

**重複** 14Hより角度を約5度東方向にずらして、14Hの貼り床面にさらに床面を構築して建てられており、14Hより新しいことが確認された。

**カマド(第55図)** 14Hのカマドの片ソデを利用し、新たに白色粘土を使用したソデを造り、14Hより





13・14・15世紀セクション

- 第1層 暗褐色土 10YR3/4 シルト  
径1mm以下のローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を散見。径1~2mmの焼土粒を多数含む。径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径1~2mmの焼土粒を散見含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/3 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径10mmの焼土プロックを多数含む。
- 第3層 褐色土 7.5YR4/6 砂質シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径10mmの焼土プロックを多数含む。
- 第4層 黒褐色土 10YR2/3 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームプロックを少量、径1mm以下の炭化物粒を散見、径10~20mmの焼土プロックを多数含む。
- 第5層 暗褐色土 10YR2/3 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームプロックを少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径1~2mmの焼土粒を多数含む。
- 第6層 暗褐色土 10YR3/4 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径1~2mmの焼土粒を多数、径10~20mmの焼土プロックを少量、径10~20mmの炭化物粒を散見含む。
- 第7層 暗褐色土 10YR2/3 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径1~2mmの焼土粒を多数、径10~20mmの炭化物粒を散見含む。
- 第8層 暗褐色土 10YR2/3 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量含む。
- 第9層 暗褐色土 10YR2/3 シルト  
含有物なし。
- 第10層 黒色土 10YR2/2 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径10mmのロームプロックを少量、径10mm以下の炭化物粒を少量、径1~2mmの焼土粒を散見含む。
- 第11層 暗褐色土 10YR2/1 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径10mmのロームプロックを少量、径10mm以下の炭化物粒を少量含む。
- 第12層 黒褐色土 10YR2/3 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームプロックを少量、径1~2mmの炭化物粒を少量含む。

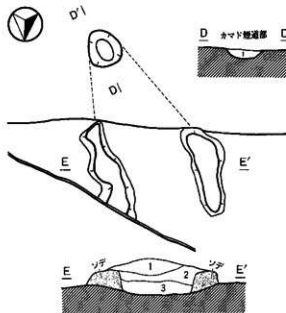
15世紀

- 第1層 暗褐色土 10YR3/5 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径10mmのロームプロックを少量、径1mm以下の炭化物粒を少量、径10mm以下の焼土粒を少量、径10mmの焼土プロックを散見含む。
- 第2層 暗褐色土 10YR2/3 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmのロームプロックを少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径1~2mmの焼土粒を散見含む。

16世紀

- 第1層 暗褐色土 10YR2/2 シルト  
径1~2mmのローム粒を少量含む。1.4尺の彫土に散見。

第54図 第13・14・15号住居跡



13世紀カマド

- 第1層 暗褐色土 7.5YR3/4 シルト  
径1mm以下のローム粒を少量、径1mm以下の焼土粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量含む。

13世紀カマド

- 第1層 暗褐色土 10YR2/2 シルト  
径1mm以下のローム粒を少量、径10mmのロームプロックを少量、径1mm以下の炭化物粒を少量含む。

第2層 暗褐色土 10YR3/4 砂質シルト

- 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径1~2mmの焼土粒を少量、径10~20mmのロームプロックを少量含む。

第3層 褐色土 7.5YR3/2 シルト

- 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物粒を少量、径1~2mmの焼土粒を少量、径10~20mmのロームプロックを少量含む。



第55図 第13号住居跡カマド

も東側にカマドを移築している。埋土は3層確認され、下層では炭化物粒、焼土粒の混入が目立つ。ソデは強い被熱を受けて表面は赤褐色に変化している。火床面も発達しており、セクションでの観察では厚さ4cmを測り、使用頻度の高さが窺える。

第14号住居跡 [14H](第54図)

検出状況 グリッドEY・EZ18、19に位置し、南西部角のみが検出している。Ⅲ層中で検出された。

構造 検出面がわずかのために全体の規模及び形態は不明であるが、コーナの形状から方形であると考えられる。カマドのソデの残存部が検出しており、主軸方位はN-167°-Eである。壁溝及び柱穴は検出されなかった。

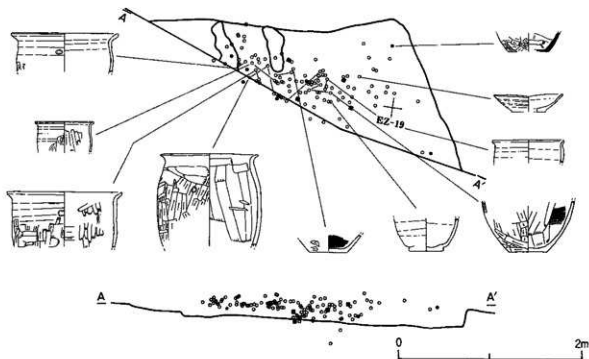
覆土堆積状況 覆土は13Hの貼床下に2層確認され、炭化物粒、焼土粒、ロームブロックが多く混入していることから、13Hを構築するさい埋め戻された人為堆積上であると考えられる。

重複 15Hより角度を約9度東方向にずらして、15Hの貼り床に床面を構築して建てられており、15Hより新しく、13Hより古いことが確認された。

カマド 13Hを構築する際に、破壊されたソデの残存部と考えられる被熱を受けた粘土の集中する場所が検出されたため、そこをカマドのあった場所と推定した。検出されたのは片ソデのみで、おそらくもう一方のソデは13Hのカマドの片ソデとして転用されたものと考えられる。

第15号住居跡 [15H](第54図)

検出状況 グリッドEY・EZ18、19に位置し、南西部角のみが検出している。Ⅲ層中で検出された。



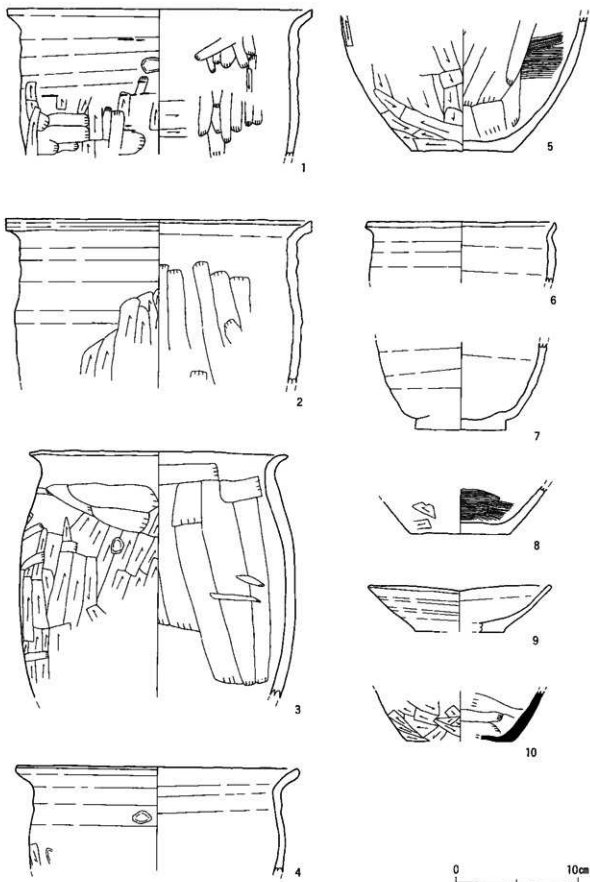
第56図 第13・14・15号住居跡出土遺物分布図

**構造** 検出面がわずかのために全体の規模及び形態は不明であるが、コーナーの形状から方形であると考えられる。主軸方位は13・14Hと同様の位置にカマドが設置されていたとすると、N-158°-Eである。南西部角に柱穴SP01・02が検出されており、それぞれ直径30・34cm、深さ29.5・12cmを測る。

**覆土堆積状況** 覆土は2層確認され、ロームが多量に混入することから14Hを構築する際の埋め戻し土であると考えられる。

**遺物の出土状況(第56図)** カマド周辺に遺物の集中が認められる。接合個体は8個体であり、接合間の距離は最短で2.9cm、最長で49.3cmであり、遺物の原位置を保持しているものと考えられる。

**遺物の概要** 復元可能な個体は第57図に示すように全部で10個体である。1～5・8は土師器の長胴甕であり、いずれの土師器もロクロ成形後、体部外面にケズリ調整が施されている。内面調整は1～3・5・8がナデ調整が施され、4はロクロナデのみである。底面は5がナデ調整、8は砂底である。6・7は土師器の小型甕であり、いずれもロクロナデのみの調整であり、7は底部が高台状に作り出している。7の底面は回転糸切り離した後ケズリ調整が施されている。9は土師器の皿であり、内外面ともロクロ成形である。底面は回転糸切痕を留めている。10は須恵器の壺であり、外面は丁寧なケズリ調整、内面及び底面はナデ調整が施されている。



第57图 第13・14・15号住居跡出土土器

## 2 土壌

## 第1号土壌 [SK01] (第58図)

**検出状況** グリッドAC、AD02に位置し、遺構の上面は耕作により削平を受けており、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径141cm、短径124cmの不整楕円形を呈し、深さは18～30cmを測る。堆積土中にB-Tmを混入する層が検出された。床面直上、下層の堆積土中より、多量の炭化物が、また床面から焼土が検出された。

**覆土堆積状況** 上層は自然堆積土であるが、下層、特に床面直上の層は炭化物を非常に多く混入した層であり、土壌の機能していた時期、あるいは廃絶直後の人為的堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 多量の炭化物が出土したが、土器の類は全く出土しなかった。

**遺構の性格** 多量の炭化物、床や壁面に残る被熱の痕跡から、何らかのものを焼成するために使用された土壌であると考えられる。ただし土壌床面及び壁面の焼成度は弱いため、使用頻度が低いものと考えられる。

## 第2号土壌 [SK02] (第59図)

**検出状況** グリッドAV09に位置し、遺構の上面は耕作により削平を受けており、僅かに残るIV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径193cm、短径162cmの不整の隅丸長方形を呈し、深さは16～22cmを測る。堆積土中にB-Tmを混入する層が検出された。床面直上、下層の堆積土中より、多量の炭化物が、また床面から焼土が検出された。

**覆土堆積状況** 上層は自然堆積土であるが、下層、特に床面直上の層は炭化物を非常に多く混入した層であり、土壌の機能していた時期、あるいは廃絶直後の人為的堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 多量の炭化物、炭化材が出土したが、土器の類は全く出土しなかった。

**遺構の性格** 多量の炭化物、床や壁面に残る被熱の痕跡から、何らかのものを焼成するために使用された土壌であると考えられる。ただし土壌床面及び壁面の焼成度は弱いため、使用頻度が低いものと考えられる。

## 第3号土壌 [SK03] (第60図)

**検出状況** グリッドBK・BL09、10に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 農道に一部削平されており、正確な規模・形態は不明であるが、確認面において直径466cm、深さ35～59cmを測り、不整形を呈すると思われる。

**重複** 層の堆積状況を観察したところ、1号溝跡(SD01)をきる形で形成されており、新旧関係はSD01、SK03の順に新しいことが判明した。

**覆土堆積状況** 上層にB-Tmを挟み、上部・下部の層も黒色、暗褐色の層が互層をなす自然堆積層である。

**遺物の出土状況** 土師器の皿、須恵器の体部破片、縄文土器が出土している。いずれも堆積土中より出土しており、本土壌に伴うものではなく、周囲からの流れ込みにより検出されたものと考えられる。

**第4号土壌 [SK04] (第61図)**

**検出状況** グリッドDD02、03に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 重複関係があるため正確な規模・形態は不明であるが、確認面において短径138cm、深さは11～27cmを測り、不整楕円形を呈するものと考えられる。

**重複** SK05、SD02と重複関係があり、層の堆積状況の観察からSK05よりも新しく、SD02よりも古く構築されている。

**覆土堆積状況** ロームブロック、粘土ブロックを多量に含む層により、構成されていることから、人為的堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 多量の土師器、少量の須恵器が土壌の床面及び堆積土中より出土している。

**第5号土壌 [SK05] (第61図)**

**検出状況** グリッドDD03に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 重複関係があるため正確な規模は不明であるが、確認面において長径259cm、深さは25～47cmを測り、不整楕円形を呈するものと考えられる。

**重複** SK04、SD02と重複関係があり、層の堆積状況の観察から一番古いものである。

**覆土堆積状況** SK04と同様の堆積状況であり、人為的堆積である。

**遺物の出土状況** 多量の土師器、少量の須恵器が土壌の床面及び堆積土中より出土している。

**遺構の性格** SK04、SK05ともに土壌使用時の性格は不明であるが、土壌の機能停止後に遺物の廃棄場所として利用されたと考えられる。

**第6号土壌 [SK06] (第62図)**

**検出状況** グリッドDC、DD04に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径191cm、短径163cm、深さは14～23cmを測り、不整楕円形を呈する。

**覆土堆積状況** 覆土は2層確認され、堆積土中の含有物(ローム粒、焼土、炭化物等)より、人為的堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 少量の土師器片、須恵器片が出土したにすぎない。

**第7号土壌 [SK07] (第63図)**

**検出状況** グリッドDA04に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径196cm、短径160cm、深さは23～35cmを測り、不整楕円形を呈する。

**重複** 1HSD02と重複関係があり、確認面及び堆積土層の観察より、1HSD02よりも古い遺構であることが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は4層確認され、自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 少量の土師器片が出土したにすぎない。

#### 第8号土壌 [SK08](第64図)

**検出状況** グリッドDL05に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 重複関係があるため正確な規模、形態は不明であるが、確認面において長径178cm、深さは6～26cmを測り、形態は不整形円形を呈するものと考えられる。SK08～11までの一連の土壌群の中では一番古いものである。

**重複** Pit01、SK12と重複関係があり、両者よりも古いことが堆積状況の観察により、確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認され、下層は土壌の壁面から崩落したと考えられるロームブロックを混じるが、自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 須恵器の坏が2個体分出土している。

#### 第9号土壌 [SK09](第64図)

**検出状況** グリッドDL04・05に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径125cm、短径110cm深さは11～20cmを測り、不整形円形を呈する。SK08～SK12までの一連の土壌群の中では一番新しい土壌である。

**重複** SK10と重複関係があり、堆積状況の観察からSK10よりも新しいことが判明した。

**覆土堆積状況** 覆土は4層確認され、最下層は粘土、ロームの混入が著しく、人為的堆積であると考えられるが、それより上層は自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 土師器の甕、坏が各々1個体分出土している。

#### 第10号土壌 [SK10](第64図)

**検出状況** グリッドDL04・05に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径166cm、短径144cm、深さは33～36cmを測り、不整形円形を呈する。

**重複** SK09、SK11と重複関係があり、堆積状況の観察からSK09よりも古く、SK11よりも新しいことが判明した。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認され、上層を除き灰黄褐色土の混入が目立つことから、人為的堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 須恵器の甕2個体分が出土している。

#### 第11号土壌 [SK11](第64図)

**検出状況** グリッドDL04・05に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径258cm、短径213cm、深さは32～46cmを測り、不整形円形を呈する。

**重複** SK08、SK10と重複関係があり、確認面及び堆積状況の観察からSK08よりも新しく、SK10よりも古いことが判明した。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認され、自然堆積であると考えられる。

第12号土坑 [SK12] (第64図)

検出状況 グリッドDL05に位置し、IV層上面で確認された。

構造 重複関係があるため正確な規模・形態は不明であるが、確認面において短径112cm、深さは15～29cmを測り、不整形円形を呈するものと考えられる。

重複 SK13、SK14と重複関係があり、確認面及び堆積状況の観察からSK13より新しく、SK14より古いことが判明した。

覆土堆積状況 覆土は2層確認され、自然堆積、人為的堆積のいずれであるか判断できなかった。

遺物の出土状況 土師器の甕が6個体分、土師器の坏が2個体分出土した。

第13号土坑 [SK13] (第64図)

検出状況 グリッドDL05に位置し、IV層上面で確認された。

構造 重複関係のため規模、形態共に不明である。深さは確認面において5～7cmを測る比較的浅い土坑である。

重複 SK12と重複関係があり、確認面及び堆積状況の観察からSK12より古いことが判明した。

覆土堆積状況 覆土は1層確認され、混入物の少なから自然堆積層であると考えられる。

第14号土坑 [SK14] (第64図)

検出状況 グリッドDL05に位置し、IV層上面で確認された。

構造 重複関係のため正確な規模・形態は不明であるが、確認面において長径247cm、深さは35～48cmを測り、不整形円形を呈するものと考えられる。

重複 SK12、SD03と重複関係があり、確認面及び堆積状況の観察からSK12より新しく、SD03より古いことが判明した。

覆土堆積状況 覆土は5層確認され、ロームブロック及び粘土ブロックが多量に混入した堆積土であり、人為的堆積土であると考えられる。

第15号土坑 [SK15] (第65図)

検出状況 グリッドEI13に位置し、V層上面で確認された。

構造 確認面において長径115cm、短径108cm、深さ26～31cmを測り、円形を呈する。

覆土堆積状況 覆土は5層確認され、各層ともに量のばらつきは示すものの、ローム粒、ロームブロックが混じり、人為的堆積である可能性が高いと考えられる。

第16号土坑 [SK16] (第66図)

検出状況 グリッドEO・EP16に位置し、V層上面で確認された。

構造 確認面において長径109cm、短径98cm、深さ21～32cmを測り、不整形円形を呈する。

覆土堆積状況 下層は黒色腐植土層の自然堆積層であるが、上層は多量のロームブロックの混入する人為的堆積層である。



## 第17号土壌 [SK17] (第67図)

**検出状況** グリッドEO・EP16に位置し、V層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径178cm、短径132cm、深さは9～17cmを測り、不整楕円形を呈する。非常に浅い土壌である。

**覆土堆積状況** 覆土は5層確認され、下層は自然堆積層であるが、上層は人為的堆積層(カクランか?)である。

**遺物の出土状況** 多量の土師器、須恵器が出土した。

## 第18号土壌 [SK18] (第68図)

**検出状況** グリッドEO16に位置し、V層上面で確認された。土壌の約3分の1が調査区外に位置する。

**構造** 正確な規模は不明であるが、確認面において直径147cm、深さ21～36cmを測り、不整形を呈すると考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は7層確認され、黒色土を基層としたプライマリーな自然堆積である。

## 第19号土壌 [SK19] (第69図)

**検出状況** グリッドEN13、14に位置し、V層上面で確認された。土壌の4分の1程度がカクランを受けている。

**構造** 正確な規模・形態は不明であるが、確認面において長径141cm、深さは26～46cmを測り、不整形を呈すると考えられる。

**重複** 調査区内において重複関係は認められない。

**覆土堆積状況** 覆土は6層確認され、黒色土を基層としながら、下層と中層においてロームブロックが多量に含まれる層が互層をなしている。自然堆積か人為的堆積かの判断は不明である。

**遺物の出土状況** 土師器甕が2点、須恵器の坏が1点出土している。

## 第20号土壌 [SK20] (第70図)

**検出状況** グリッドEY19に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径147cm、短径131cm、深さは27～35cmを測る。形態は不整形を呈し、南東隅底面から壁際にかけて、粘土ブロック、焼土ブロックが上から崩落した状態で検出された。

**重複** SK21と重複関係があり、確認面及び堆積状況の観察からSK21よりも古いことが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は2層確認され、SK21により、南東部分のみ残存しているが、自然堆積と考えられる。その堆積途中で上方から粘土ブロック及び焼土ブロックが投げ込まれるか、崩落したかは不明であるが、混入したものと考えられる。

**遺物の出土状況** 底面及び堆積土中から多量の土師器・須恵器が出土した。

## 第21号土壌 [SK21] (第70図)

**検出状況** グリッドEY19に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長径225cm、短径161cm、深さは16~42cmを測り、形態は長楕円形を呈する。

**重複** SK20、SK22と重複関係があり、確認面及び堆積状況の観察からSK20、SK22よりも新しいことが確認された。

**覆土堆積状況** 下層はローム粒の混入が目立つが、その他の層は自然堆積層と考えられる。

**遺物の出土状況** 底面及び堆積土中から多量の土師器片(甕が多い)が出土した。

#### 第22号土壌 [SK22](第70図)

**検出状況** グリッドEY19に位置し、IV層上面で検出された。

**構造** 一部が農道内であるため正確な規模は不明であるが、確認面において長径178cm、深さ34~43cmを測り、長楕円形を呈すると考えられる。

**重複** SK21と重複関係があるが、確認面及び堆積状況の観察からSK21より古いことが確認された。

**覆土堆積状況** SK21と同様に下層はローム粒の混入が目立つが、その他の層は自然堆積層と考えられる。

**遺物の出土状況** 底面及び堆積土中から多量の土師器片(甕が多い)が出土した。

#### 第23号土壌 [SK23](第71図)

**検出状況** グリッドFG22に位置し、IV層上面、3分の1が調査区外に掛かっている状態で検出された。

**構造** 正確な規模・形態は不明であるが、確認面において長径135cm、深さ10~21cmを測る不整楕円形であると考えられる。

**重複** SK24と重複関係があり、確認面及び堆積状況の観察からSK24より古いことが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は6層確認され、各層ともわずかにローム粒、炭化物の混入が認められるが、自然堆積であると考えられる。

#### 第24号土壌 [SK24](第71図)

**検出状況** グリッドFG22に位置し、IV層上面、3分の1が調査区外に掛かっている状態で検出された。

**構造** 3分の1程度が調査区外に掛かっているために正確な規模・形態は不明であるが、確認面において直径164cm、深さ11~34cmを測り、不整円形を呈すると考えられる。

**重複** SK23と重複関係があり、確認面及び堆積状況の観察からSK23より新しいことが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は6層確認され、上層においては自然堆積層であると考えられるが、下層においては、ローム粒、ロームブロックが多量に混入することから廃絶時の壁面崩落土である可能性が高いと考えられる。

#### 第25号土壌 [SK25](第72図)

**検出状況** グリッドGG25に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 北側部分が調査区外であるため正確な規模・形態は不明であるが、確認面において直径165cm、深さ27.3~43.4cmを測り、円形を呈すると考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は4層確認され、4層はロームの混入が甚大のため、壁面の崩落土であると考えられる。その他の層は混入物、夾雑物の少なさより、自然堆積であると考えられる。

#### 第26号土壌 [SK26] (第73図)

**検出状況** グリッドGQ・GR22、23に位置し、7Hの西側に位置する。IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長軸219.5cm、短軸156.0cm、深さ8.9～42.7cmを測る不整の隅丸長方形である。北東隅に被熱を受けたと考えられる焼土面が検出している。遺物の接合状況を考えると7H床面直上の遺物とSK26床面直上の遺物が接合しているので、7Hと同時期に存在していた可能性が高いと考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は8層確認され、シルト質である。上層は自然堆積であると考えられるが、下層ではローム粒、炭化物、焼土粒等の夾雑物を含み、人為的堆積土であると考えられる。

**遺構の性格** 炭化物、焼土面の検出により何らかの焼成遺構である可能性が高いと考えられる。

#### 第27号土壌 [SK27] (第74図)

**検出状況** グリッドFL24に位置し、IV層上面より確認された。

**構造** 確認面において長軸95cm、短軸70cm、深さ22.5～47.5cmを測り、不整形円形を呈する。

**重複** SK28と重複関係があり、確認面及び堆積層からSK28よりも新しいことが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認され、シルトないしは砂質シルトである。極微量のローム粒及び炭化物を含むものの自然堆積であると考えられる。

#### 第28号土壌 [SK28] (第74図)

**検出状況** グリッドFL24に位置し、IV層上面より確認された。

**構造** 確認面において直径38.5cm、深さ22.5～53cmを測り、円形を呈する。

**重複** SK27と重複関係があり、確認面及び堆積層からSK27よりも古いことが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は4層確認された。SK27と同様にシルトないしは砂質シルトで、夾雑物を若干含むものの自然堆積であると考えられる。

#### 第29号土壌 [SK29] (第75図)

**検出状況** グリッドFF19、20に位置し、IV層上面で検出された。

**構造** 確認面において直径73cm、深さ3.5～27.2cmを測り、ほぼ円形を呈する。

**覆土堆積状況** 覆土は5層確認され、第5層が壁面の崩落土の他は自然堆積土であると考えられる。

#### 第30号土壌 [SK30] (第76図)

**検出状況** グリッドCW・CX06に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長軸138.5cm、短軸122.0cm、深さ3.5～27.2cmを測り、不整な隅丸方形を呈する。

床面が被熱を受けているため、何らかの焼成遺構であると考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は6層確認され、3層にB-Tmがブロック状に混入している。自然堆積であると考えられる。

**第31号土壌 [SK31](第77図)**

**検出状況** グリッドDC・DD05に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長軸96cm、短軸78cm、深さ7～12cmを測り、隅丸長方形を呈する。

**覆土堆積状況** 覆土は2層確認され、2層は炭化物の堆積層となっており、何らかの焼成遺構である可能性が高いと考えられる。

**第32号土壌 [SK32](第78図)**

**検出状況** グリッドDE05に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長軸67.0cm、短軸47.0cm、深さ29.5～38.5cmを測り、不整な楕円形を呈する。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認され、夾雑物が少ないことから自然堆積であると考えられる。

**第33号土壌 [SK33](第79図)**

**検出状況** グリッドBO09に位置し、IV層中で確認された。

**構造** 北側部分は調査区外に掛かっているため正確な規模・形態は不明であるが、確認面において長軸170.0cm、深さ14.1～30.7cmを測り、楕円形を呈するものと考えられる。

**覆土堆積状況** 検出面での覆土は4層確認された。いずれの土質もシルト質であり、2層にB-Tmを多量に含んでいる。いずれの層もその他の夾雑物がみられないため自然堆積であると考えられる。

**第34号土壌 [SK34](第80図)**

**検出状況** グリッドBII0、11に位置し、僅かに残存するIV層で確認された。

**構造** 確認面において長軸158.0cm、短軸87.0cm、深さ22.3～31.3cmを測り、楕円形を呈する。

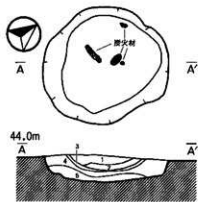
**覆土堆積状況** 覆土は6層確認された。シルト質の土質であり、夾雑物の少ない自然堆積であると考えられる。

**第35号土壌 [SK35](第81図)**

**検出状況** グリッドDH・DI04に位置し、IV層上面で確認された。

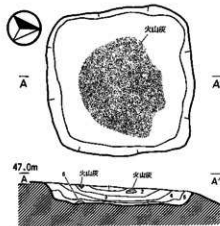
**構造** およそ3分の2が調査区外にかかるため、正確な規模・形態は不明であるが、確認面では半径150cm、深さ24.0～67.9cmを測り、円形を呈するものと考えられる。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認された。土質はいずれもシルト質であり、夾雑物が多量に含まれることから人為的堆積であると考えられる。



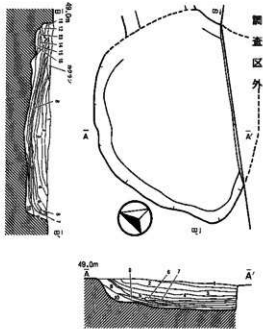
- SK01
- 第1層 黒色土 10YR2/1 炭化物を少量含む、火山灰を含む。
  - 第2層 黒色土 10YR1.7/1 炭化物を少量、火山灰を少量含む。
  - 第3層 褐色土 10YR4/4 火山灰層、黒色土(10YR2/1)を少量、炭化物を少量含む。
  - 第4層 黒褐色土 10YR2/3 炭化物を中量、ローム粒を少量、火山灰を少量含む。
  - 第5層 黒色土 10YR2/1 炭化物を少量、ローム粒を少量含む。

第58図 第1号土坑



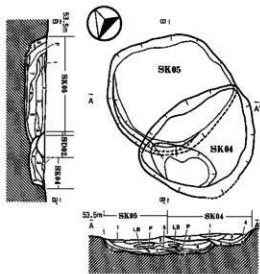
- SK02
- 第1層 黒色土 10YR1.7/1 炭化物を少量に含む。
  - 第2層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物を少量に含む、火山灰(10YR2/2)を少量含む。
  - 第3層 黒色土 10YR2/1 炭化物を少量含む、火山灰(10YR2/2)を少量含む。
  - 第4層 黒褐色土 10YR2/2 炭化物を少量含む。
  - 第5層 黒褐色土 10YR1.7/1 炭化物を少量含む、黒褐色土(10YR2/2)を少量含む、径100mm程度のローム粒を少量含む。
  - 第6層 暗褐色土 10YR3/3 径100mm程度のロームを少量含む。

第59図 第2号土坑



- SK03
- 第1層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒を少量含む。
  - 第2層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒を少量、火山灰を少量含む。
  - 第3層 黒褐色土 10YR1.7/1 火山灰を少量含む。
  - 第4層 黒褐色土 10YR2/1 ローム粒を少量、火山灰を少量含む。
  - 第5層 黒色土 10YR1.7/1 ローム粒を少量、火山灰を少量含む。
  - 第6層 黒色土 10YR1.7/1 火山灰を少量含む。
  - 第7層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒を少量、火山灰を少量含む。
  - 第8層 黒褐色土 10YR2/1 火山灰を少量含む。
  - 第9層 黒褐色土 10YR2/1 火山灰を少量含む。
  - 第10層 黒褐色土 10YR2/1 火山灰を少量、(10YR2/2)を含む。
  - 第11層 黒褐色土 10YR2/2 ローム粒を少量、火山灰を少量含む。
  - 第12層 褐色土 10YR4/4 火山灰を中量、炭化物を少量含む。
  - 第13層 暗褐色土 10YR3/3 ローム粒を少量含む。
  - 第14層 暗褐色土 10YR3/4 火山灰を少量、ローム粒を少量含む。
  - 第15層 暗褐色土 10YR2/3 ローム粒を少量、炭化物を少量含む。
  - 第16層 暗褐色土 10YR2/3 ローム粒を少量、炭化物を少量、火山灰を少量含む。

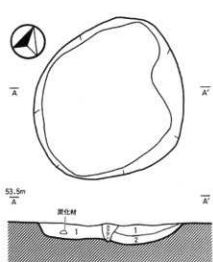
第60図 第3号土坑



- SK04
- 第1層 黒褐色土 10YR3/1 径100mm程度のロームを少量含む、炭化物、粘土を少量含む。
  - 第2層 黒褐色土 10YR3/2 径20~30mm程度のロームを少量、粘土を少量含む。
  - 第3層 暗褐色土 10YR2/3 径1cm以下のローム、径2~3mmの粘土を少量含む。
  - 第4層 暗褐色土 10YR2/3 径1cm以下のロームを少量含む。
  - 第5層 暗褐色土 10YR2/3 径1cm以下のロームを少量含む、炭化物、粘土を少量含む。
  - 第6層 暗褐色土 10YR3/3 径20~30mmの粘土を少量、炭化物を少量、灰褐色土(10YR4/2)を少量含む。

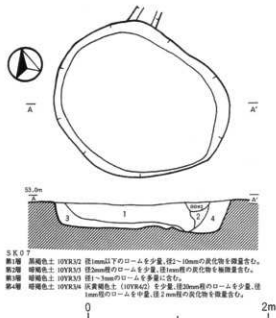
- SK05
- 第1層 黒色土 10YR1.7/1 径100mm以下のロームを少量含む。
  - 第2層 暗褐色土 10YR3/4 粘土を少量、炭化物を少量含む。
  - 第3層 暗褐色土 10YR3/3 粘土を少量、炭化物を少量含む。
  - 第4層 暗褐色土 10YR3/3 暗褐色土(10YR3/4)を少量含む、粘土を少量含む。
  - 第5層 暗褐色土 10YR3/2 径30mmの粘土を含む、径100mm程度のロームを少量、径20mm程度のロームを少量含む。
  - 第6層 暗褐色土 10YR3/3 粘土を少量、炭化物を少量含む。
  - 第7層 暗褐色土 10YR3/3 粘土を少量、炭化物を少量含む。
  - 第8層 暗褐色土 10YR3/3 粘土を少量、炭化物を少量含む。
  - 第9層 暗褐色土 10YR3/3 粘土を少量、炭化物を少量含む。
  - 第10層 暗褐色土 10YR3/2 径100mm以下のロームを少量、炭化物を少量含む。

第61図 第4・5号土坑



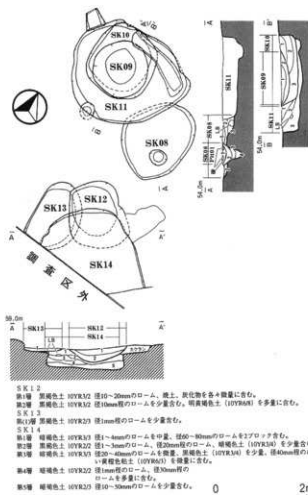
SK 0 6  
第1層 黒褐色土 10YR3/2 径20mmのローム、径50mm程の炭化物を多く含む。  
第2層 黒褐色土 10YR3/3 炭質付込に焼土がプロット混入。  
第3層 黒褐色土 10YR4/3 径2~3mmのロームを若干含む、径5mm程の炭化物を少量含む。

第62図 第6号土坑



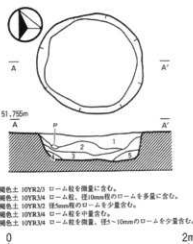
SK 0 7  
第1層 黒褐色土 10YR3/2 径10mm以下のロームを少量、径2~10mmの炭化物を微量含む。  
第2層 黒褐色土 10YR3/3 径20mm程のロームを少量、径10mm程の炭化物を微量含む。  
第3層 黒褐色土 10YR3/3 径1~3mmのロームを多量に含む。  
第4層 暗褐色土 10YR3/4 炭質褐色土 (10YR4/2) を少量、径20mm以下のロームを少量、径10mm程のロームを中量、径2mm程の炭化物を微量含む。

第63図 第7号土坑



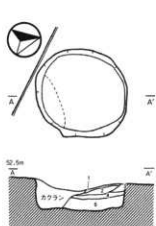
SK 0 8  
第1層 黒褐色土 10YR2/3 径20mm程のロームを微量に含む。  
第2層 黒褐色土 10YR3/2 径4~5mmのロームを中量含む。  
第3層 褐色土 10YR4/4 径10mm以下のロームを少量、径2~4mmのロームを中量含む。  
SK 0 8 p i t t  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 径10mm程のロームを微量、焼土を多量含む。  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 径1~3mmのロームを微量、径5~15mmの焼土を微量、炭化物を微量含む。  
第3層 暗褐色土 10YR3/4 径10mm程のロームを少量、炭化物を微量含む。  
第4層 以上より 10YR4/3 径10mm程のロームを中量含む。  
黒褐色土  
SK 0 9  
第1層 暗褐色土 10YR3/4 炭化物を微量、径10mm程のロームを少量含む。  
第2層 暗褐色土 10YR3/3 径1~3mmのローム、径15~20mmのロームを中量含む。  
SK 1 0  
第1層 黒褐色土 10YR2/3 径10mm程のロームを微量、径10~20mmのロームを微量に含む。  
第2層 黒褐色土 10YR2/2 径1~5mmのローム、炭質褐色土 (10YR4/2) を少量含む。  
第3層 黒褐色土 10YR3/1 黒土 (10YR2/1) を少量、炭質褐色土 (10YR4/2) を微量、炭化物を微量に含む。  
SK 1 1  
第1層 暗褐色土 10YR3/1 径10mm程のロームを、径10~15mmのロームを少量含む。  
第2層 黒褐色土 10YR2/2 径10mm程のロームを少量含む。  
第3層 黒褐色土 10YR3/1 径1~3mmのロームを多量、径20~30mmのロームを中量、炭化物を微量、焼土を微量に含む。  
SK 1 2  
第1層 黒褐色土 10YR3/2 径10~20mmのローム、焼土、炭化物を各々微量に含む。  
第2層 黒褐色土 10YR3/2 径10mm程のロームを少量含む、炭質褐色土 (10YR4/2) を多量に含む。  
SK 1 3  
第1層 黒褐色土 10YR2/3 径10mm程のロームを少量含む。  
SK 1 4  
第1層 暗褐色土 10YR3/3 径1~4mmのロームを中量、径40~80mmのロームを2プロット含む。  
第2層 黒褐色土 10YR2/2 径1~3mmのローム、径20mm程のローム、暗褐色土 (10YR3/4) を少量含む。  
第3層 暗褐色土 10YR3/1 径20~40mmのロームを微量、炭質褐色土 (10YR3/4) を少量、径40mm程のロームを少量含む。  
第4層 暗褐色土 10YR2/2 径10mm程のローム、径30mm程のロームを多量に含む。  
第5層 暗褐色土 10YR2/3 径10~30mmのロームを少量含む。

第64図 第8~14号土坑



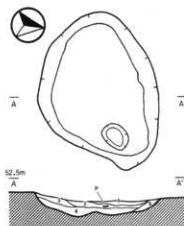
SK 1 5  
第1層 黒褐色土 10YR2/0 ロームを微量に含む。  
第2層 暗褐色土 10YR3/4 ロームを、径10mm程のロームを多量に含む。  
第3層 黒褐色土 10YR3/2 径5mm程のロームを少量含む。  
第4層 暗褐色土 10YR3/4 ロームを中量含む。  
第5層 暗褐色土 10YR3/4 ロームを微量、径5~10mmのロームを少量含む。

第65図 第15号土坑



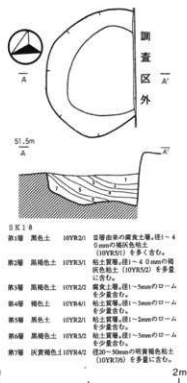
- SK16
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 径3mm程のローム、径4mm程の粘土を少量含む。
- 第2層 赤褐色土 5YR4/6 焼土層、径5mm程のロームを少量、棕色粘土ブロックを中量含む。
- 第3層 黒褐色土 10YR2/3 径1mm程のロームを少量、灰化物を微量含む。
- 第4層 褐色土 7.5YR4/6 黒褐色土(10YR2/3)を中量、径3mm程の粘土を少量、径10mm程の粘土を少量、灰化物を微量含む。
- 第5層 黒褐色土 10YR3/1 径30mm程のロームを少量、灰化物を微量、径3mm程の粘土を微量含む。

第66図 第16号土坑



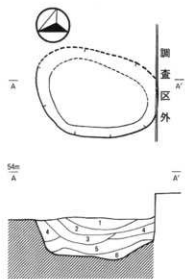
- SK17
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 径1~30mmのロームを少量、径1~9mmの粘土を少量、径1~9mmの灰化物を少量を含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 径1~9mmのロームを中量、径1~3mmの粘土を少量含む。
- 第3層 褐色土 10YR4/4 径1~30mmのロームを少量、径1~3mmの粘土を少量含む。
- 第4層 黒褐色土 10YR2/1 径20~30mmのロームを少量含む。
- 第5層 暗褐色土 10YR3/3 径1~9mmのロームを少量、径10~20のロームを少量含む。

第67図 第17号土坑



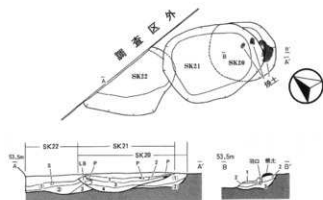
- SK18
- 第1層 黒褐色土 10YR2/3 遺留曲家の腐敗土層、径1~40mmの褐色粘土(10YR5/1)を多く含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR3/1 粘土質層、径1~40mmの褐色粘土(10YR5/2)を少量を含む。
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 腐敗土層、径1~3mmのロームを少量含む。
- 第4層 黒褐色土 10YR4/1 粘土質層、径1~3mmのロームを少量含む。
- 第5層 黒褐色土 10YR2/1 粘土質層、径1~2mmのロームを少量含む。
- 第6層 黒褐色土 10YR2/2 粘土質層、径1~3mmのロームを少量含む。
- 第7層 灰赤褐色土 10YR4/2 径20~30mmの暗褐色粘土(10YR3/6)を少量を含む。

第68図 第18号土坑



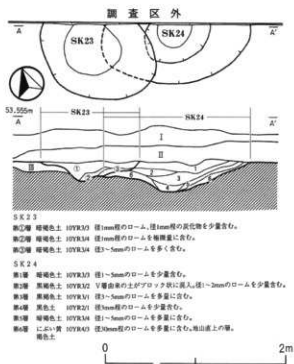
- SK19
- 第1層 黒褐色土 10YR2/1 褐色黄色粘土(10YR6/3)ブロックを少量含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 径1~3mmのロームを比較的多く含む、径10~30mmの残質黄色粘土を少量含む。
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 径1~3mmのロームを比較的多く含む、径10~30mmの残質黄色粘土を少量含む。
- 第4層 黒褐色土 10YR2/1 径10mm程の粘土を少量、径10mm程のロームを微量含む。
- 第5層 黒褐色土 10YR3/1 径40mm程の残質黄色粘土(10YR6/6)を少量含む。
- 第6層 黒褐色土 10YR3/2 径10~30mmの粘土を少量含む。

第69図 第19号土坑

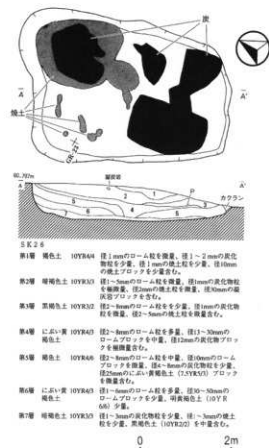


- SK20 (A-A')
- 第1層 黒褐色土 10YR2/1 径1~5mmのロームを少量、径1~3mmの灰化物を少量、径1~2mmの焼土を微量含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/1 径10~30mmのロームを少量、径1~3mmの粘土を微量含む。
- SK21
- 第1層 黒褐色土 10YR2/1 径1~3mmのロームを中量、径1~5mmの灰化物を少量、径20mm程の粘土を少量含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 径3mm程のロームを少量、径1~3mmの粘土を少量、火山灰を少量含む。
- 第3層 黒褐色土 10YR2/2 火山灰層、褐色火山灰(10YR4/4)を少量含む。
- 第4層 黒褐色土 10YR2/2 径10~100mmのロームを少量、径1~9mmのロームを少量、径1~3mmの粘土を微量含む。
- SK22
- 第1層 黒褐色土 10YR2/1 径10~30mmのロームを中量、径1~9mmのロームを少量、径1~3mmの粘土を微量含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR2/2 径20~30mmのロームを中量、径1~9mmのロームを少量、径1~3mmの粘土を微量含む。
- 第3層 黒褐色土 10YR3/3 径10~100mmのロームを少量、径1~9mmのロームを少量、径1~3mmの粘土を微量含む。
- SK20 (B-B')
- 第1層 灰赤褐色土 2.5YR5/2 粘土、焼土殻を少量含む。
- 第2層 黒褐色土 10YR3/2 径10~100mmの粘土を少量含む。
- 第3層 黒褐色土 10YR2/1 径50mmのロームを微量含む。

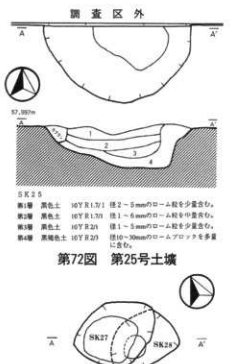
第70図 第20~22号土坑



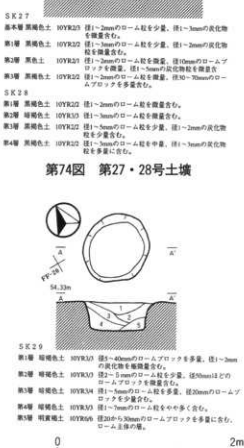
第71図 第23・24号土坑



第73図 第26号土坑



第72図 第25号土坑

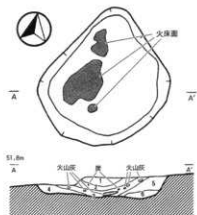


第74図 第27・28号土坑



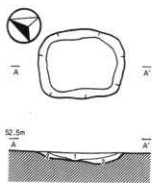
第75図 第29号土坑





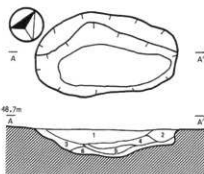
- SK 3 0
- 第1層 黒色土 10Y R 2/1 径30mmのローム粒を微量含む。  
 第2層 黒色土 10Y R 2/4 径2~10mmの炭化物を微量含む。  
 第3層 暗褐色土 10Y R 3/4 径10~20mmの炭化物を微量、径10~50mmの火山灰ブロックを中量含む。  
 第4層 黒褐色土 10Y R 2/5 径1~10mmの炭化物を微量含む。  
 第5層 暗褐色土 10Y R 3/5 径1~20mmのローム粒を微量、径5~10mmの炭化物を微量含む。  
 第6層 暗褐色土 10Y R 3/5 径30mmの粘土ブロックを少量含む。

第76図 第30号土坑



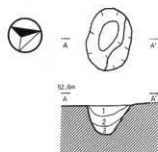
- SK 3 1
- 第1層 黒褐色土 10Y R 2/2 径1~5mmのローム粒を少量、径2~5mmの炭化物を少量含む。  
 第2層 黒色土 10Y R 1/3/1 炭化物を微量含む。黄土粒を微量含む。

第77図 第31号土坑



- SK 3 4
- 第1層 黒褐色土 10YR 2/2 径1~5mmのローム粒を少量、径1mmの炭化物を微量含む。  
 第2層 黒褐色土 10YR 2/1 径1~5mmのローム粒を中量、径1mmの炭化物を微量含む。  
 第3層 黒褐色土 10YR 2/2 径1~5mmのローム粒を中量、径10~30mmのロームブロックを少量、径1~2mmの炭化物を微量含む。  
 第4層 黒褐色土 10YR 2/2 径1~5mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物を微量含む。  
 第5層 黒褐色土 10YR 3/1 径1~2mmのローム粒を微量、径1~2mmの炭化物を微量含む。  
 第6層 黒色土 10YR 1/3 径1~5mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物を微量含む。

第80図 第34号土坑



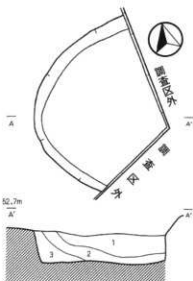
第78図 第32号土坑

- SK 3 2
- 第1層 黒色土 10YR 1/3/1 径1~5mmのローム粒を微量含む。  
 第2層 黒色土 10YR 1/3/1 径1~5mmのローム粒を少量、径10~40mmのロームブロックを少量含む。  
 第3層 黒色土 10YR 2/1 径1~2mmのローム粒を微量含む。



第79図 第33号土坑

- SK 3 3
- 第1層 黒色土 10YR 1/3/1 径1mmのローム粒を微量含む。  
 第2層 黒褐色土 10YR 2/2 径1~2mmのローム粒を微量、径1~5mmの炭化物を中量、褐色 (10YR 4/4) の火山灰を少量含む。  
 第3層 黒褐色土 10YR 2/3 径1~2mmのローム粒を少量、径1~2mmの炭化物を少量、含む。  
 第4層 黒褐色土 10YR 2/2 径1~5mmのローム粒を中量、径10~20mmのロームブロックを少量、径1~2mmの炭化物を微量含む。



- SK 3 5
- 第1層 黒褐色土 10Y R 2/2 径1~5mmのローム粒を中量、径1~2mmの炭化物を微量、径1~5mmの炭化物を少量含む。  
 第2層 黒褐色土 10Y R 3/1 径1~5mmのローム粒を少量、径10~50mmのロームブロックを少量、径1~2mmの炭化物を少量含む。  
 第3層 黒褐色土 10Y R 2/2 径1~2mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームブロックを少量、径1~2mmの炭化物を少量含む。

第81図 第35号土坑



### 3 溝状遺構

#### 第1号溝状遺構 [SD01](第82図)

**検出状況** グリッドBK09~12、BL・BN・BO09・10に位置し、僅かに残存しているIV層上面で確認された。

**構造** 確認面において長さ17m72cm、幅43~112cmであり、深さは13~44cmを測り、小型の溝跡である。グリッドBO08付近で南東方向から南西方向にほぼ垂直に向きを変え、北東方向から南西方向

に緩やかに南側に蛇行しながらSK03と重複する。

**重複** SK03と重複関係があり、確認面、堆積状況からSK03よりも新しいものと確認された。

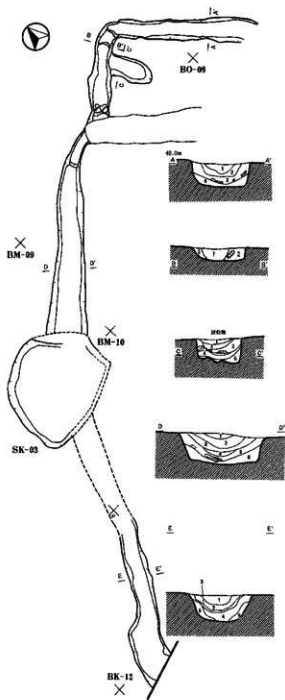
**覆土堆積状況** 各セクションにおいて、堆積層中からB-Tmが厚く(数cm)堆積している。また、上層は黒色土(腐植土)が堆積しており、混入物もごく僅かである点から自然堆積層であると考えられる。

**遺物の出土状況** 床面直上から完形の土師器の坏が倒立した状態で出土し、B-Tm直上から炭化材が出土した。

#### 第2号溝状遺構

[SD02](第83図)

**検出状況** グリッドD D02・03・04に位置



SD01 (A-E')  
 第1層 黒色土 1979L170 50cm層のローム灰を埋積層とする。  
 第2層 黒色土 1979L200 ロー灰を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。  
 第3層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第4層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。

SD01 (B-E')  
 第1層 黒色土 1979L170 50cm層のローム灰を埋積層とする。  
 第2層 黒色土 1979L200 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。

SD01 (C-E')  
 第1層 黒色土 1979L170 50cm層のローム灰を埋積層とする。  
 第2層 黒色土 1979L200 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第3層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第4層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第5層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。

SD01 (D-E')  
 第1層 黒色土 1979L170 50cm層のローム灰を埋積層とする。  
 第2層 黒色土 1979L200 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第3層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第4層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第5層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。

SD01 (E-E')  
 第1層 黒色土 1979L170 50cm層のローム灰を埋積層とする。  
 第2層 黒色土 1979L200 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第3層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第4層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。  
 第5層 黒色土 1979L210 埋積層を埋積層とする。埋積層を埋積層に相当する。セクション「B」の埋積層に相当する。

第82図 第1号溝状遺構 (セクションのスケールは2倍)

し、IV層上面で確認された。調査範囲内における規模は長さ9m89cm、幅30~71cmであり、深さは10~16cmを測る。緩やかに西に蛇行しながら南北に通る形態である。

**重複** SK04、SK05、SD03と重複関係があり、確認面及び土層断面の観察から一番新しい遺構であることが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は3層認められ、各遺構と重複する付近では、焼土ブロック、褐色土などの混入が認められるが、その他の堆積土をみると混入物も微量である。従って遺構の重複する付近では各遺構の覆土が流入したものと考えられ、自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 須恵器の坏1個体分と土師器の甕3個体分が出土しており、SK04、SK05に比較すると極めて出土量は少ない。

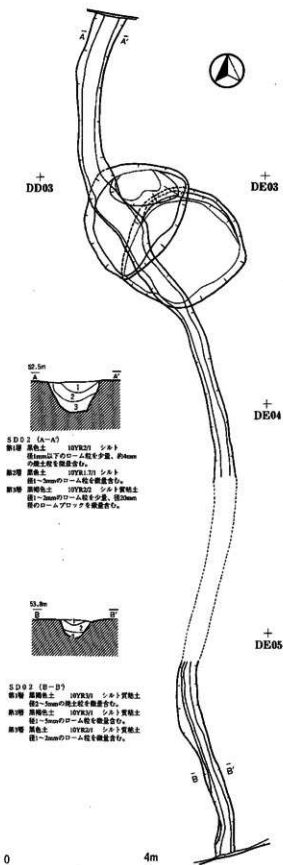
### 第3号溝状遺構 [SD03] (第84図)

**検出状況** グリッドDL~DN05、DO04・05、DP~DR04に位置し、IV層で確認された。調査範囲内における規模は長さ18m44cm、幅78~202cm、深さ22~202cmを測り、断面形はV字状を呈する。いわゆる防衛用の濠跡を連想させる溝跡である。平面形はほぼ直線形を呈し、比高差約2mの地点を南西方向から北東にむかって貫通している。調査区内における遺構の性格は不明であるが、排水用、防衛用いずれかの使用目的のために形成された溝跡であると考えられる。

**重複** SK12と重複関係があり、確認面及び土層断面の観察からSK12よりも新しいことが確認された。

**覆土堆積状況** 覆土は全体で13層確認され、上層(3、4層)は多量の黄褐色粘土を含み、人為的堆積であるが、下層は含有物も少なく、自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 土師器の甕4個体分が出土して



第83図 第2号溝状遺構 (セグメントのスケールは2倍)



いるのみで、出土遺物は検出面積に比して少ない。

#### 第4号溝状遺構 [SD04] (第85図)

**検出状況** グリッドFEQ17、ER17・18、ES17・18に位置し、IV層で確認された。東方向から南西方向にかけて緩やかに蛇行している。

**構造** 両端が調査区外にかかっているため、正確な規模、形態は不明であるが、確認面において長さ11m16cm、幅136～348cm、深さ39～71cmを測り、弧状の溝跡である。

**覆土堆積状況** 上層及び下層は自然堆積であるが、それ以外特に遺物包含層直上の層は白色粘土ブロックが多量に混入し、人為的堆積であると考えられる。なお、上層にB-Tmが薄層状に堆積している。

**遺物の出土状況** (第86図) 底面及び堆積土中から大量の須恵器片、土玉3点が出土しており、使用されなくなった土器、土製品の捨て場となった可能性が考えられる。接合個体は全部で5個体であり、接合間の距離は、最短で18cm、最長で282cmを測る。

**出土遺物の概要** 個体復元可能な遺物は第87・88図に示すように19個体である。第87図1・2は土師器の長胴壺で、いずれもロクロ成形後、体部外面はケズリ調整が施されている。内面は1がナデ調整、2がロクロナデのみである。第87図3・4は須恵器の鉢である。いずれもロクロナデ調整が施され、4は頸部内面に横ナデが施されている。3は焼成前の穿孔が頸部にみられる。4の底面は回転糸切り痕を留めている。第87図5は土師器の坏であり、体部下半にヘラ記号が刻まれている。底面は回転糸切り痕を留めている。第87図6～12は須恵器の坏であり、10の体部に「大」の字のヘラ記号が刻まれ、7・9・11には火罨痕がみられる。6・7・12の底面はいずれも回転糸切り痕を留めている。第87図13・14・16は須恵器の長頸壺であり、13は頸部に、14は肩部にヘラ記号が刻まれている。16は当遺跡では珍しく、肩部と頸部の付け根に隆帯を巡らさない器種である。第87図15、第88図1・3は須恵器の広口短頸壺であり、第87図15には肩部に、第88図3には頸部にヘラ記号が刻まれている。第87図15はロクロ成形後、体部下半外面にケズリ調整が施されている。底面はナデ調整が施されている。第88図1はロクロナデの後体部下半にケズリ調整が施されている。第88図3はタタキ調整の後、ロクロナデを行い、体部下半にはケズリ調整を施している。第88図2は須恵器の小型壺であり、頸部から肩部にかけてヘラ記号が刻まれている。調整はロクロナデの後、肩部には平行タタキ調整、体部には格子タタキ調整、頸部内面には横ナデが施されている。

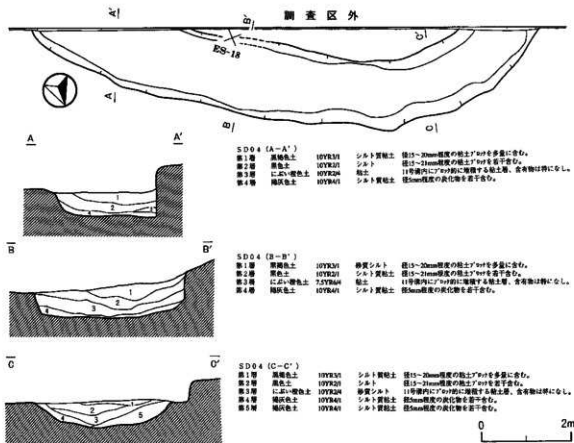
#### 第11号溝状遺構 (SD11) (第89図)

**検出状況** グリッドFU・FV23、24に位置し、IV層で確認された。北側部分は調査区外に掛かり、南側部分は農道により削平されている。確認面での長さ5m28cm、幅35～48cm、深さ33～48.4cmを測る弧状の溝である。

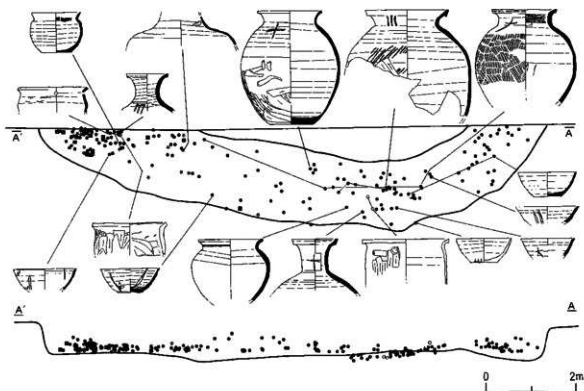
**覆土堆積状況** 覆土は2層確認され、自然堆積であると考えられる。

#### 第5号溝状遺構 [SD05] (第90図)

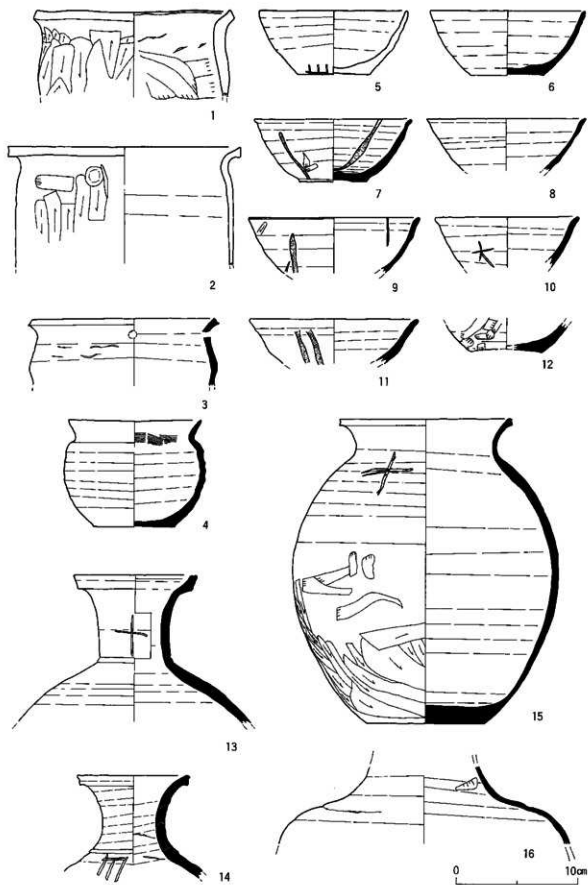
**検出状況** グリッドEX・EY18、19に位置し、IV層で確認された。南北で調査区外に掛かっているた



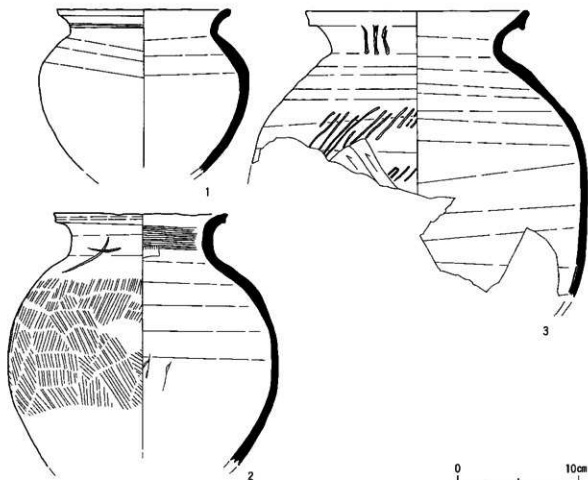
第85図 第4号溝状遺構(セクションのスケールは2倍)



第86図 第4号溝状遺構出土遺物分布図



第87図 第4号溝状遺構出土土器 (1)



第88図 第4号溝状遺構出土土器(2)

め正確な規模、形態は不明であるが、長さ3 m 45cm、幅83~111cm、深さ24.3~40.1cmを測り、南東方向から北西へ伸びる直線的な溝である。

**覆土堆積状況** 覆土は8層確認され、自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 土器片19点、鉄滓19点、羽口片6点が出土している。

**第6号溝状遺構 [SD06](第91図)**

**検出状況** グリッドFA20、FB20・21に位置し、IV層で確認された。北西から南東にかけて緩やかに蛇行しながら調査区外へと伸びている。両端が調査区外にかかっているため、正確な規模、形態は不明であるが、調査区内において長さ4 m 64cm、幅14~28cm、深さ24~28cmを測り、南北方向に走る直線的な溝である。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認され、各層にわたり、多量の粘土、ローム粒、ロームブロックを含むことから人為的堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 土器片49点、土玉2点、鉄滓1点が出土している。



## 第7号溝状遺構 [SD07] (第92図)

**検出状況** 検出状況 グリッドFA18～20、FB20、21に位置し、IV層で確認された。北西から南東にかけて緩やかに蛇行しながら南北に走る溝跡である。両端が調査区外にかかっているために正確な規模、形態は不明であるが、調査区内において長さ11m21cm、幅24～86cm、深さ24～28cmを測る。

**重複** 調査区内において重複関係は認められなかった。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認され、各層にわたり、多量の粘土、ローム粒、ロームブロックを含むことから人為的堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 土師器の甕5個体分が出土している。

## 第8号溝状遺構 [SD08] (第92図)

**検出状況** グリッドFA18に位置し、IV層で確認された。ほぼ直線的に南北に走る溝跡である。両端が調査区外にかかっているために正確な規模、形態は不明であるが、調査区内において長さ287cm、幅103～206cmを測る。比較的幅の広い溝跡である。両側は重機によりカクランを受けていた。

**重複** 調査区内において重複関係は認められなかった。

**覆土堆積状況** 覆土は7層確認され、最下層はロームを多量に含み、壁面崩落土の可能性が考えられるが、自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 須恵器片(壺2個体分、坏1個体分)、土師器片(甕4個体分、坏1個体分)、土鈴2点が出土している。

## 第9号溝状遺構 [SD09] (第93図)

**検出状況** グリッドFP22、23に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 北側部分は調査区外に掛かり南側部分は農道により削平されている。確認面での長さ5m28cm、幅57～141cm、深さ33～48.4cmを測り、ほぼ直線的な溝である。

**覆土堆積状況** 覆土は3層確認され、1、2層は自然堆積であり、3層はロームの混入が目立つことから壁面の崩落土であると考えられる。

## 第10号溝状遺構 [SD10] (第93図)

**検出状況** グリッドFQ・FR23、24に位置し、IV層上面で確認された。

**構造** 北側部分は調査区外に掛かり、南側部分は農道により削平されている。確認面での長さ7m10cm、幅70～110cm、深さ39.6～65.4cmを測る弧状の溝である。

**覆土堆積状況** 覆土は7層確認され、1層に中量、2層全体にB-Tmが多量に混入している。全体に暗褐色の土層で、自然堆積であると考えられ、最下層はロームの混入が目立つことから壁面の崩落土であると考えられる。

## 第12号溝状遺構 [SD12] (第96図)

**検出状況** グリッドHB・HC・HD19に位置し、IV層で確認された。北側部分はSDX04に連結し、南

側部分はSD13、SD14にきられている。確認面での長さ6 m 14 cm、幅45～56 cm、深さ33.6～49.7 cmを測るほぼ直線形を呈する溝である。

**覆土堆積状況** 覆土は4層確認され、第4層にB-Tmが混入している。それ以外の夾雑物、混入物は少なく自然堆積であると考えられる。

#### 第13号溝状遺構 [SD13] (第96図)

**検出状況** グリッドHC17・18・19に位置し、IV層で確認された。確認面での長さ11 m 13 cm、幅49～88 cm、深さ24.1～32.1 cmを測り、直線形を呈する溝である。

**重複** SD12、SD14と重複関係があり、確認面及び堆積状況から一番新しい溝跡であることが確認された。

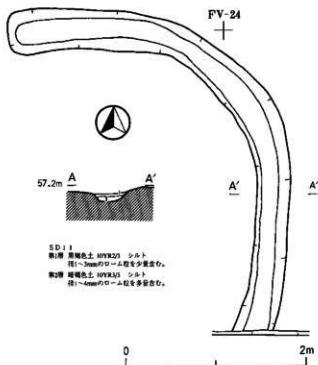
**覆土堆積状況** 覆土は4層確認され1～3層にB-Tmが混入している。それ以外の夾雑物、混入物は少なく自然堆積であると考えられる。

#### 第14号溝状遺構 [SD14] (第96図)

**検出状況** グリッドHC19、HD・HE18・19に位置し、IV層で確認された。確認面での長さ6 m 14 cm、幅47～78 cm、深さ23.7～45 cmを測るほぼ直線形を呈する溝である。

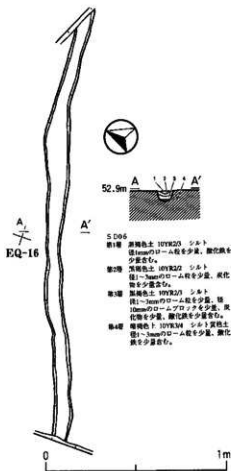
**重複** 確認面及び層の堆積状況からSD12よりも新しく、SD13よりも古いことが判明した。

**覆土堆積状況** 覆土は4層確認され、1～3層にB-Tmが混入している。それ以外の夾雑物、混入物は少なく自然堆積であると考えられる。



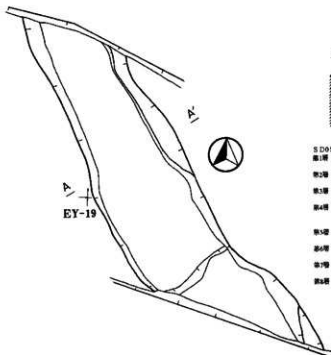
第89図 第11号溝状遺構

- SD11
- 第1層 黒褐色土 HVK20 シルト 径1~3mmのローム粒を少量含む。
  - 第2層 黒褐色土 HVK33 シルト 径1~4mmのローム粒を多量含む。



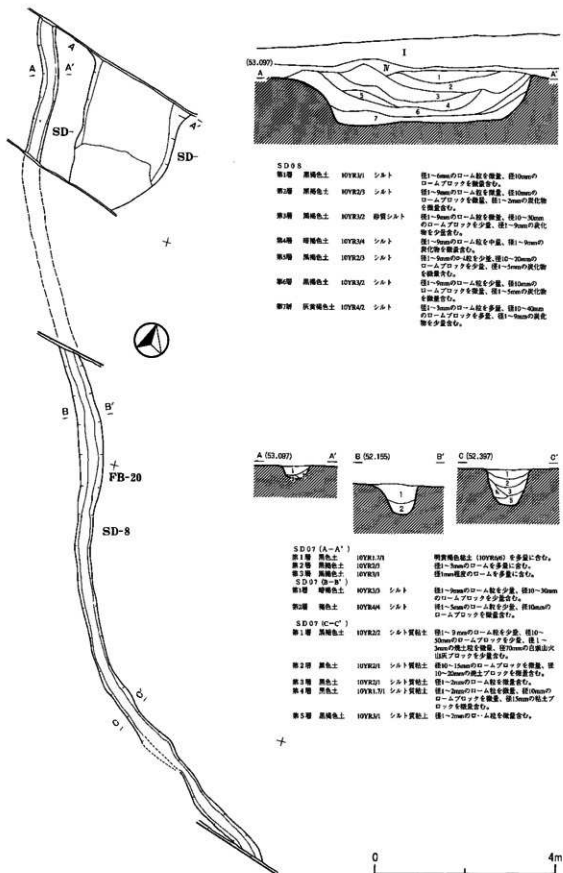
第90図 第5号溝状遺構

- SD06
- 第1層 黒褐色土 HVK20 シルト 径10mmのローム粒を少量、動物糞を少量含む。
  - 第2層 黒褐色土 HVK27 シルト 径1~3mmのローム粒を少量、炭化物を少量含む。
  - 第3層 黒褐色土 HVK27 シルト 径1~3mmのローム粒を少量、径10mmのロームブロックを少量、炭化物を少量、腐化鉄を少量含む。
  - 第4層 黒褐色土 HVK34 シルト 質土 径1~3mmのローム粒を少量、腐化鉄を少量含む。

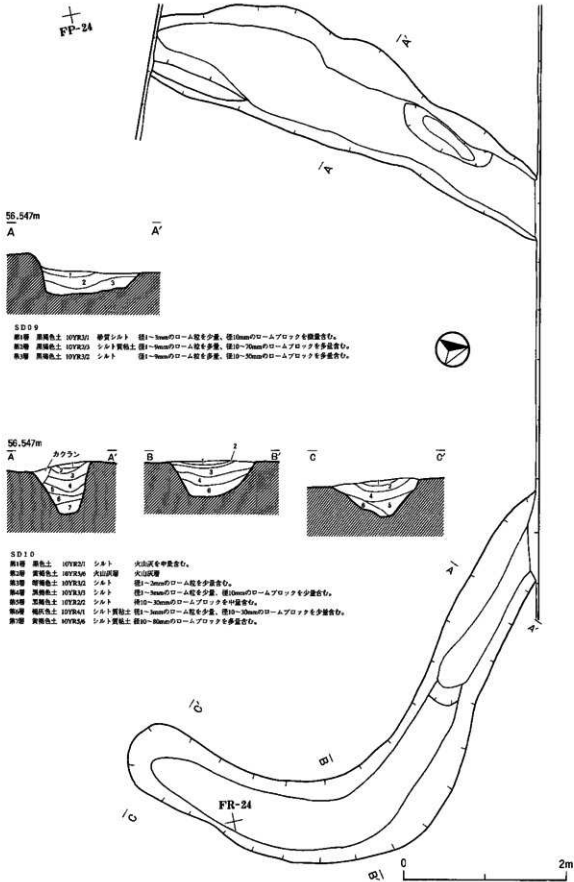


第91図 第6号溝状遺構

- SD05
- 第1層 黒褐色土 HVK32 シルト 径1~5mmのローム粒を中量、径1~2mmの炭化物を少量含む。
  - 第2層 灰色土 HVK27 シルト 径1~3mmのローム粒を少量、径1~3mmの炭化物を少量含む。
  - 第3層 黒褐色土 HVK27 シルト 径1~2mmのローム粒を少量、径3mmのロームブロックを少量含む。
  - 第4層 黒褐色土 HVK22 シルト 径1~2mmのローム粒を中量、径10mmの炭化物を少量、径1~2mmの硝子塊を少量含む。
  - 第5層 黒褐色土 HVK23 シルト 径1~3mmのローム粒を少量、径10~20mmのロームブロックを少量含む。
  - 第6層 灰色土 HVK31 シルト 径1~2mmのローム粒を少量含む。
  - 第7層 灰色土 HVK27 シルト 径1~3mmのローム粒を中量、径30mmのロームブロックを少量含む。
  - 第8層 灰色土 HVK130 シルト 含有物無し。



第92図 第7・8号溝状遺構 (セクションはスケールの2倍)



第93図 第9・10号溝状遺構

第1号方形溝状遺構 [SDX01] (第94図)

検出状況 グリッドBE・BF・BG12に位置し、IV層上面で確認された。

構造 南側及び西側で調査区外に掛かっており、正確な規模、形態は不明であるが、確認面において長さ7m85cm、幅48~135cm、深さ21.9~44.2cmを測り、方形の溝跡である。

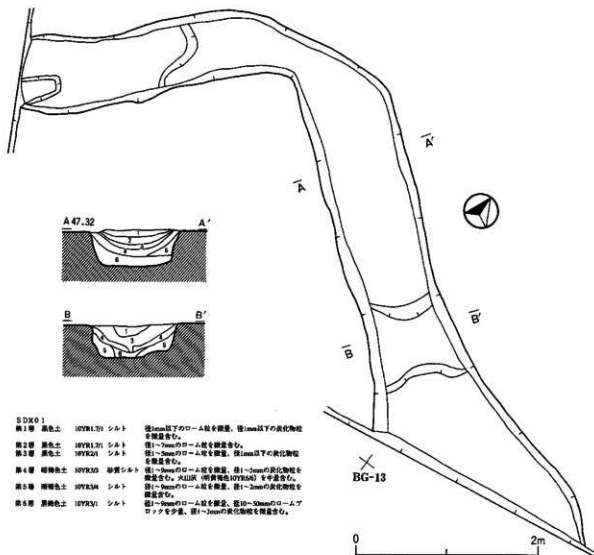
覆土堆積状況 覆土は6層確認され、4層にB-Tmを混入する。夾雑物が少なく、自然堆積であると考えられる。

遺物の出土状況 土師器片が9点出土したにすぎない。

第2号方形溝状遺構 [SDX02] (第95図)

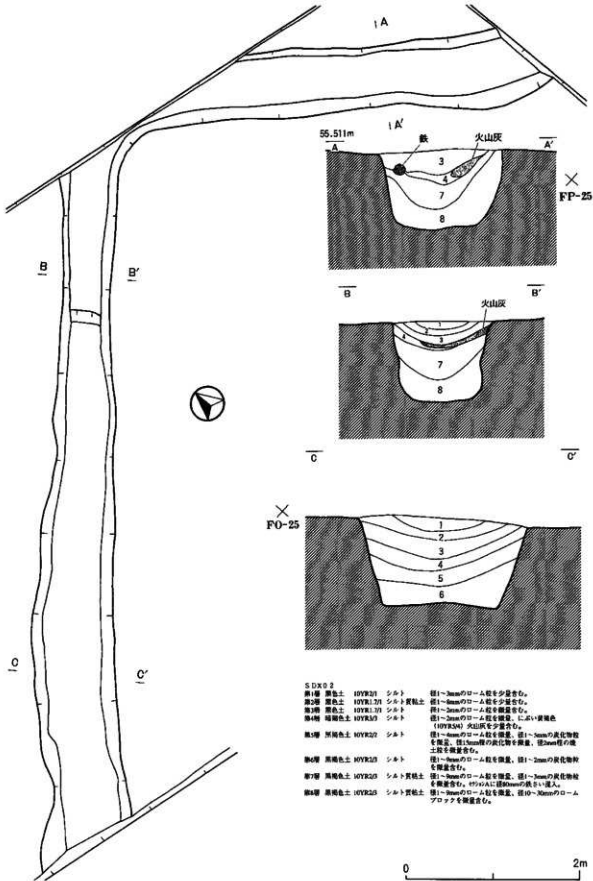
検出状況 グリッドFN・FO24、25に位置し、IV層上面で確認された。

構造 北側及び南側が調査区外に掛かっており、正確な規模、形態は不明であるが、確認面での長さ12m95cm、幅53~103cm、深さ37.5~57.8cmを測る方形の溝である。



SDX01		
第1層	黒色土 10YR1.7/1 シルト	厚10cm以下のローム殻を露出、厚10cm以下の炭化物粒を散見含む。
第2層	黒色土 10YR1.2/1 シルト	厚1~7mmのローム殻を露出含む。
第3層	黒色土 10YR2/1 シルト	厚1~5mmのローム殻を露出、厚10cm以下の炭化物粒を散見含む。
第4層	暗褐色土 10YR3/3 砂質シルト	厚1~10mmのローム殻を露出、厚1~5mmの炭化物粒を露出含む。大山沢(所見褐色10YR5/6)を中量含む。
第5層	暗褐色土 10YR3/4 シルト	厚1~10mmのローム殻を露出、厚1~2mmの炭化物粒を露出含む。
第6層	黒褐色土 10YR3/1 シルト	厚1~10mmのローム殻を露出、厚10~30mmのロームブロックを少量、厚1~5mmの炭化物粒を露出含む。

第94図 第1号方形溝状遺構



S.D.R. 2

- 第1層 黒色土 10YR2/1 シルト 層1~2mmのローム粒を少量含む。
- 第2層 黒色土 10YR1.5/1 シルト質粘土 層1~2mmのローム粒を少量含む。
- 第3層 黒色土 10YR1.3/1 シルト 層1~2mmのローム粒を少量含む。
- 第4層 黒褐色土 10YR2/3 シルト 層1~2mmのローム粒を少量含む。に灰~黒褐色(10YR5/4) 火山灰を少量含む。
- 第5層 黒褐色土 10YR2/2 シルト 層1~2mmのローム粒を少量含む。層1~2mmの炭化物粒を少量含む。層3~5mm程度の炭化物を少量含む。層2~3mm程度の炭土層を少量含む。
- 第6層 黒褐色土 10YR2/3 シルト 層1~2mmのローム粒を少量含む。層1~2mmの炭化物粒を少量含む。
- 第7層 黒褐色土 10YR2/3 シルト質粘土 層1~2mmのローム粒を少量含む。層1~2mmの炭化物粒を少量含む。0.5~1mmに達する鉄の塊を含む。
- 第8層 黒褐色土 10YR2/3 シルト質粘土 層1~2mmのローム粒を少量含む。層10~20mmのロームブロックを少量含む。

第95図 第2号方形溝状遺構 (セクションはスケールの2倍)

**覆土堆積状況** 覆土は全部で11層確認され、4層にB-Tmが混入している。自然堆積であると考えられるが、最下層にロームの混入が目立つことから壁面の崩落土である可能性が考えられる。

**遺物の出土状況** 少量の土師器片が出土したにすぎない。

### 第3号方形溝状遺構 [SDX03] (第96図)

**検出状況** グリッドGY19・20、GZ18・19・20、HA18・19・20に位置し、Ⅲ～Ⅳ層で確認された。

**構造** 南側部分が調査区外に掛かっているため性格な構造は不明であるが、確認面での長さ約33m、幅38～115cm、深さ30～70cmを測る方形の溝である。

**覆土堆積状況** 覆土は7層確認され、1～5層にB-Tmがみられる。夾雑物の少ないシルト質の黒色土を基調とした自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 少数の土師器・須恵器片が出土したにすぎない。

### 第1号並列溝状遺構 [SXSD01] (第97図)

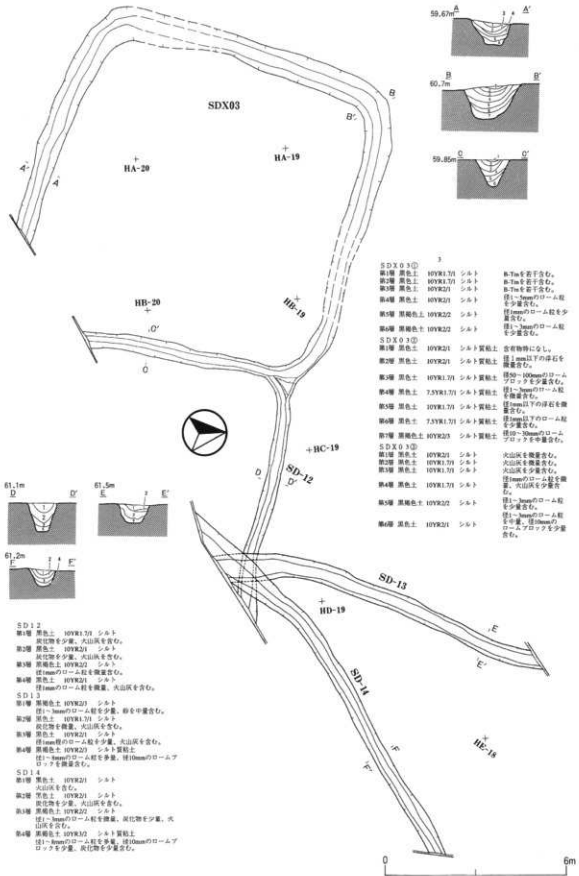
**検出状況** グリッドES・ET17・18に位置し、Ⅲ層中に確認された。ほぼ2条の溝跡が北西から南東方向に直線的に併行して認められた。発掘当時は2条の溝跡として認識していたが、①溝の堆積土中に白頭山火山灰が検出された点、②溝の掘り方が明確でなく、火山灰層を除去するとプランが認識しづらくなる点などから、昨年発掘調査が行われた隠川(4)遺跡で検出された並列溝状遺構(木村・三林 1998)と性格が類似することより、2条と条数は少ないが、この名称を使用する事にした。

**重複** 調査区内において重複は認められなかった。

**覆土堆積状況** 覆土は1～2層確認され、B-Tmがプライマリーな状態で残存していることから自然堆積であると考えられる。

**遺物の出土状況** 遺物は特になかった。

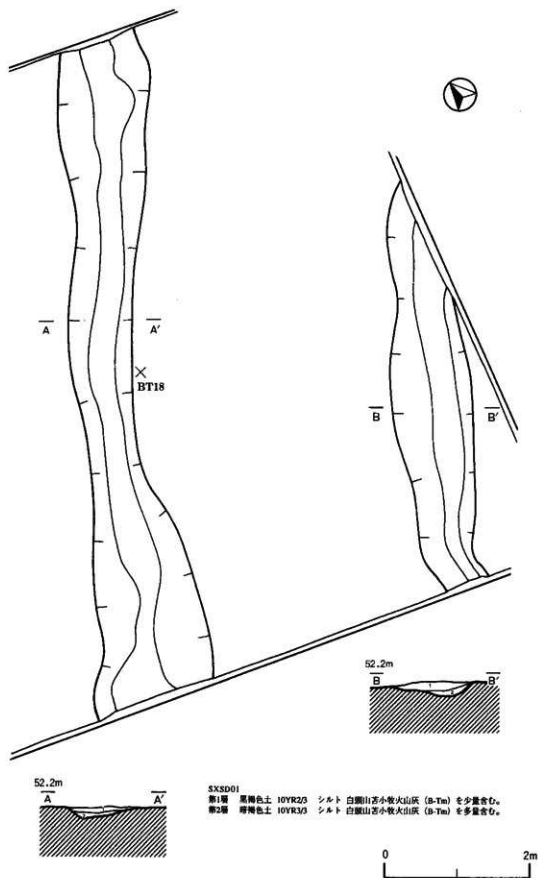




- SDX03③
- |                       |                   |
|-----------------------|-------------------|
| 第1層 黒色土 10YR1.7/1 シルト | 厚1-3mmを若干含む。      |
| 第2層 黒色土 10YR1.7/1 シルト | 厚1-3mmを若干含む。      |
| 第3層 黒色土 10YR2.1 シルト   | 厚1-3mmを若干含む。      |
| 第4層 黒色土 10YR2.1 シルト   | 径1-3mmのローム粒を少量含む。 |
| 第5層 黒褐色土 10YR2.2 シルト  | 径1-3mmのローム粒を少量含む。 |
| 第6層 黒褐色土 10YR2.2 シルト  | 径1-3mmのローム粒を少量含む。 |
- SDX03④
- |                           |                         |
|---------------------------|-------------------------|
| 第1層 黒色土 10YR2.1 シルト質粘土    | 直径1mm以下の浮石を散らさず含む。      |
| 第2層 黒色土 10YR2.1 シルト質粘土    | 直径1-100mmのロームブロックを少量含む。 |
| 第3層 黒色土 7.5YR1.7/1 シルト質粘土 | 径1-3mmのローム粒を少量含む。       |
| 第4層 黒色土 10YR1.7/1 シルト質粘土  | 径1mm以下の浮石を散らさず含む。       |
| 第5層 黒色土 7.5YR1.7/1 シルト質粘土 | 径1mm以下の浮石を散らさず含む。       |
| 第6層 黒色土 7.5YR1.7/1 シルト質粘土 | 径1-3mmのローム粒を少量含む。       |
| 第7層 黒褐色土 10YR2.3 シルト質粘土   | 径10-20mmのロームブロックを少量含む。  |
- SDX03⑤
- |                       |                                      |
|-----------------------|--------------------------------------|
| 第1層 黒色土 10YR2.1 シルト   | 火山灰を微量含む。                            |
| 第2層 黒色土 10YR1.7/1 シルト | 火山灰を微量含む。                            |
| 第3層 黒色土 10YR1.7/1 シルト | 径1mmのローム粒を散らさず含む。                    |
| 第4層 黒色土 10YR1.7/1 シルト | 径1-3mmのローム粒を少量含む。径10mmのロームブロックを少量含む。 |

- SD12
- |                       |                      |
|-----------------------|----------------------|
| 第1層 黒色土 10YR1.7/1 シルト | 炭化物を少量、火山灰を含む。       |
| 第2層 黒色土 10YR2.1 シルト   | 炭化物を少量、火山灰を含む。       |
| 第3層 黒褐色土 10YR2.2 シルト  | 径1mmのローム粒を微量含む。      |
| 第4層 黒色土 10YR2.1 シルト   | 径1mmのローム粒を微量、火山灰を含む。 |
- SD13
- |                         |                                    |
|-------------------------|------------------------------------|
| 第1層 黒褐色土 10YR2.3 シルト    | 径1-3mmのローム粒を少量、砂を中量含む。             |
| 第2層 黒色土 10YR1.7/1 シルト   | 炭化物を微量、火山灰を含む。                     |
| 第3層 黒色土 10YR2.1 シルト     | 径1mm程度のローム粒を少量、火山灰を含む。             |
| 第4層 黒褐色土 10YR2.3 シルト質粘土 | 径1-3mmのローム粒を少量、径10mmのロームブロックを微量含む。 |
- SD14
- |                         |                                           |
|-------------------------|-------------------------------------------|
| 第1層 黒色土 10YR2.1 シルト     | 火山灰を含む。                                   |
| 第2層 黒色土 10YR2.1 シルト     | 炭化物を少量、火山灰を含む。                            |
| 第3層 黒褐色土 10YR2.2 シルト    | 径1-3mmのローム粒を微量、炭化物を少量、火山灰を含む。             |
| 第4層 黒褐色土 10YR2.2 シルト質粘土 | 径1-3mmのローム粒を少量、径10mmのロームブロックを少量、炭化物を少量含む。 |

第96図 第12・13・14号溝状遺構、第3号方形溝状遺構（セクションはスケールの2倍）



第97図 第1号並列溝状遺構

## 第2節 平安時代の出土遺物

今回の調査で出土した平安時代の遺物は全部で天箱数にして200箱程である。うち遺構内から出土し、その帰属層位が明確なものは全体の約3分の1の70箱程である。

### 1 出土土器

#### a 出土土器の概要

隠川(2)外遺跡で出土した遺跡は、出土遺構内に堆積するB-Tmの状況から考えると9世紀末から10世紀初頭に位置づけられる土器群に相当する。

#### b 分析土器の選定

分析に使用した土器は本遺跡において畑等の耕作により、包含層は削平もしくは攪乱を受けているために、遺構外から出土した土器を除外し、遺構内での出土層位が明確な土器の中から、完形土器と個体認定が可能な口縁部及び底部土器片を抽出し、型式学的分析を進めた。

そのさいに分析に使用するための属性として①形態、②成形技術、③調整手法、④焼成、⑤器面の色調を検討してみた。

#### c 器形の類型化

器形の類型化では、当時期の土器は定型化が進んでおり、法量も各類型で同様の傾向がみられる。そこで、各遺構間での出土土器を比較できるように従来から使用されている器形を使用し、その基本枠として、A類 甕、B類 鉢(小型壺)、C類 坏、D類 皿、E類 壺、F類 その他、G類 ミニチュアの7つに大別した。その内須恵器に関しては各器種類型の頭にSを付した。

#### d 成形技法

各種土師器の製作技法は基本的には輪積み法により、土器を製作しているが、その成形過程で大きく分類して以下の2つの方法がとられている。

1類：ロクロを使用するもの

2類：ロクロを使用しないもの

1類は以下の7つに細分される

1 a類：ロクロナデのみで調整されるもの

1 b類：ロクロによる成形後、横ナデが施されるもの

1 c類：ロクロによる成形後、ケズリ調整が施されるもの

1 d類：ロクロによる成形後、ナデ調整が施されるもの

1 e類：ロクロによる成形後、ケズリ調整が施された後、ナデ調整が施されるもの

1 f類：ロクロによる成形後、ミガキ調整が施されるもの

1 g類：ロクロによる成形後、叩き調整が施されるもの

2類は以下の5つに細分される。

- 2 a 類：ケズリ調整により、成形されるもの
- 2 b 類：ナデ調整によるもの
- 2 c 類：ケズリ調整後、ナデ調整が施されるもの
- 2 d 類：叩き調整が施されるもの
- 2 e 類：叩き調整後、ナデ調整が施されるもの

○ 底面の切り離し・調整技法

各種土器の底面の切り離し・調整技法はロクロの使用の有無、成形台から切り離した後の調整手法により、以下の7種類に分類される。

- 1 類：無調整
- 2 類：砂底
- 3 類：回転糸切痕をもつもの
- 4 類：静止糸切痕をもつもの
- 5 類：ヘラケズリの調整をもつもの
- 6 類：ナデ調整をもつもの
- 7 類：ケズリ調整後、ナデ調整が施されるもの

さらに3類は以下の4類型に分類される。

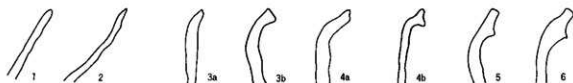
- 3 a 類：回転糸切痕のみのもの
- 3 b 類：回転糸切り離した後、ケズリ調整が施されるもの
- 3 c 類：回転糸切り離した後、ナデ調整が施されるもの
- 3 d 類：回転糸切り離した後、ケズリ調整が施された後、ナデ調整が施されるもの

f 口縁部端面の形状

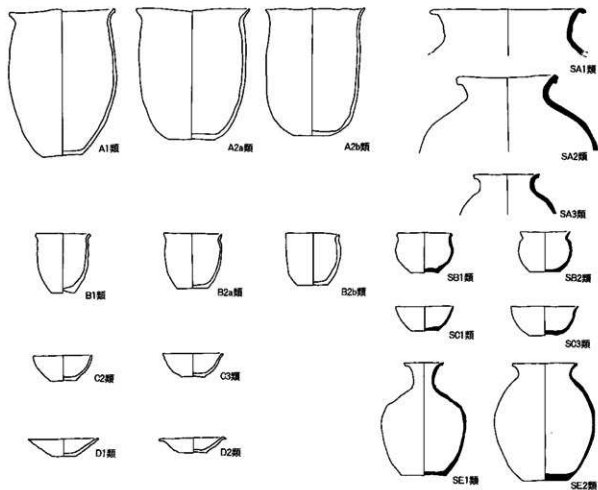
各種土器の口縁部の端面形を第98図に並記した。

- 1 類：口唇部が丸く収まる形状である。土師器の長胴甕、小型甕、坏、皿、須恵器の坏等に見られ、当時期に該当する土器ではもっとも一般的である。
- 2 類：口唇部が先細りとなる形状である。土師器の坏、須恵器の鉢、坏に見られる。
- 3 a 類：口唇部が平坦な形状であり断面系が四角形を呈する。土師器の長胴甕、小型甕、須恵器の鉢に見られる。
- 3 b 類：口唇部は3 a 類と同様であるが、口唇部両端を面取りすることにより、断面は角の丸い逆台形状を呈する。土師器の長胴甕、小型甕、須恵器の鉢、壺等に見られる。
- 4 a 類：口唇部が指等による押圧により、断面形がU字状を呈する。土師器の長胴甕、小型甕、須恵器の壺、鉢等に見られる。
- 4 b 類：口唇部は4 a 類と同じであるが、口唇部両端下を面取りすることにより、断面はY字状を呈する。
- 5 類：口唇部に2段面取りが行われ、上半が3類の形状、下半が4類の形状を呈するもの。土師器の長胴甕、須恵器の中甕等に見られる。

6類：口唇部に2段面取りが行われ、上半下半ともに4類の形状を呈するもの。



第98図 口縁部の端面形各種



第99図 出土土器の器種類型

g 色調

土器はその焼成状況により様々な色調を呈する。ここでは分類基準として、隠川(4)・02遺跡(木村・三林 1998)に準拠した。なお色調の分類には「新版標準土色帖」(小山・竹原 1990)を使用した。

須恵器	1 青灰色系のもの	土師器	6 赤褐色系のもの
	2 灰色系のもの		7 褐色系のもの
	3 褐灰色系のもの		8 灰白色系のもの
	4 明褐灰色系のもの		9 その他
	5 その他		

## h 器種類型(土師器)

### A類 長胴壺(第100～104図)

#### A1類 (第100～102図、第103図-1～7、9)

当遺跡において最も出土量の多い壺である。口縁部端面形は3・4・5・6類を呈し、口頸部にゆるやかな屈曲面をもち、体部最大径を体部上半に有する。体部上半から底部にかけては直線的ないしはゆるやかに内彎する器型である。最大径は口縁部にくるものが大半を占める。個体復元が可能なものでは、口径180～268mm、平均224mmである。器高に対する口径の比は1.32～1.35であり、平均1.33である。

成形技法は輪積み技法の後成形にロクロを使用するものが大半であり、外面調整は体部上半から底部にかけてケズリ調整を行うものが大半をしめる。内面はロクロナデのみもしくは布、ヘラ等の工具を使用したナデが施される。

#### A2 a類 (第103図-8・10、第104図-1・3・4・8)

口縁部端面形は1類を呈し、口頸部と体部とに明確な屈曲点を有し、外反する器形である。体部最大径はA1類と同様に体部上半に位置し、底部にかけては直線的ないしはゆるやかに内彎する器型である。個体復元が可能なのは少ないが、口径182～231mm、平均207mmであり、器高に対する口径の比が求められる個体は出十しなかった。

成形技法は輪積み技法の後、ロクロ使用のもの、不使用のものがあり、ロクロ使用のものは、A1類と同様であり、不使用のものは、外面はケズリによる調整、内面はナデ及びケズリによる調整が施される。

#### A2 b類 (第104図-2・5・8)

A2 a類と同様の口縁部端面形を呈するが、頸部に明瞭な屈曲点を持たず、体部上半から頸部にかけてゆるやかに内彎し、口頸部がゆるやかに外反する器形である。体部最大径は体部上半から中央と各個体によりばらつきがみられる。最大径は口縁部ないし体部である。個体復元が可能なのは少ないが、口径183～217mm、平均201mmであり、器高に対する口径の比が判明したのは1個体であり、1.27である。

成形技法は輪積み技法の後、ロクロは使用されておらず、外面はケズリによる調整、内面はナデによる調整が施される。

### B類 小型壺(第104図-9、第105・106図)

#### B1類 (第104図-1、第105図-1～12)

A1類と同様の口縁部端面形、器形を呈する。個体復元可能なものでは、口径120～156mm、平均141mm、器高98～142mm、平均128mm、器高に対する最大径の比は、0.73～0.97、平均0.91である。

成形技法は輪積み技法の後に、ロクロを使用し、内外面ともにロクロナデのみのものが大半を占めるが、指ナデ調整を施すものも若干見られる。底面は回転糸切り痕を残すもの、ナデ、ケズリ調整を施すものがある。

#### B2 a類 (第105図-13～15、106図-1～5、7、10～13、15)

A2 a類と同様の口縁部端面形を呈し、頸部に明瞭なくびれを有する。体部最大径は体部中央付

近にあり、球形形である。最大径は、口縁部もしくは体部中央付近に位置する。個体復元可能なものでは、口径111~171mm、平均133mm、器高111~165mm、平均130mm、器高に対する最大径の比は、0.48~0.66、平均0.54である。

成形技法は輪積み技法の後に、ロクロを用いず、外面はケズリ及びナデにより、内面はナデにより調整が施される。

#### B2 b類 (第106図-6・8)

B2 a類と同様の口縁部端面形を呈するが、頸部に明瞭な屈曲点をもたず、体部上半から頸部にかけてゆるやかに内彎し、頸部から口縁部にかけてゆるやかに外反する。体部は最大径を上半に有し、やや内彎しながら底部にかけて直線的にすばまる器形である。最大径は口縁部に位置する。個体復元可能なものは少ないが、口径124~174mm、平均155mm、器高113~152mm、平均133mm、器高に対する最大径の比は0.48~0.66、平均0.54である。

成形技法は輪積み法の後に、ロクロを用いず、外面はケズリ及びナデにより、内面はナデにより調整が施される。

#### C類 環 (第107図、第108図-1~16)

当遺跡で出土している環は、口縁部形態の違いにより分類した。まず全体では口径110~155mm、平均135mm、器高40~64mm、器高に対する口径の比は0.33~0.49、平均0.42である。

##### C1類：口縁部が直上するもの (第107図-1・2・4・6~8・10~21・24、第108図-1・5・7・12~16)

##### C2類：口縁部が内彎するもの (第107図-3)

##### C3類：口縁部が外反、外傾するもの (第107図-5・9・22・23、第108図-2・3・4・6・8・9~11)

いずれの個体もロクロを使用しており、口縁部形態の差はロクロ成形時に生じるものである。当遺跡においてC1、C3類が多くみられ、C2類は僅か1点のみである。ロクロ成形後は無調整のものが多いが、体部下半付近にナデ、ケズリ調整を施すものも若干みられる。底面は回転糸切り痕を留めているものが多いが、第107図-11、15、23は静止糸切り痕である。回転糸切り痕を留めているものでも、僅かにケズリ調整がほどこされるものもある(第107図-2)。完全にケズリ調整により回転糸切り痕を消しているものも見られる(第107図-8・14)。また第107図-18~20は内面黒色処理が施され、内面には丁寧なミガキ調整が施されている。第107図-5は墨書土器であり、「大川」という文字が記されている(国立歴史民俗博物館教授・平川南氏のご教示による)。

#### D類 皿 (第108図-17~20)

##### D1類 (第108図-17~19)

底部から口縁部にかけて直線的ないし内彎しながら立ち上がる器形である。個体復元可能なものでは、口径15~15.6cm、平均15.4cmであり、器高に対する口径の比は、0.23~0.26、平均0.25である。

成形技法は輪積み技法の後、ロクロナデのみの調整が施されている。この器形にはロクロ痕を強く残すもの(第108図-17)とそうでないもの(第108図の18・19)が存在する。底面はいずれも回転糸切り痕を留めている。

##### D2類 (第108図-20)

底部から体部上半にかけてゆるやかに外傾しながら内彎し、体部上半と口縁部に明確な屈曲点を

有する皿である。10Hより1点のみ出土している。口径14.6cm、器高に対する口径の比は0.23ある。

成形技法は輪積み技法の後、ロクロナデの後、内外面ともに僅かに指ナデにより調整がほどこされている。底面は回転糸切り後無調整である。

#### i 器種類型(須恵器)

##### SA類：甕(第112図-4~8)

須恵器の甕は法量の違いにより大甕、中甕、小甕に分類した。各類型とも成形する際に叩き調整が施され、当て具痕として矢羽状の痕跡を留めているものがみられる。叩き目は平行叩き目が一般的であるが、肩部及び底部では格子叩き目がみられるものがある。体部破片のみの出土が多いため、完全に復元できたものはないので、正確な法量は不明である。

##### SA1類：大甕(第112図-4)

本遺跡では先述したように体部破片のみの出土で正確な法量は不明であるが、2H出土の甕の口縁部は口径33.8cmを計り、端面形は1類を呈し、口頸部にロクロナデが施されている。

##### SA2類：中甕(第112図-8)

11Hより1点のみ出土している。底部が欠損しているため正確な形態は不明であるが、口径22.2cm、最大径を体部中央に有し39.8cmを測る。頸部はロクロナデ、肩部には格子日のタタキ、体部上半から下半は平行タタキ調整が施され、内面には矢羽状の当て具痕がみられる。

##### SA3類：小甕(第112図-5~7)

SD02・04、遺構外から出土している。いずれも口縁部~肩部にかけての破片資料であり、正確な法量は不明であるが、端面形は4ないし6類型を示し、口径は14~18.2cmを測る。いずれの頸部にもロクロナデ調整後にヘラ記号が施されている。

##### SB類：鉢(第110図-14~20、第111図-1・2、第112図-10)

須恵器の鉢は口縁部の形態の違いにより、2類型に分類される。

##### SB1類(第110図-14・16~20、第111図-1・2、第112図-10)

口縁部端面形が3類を呈し、頸部は緩やかに内彎する。最大径は体部上半~中央部に位置する器形である。出土数は少ないが、口径10.2~20.4cm、平均15.3cm、底径6.1~9cm、平均7.19cm、器高に対する口径の比は0.58~0.89、平均0.71を測る。

##### SB2類(第110図-15)

口縁部端面形が2類を示し、頸部に屈曲点を有し、頸部から口縁部にかけて外反する。最大径は体部中央に位置する器形である。SD04から1点のみの出土であり、口径10.8cm、底径6.8cm、最大径1.6cm、器高に対する口径の比は0.75を測る。

##### SC類：坏(第108図-21~24、第109図、第110図-1~12)

須恵器坏は、土師器と同様に口縁部形態の違いにより分類した。まず全体では口径11~14.6cm、平均13.2cm、器高4.1~6.7cm、平均5.2cm、器高に対する口径の比は0.31~0.50、平均0.40である。

##### SC1類：口縁部が直上するもの(第108図-21・22・24、第109図-2・3・7・9~12・14・15・20~24、第110図-6~12)



SC2類：口縁部が内彎するもの（第110図-5）

SC3類：口縁部が外反、外傾するもの（第108図-23、第109図-1・4～6・8・13・16～19、第110図-1～4）

いずれの個体もロクロ成形であり、土師器の坏と器形、製作技法に変化は認められない。須恵器の坏に関しても土師器同様SC1、3類が多くみられ、SC2類は僅か1点である。ロクロ成形後は無調整の個体が多いが、体部下半付近にナデ、ケズリ調整を施すものも若干みられる。底面はすべて回転糸切り痕を留めているが、回転糸切り痕を留めているものでも、ケズリ調整が施されるもの（第109図-1・2・4・24、第110図-4）、ナデ調整がほどこされるもの（第108図-22）も若干みられる。焼成は還元焼成のものが全体の80.9%を占め、酸化焼成のものは僅か19.1%であり、いずれも焼成は良好で、硬質である。

SE類 壺（第111図-3～13、第112図-9）

壺は頸部径に対する最大径の比率で細口壺(0.4未満)、広口壺(0.4以上)に分類した。

SE1類：細口壺（第111図-4～10・14）

いわゆる長頸壺であり、頸部と体部の付け根に隆帯を巡らすものが一般的であるが、第111図-6は隆帯の下端部のみがみられ、上端は平滑である。口縁部の形態は持子沢系の口縁部といわれている端面形4b類を呈し、肩から体部上半にかけて直線的ないしゆるやかに内彎し、体部上半から屈曲の度合いが高くなり、最大径を体部上半から中央に有する。体部上半から底部にかけて再びゆるやかに内彎している。成形技法は、口頸部、胴部、底部を個別につくり、接合している。底面は細い工具によりケズリ調整を行い、高台状に作り出しているいわゆる「菊花文」を呈するものとケズリ調整のものとの2種類である。菊花文全体が復元できた個体は12Hより出土したもので、能代市十二林遺跡で出土している菊花文が「寧な造りであるのに対し、当遺跡で出土しているものは簡略化が進んでいる。復元可能な個体は少ないが、口径9.4～10.3cm、平均9.9cm、最大径18.1～19.6cm、平均18.7cmを測る。

SE2類：広口壺（第111図-11～13、第112図-9）

当遺跡で出土しているものは広口短頸壺であり、完全な形に復元できたものはSD04から出土した1点にすぎない。口縁部から頸部にかけての器形は中壺と酷似している。中壺との相違点は、叩き調整の有無、器形全体にわたるロクロナデの有無による。肩部から体部下半にかけてゆるやかな球胴形を呈し体部中央付近に最大径を有する。口径14.2cm、頸部最小径11.4cm、最大径21.9cm、器高25.8cm、器高に対する最大径の比は1.18である。

成形技法は輪積み技法の後に、第112図-9はタタキ調整が施されているが、それを除くとロクロナデ調整を施し、体部下半から底部にかけてケズリ調整が施される。底面はケズリ底である。

G類 ミニチュア土器（第113図-3～17）

ミニチュア土器は全部で15個体出土しており、須恵器が1点出土している。ロクロ使用の有無及び形態の違いにより以下の2類型に分類された。

G1類：ロクロを使用していないもの。器形により以下の2類に細分される。

G1a類（第113図-3・4・7・10）

口縁部が外反する器形である。いずれも内外面はナデ調整が施されているものの、器面は凹凸が激しく、粗雑である。

G1 b類 (第113図-5・6・9・11)

口縁部が直上ないしやや内彎する器形である。G1類同様内外面ともナデ調整が施されているが、つくりは粗雑である。

G2類：ロクロを使用しているもの。器形により以下の2類型に細分される。

G2 a類 (第113図-12)

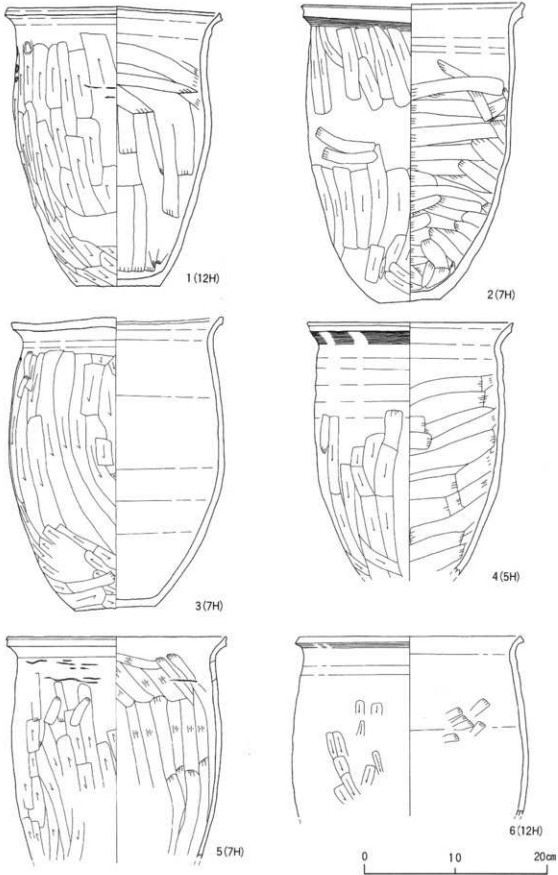
口縁部が外反し、頸部に明瞭な屈曲点を有するもの。成形技法はロクロナデの後、指ナデが施されている。G1類と異なり、つくりは精巧である。

G2 b類 (第113図-8)

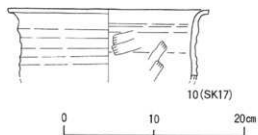
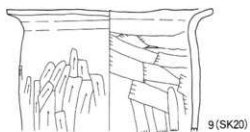
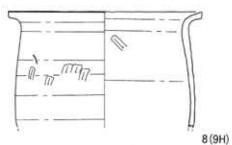
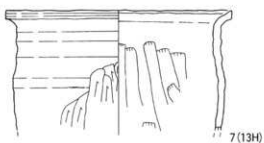
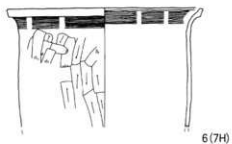
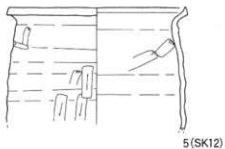
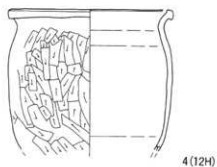
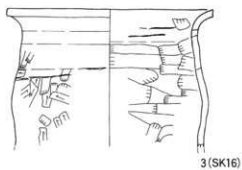
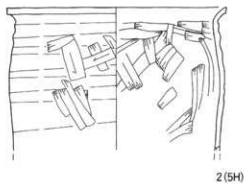
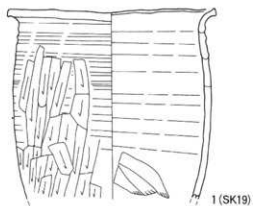
口縁部が直上するもの。成形技法はロクロナデの後、ケズリ調整が施される。G2 a類同様つくりは精巧である。

G2 c類 (第113図-15)

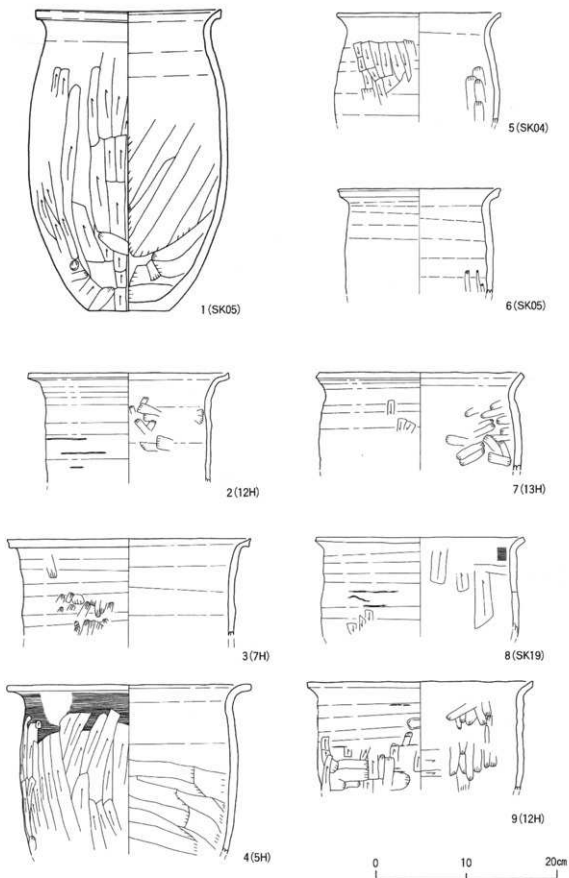
皿形を呈するもの。2日からの出土であり、成形技法はロクロナデの後、体部下半に粘土を貼付け、厚さを増して、焼成した後、ミガキ調整を施している。焼成も良好で、硬質である。



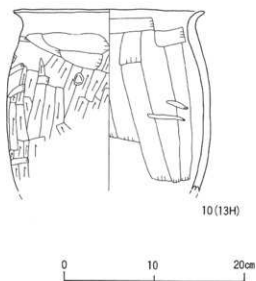
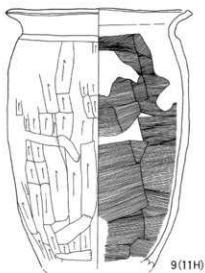
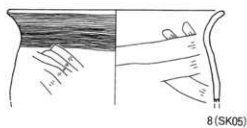
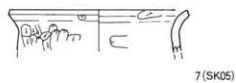
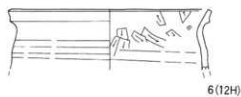
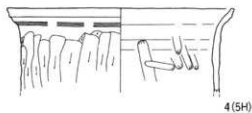
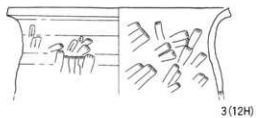
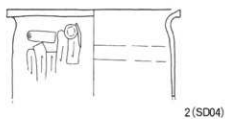
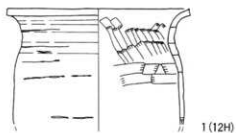
第100図 出土土器 (1) 土師器・長胴甕



第101図 出土土器 (2) 土師器・長胴甕

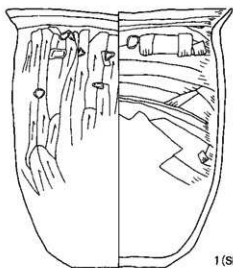


第102図 出土土器 (3) 土師器・長胴壺

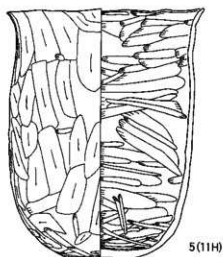


0 10 20cm

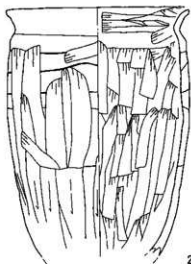
第103図 出土土器 (4) 土師器・長胴甕



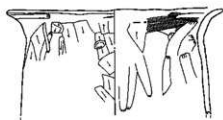
1 (SK17)



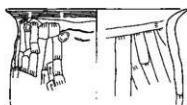
5 (11H)



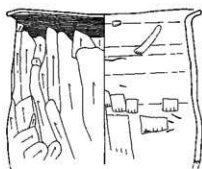
2 (遺構外)



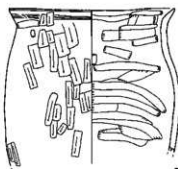
6 (SD06)



7 (SD07)



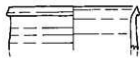
3 (SK12)



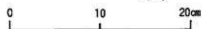
8 (SK20)



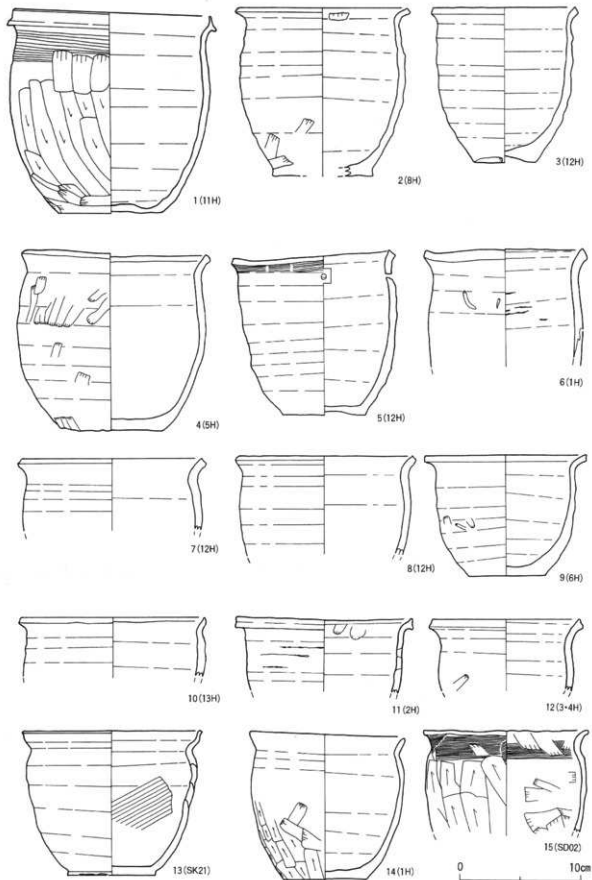
4 (14H)



9 (7H)

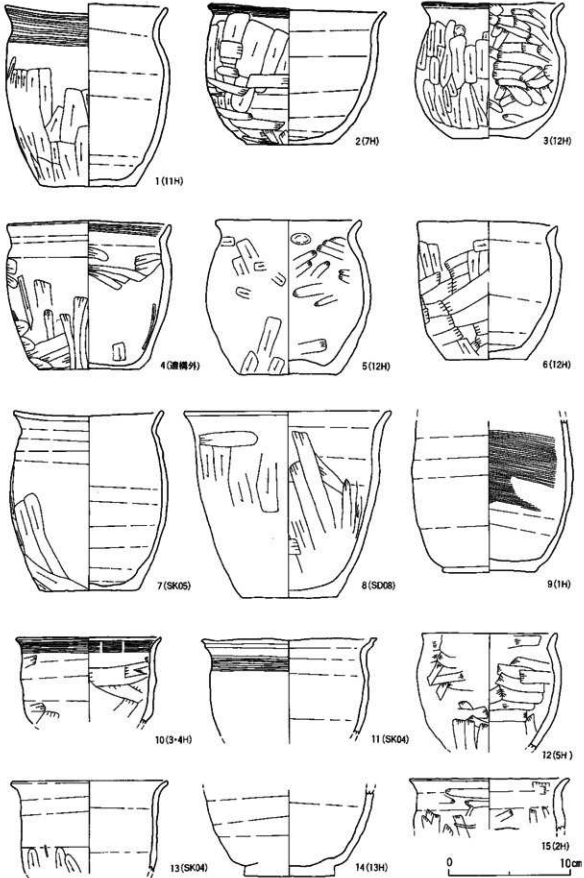


第104図 出土土器 (5) 土師器・長胴甕、小形甕

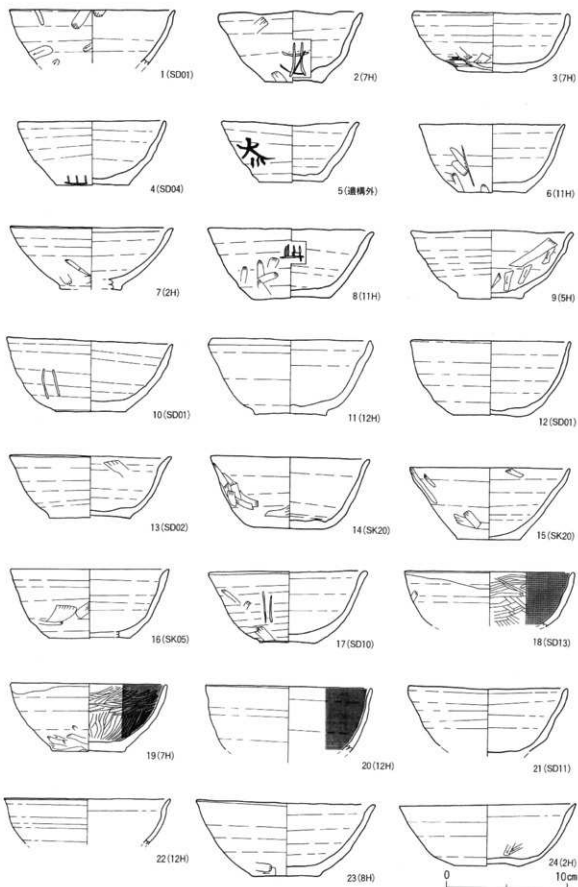


第105図 出土土器 (6) 土師器・小形壺

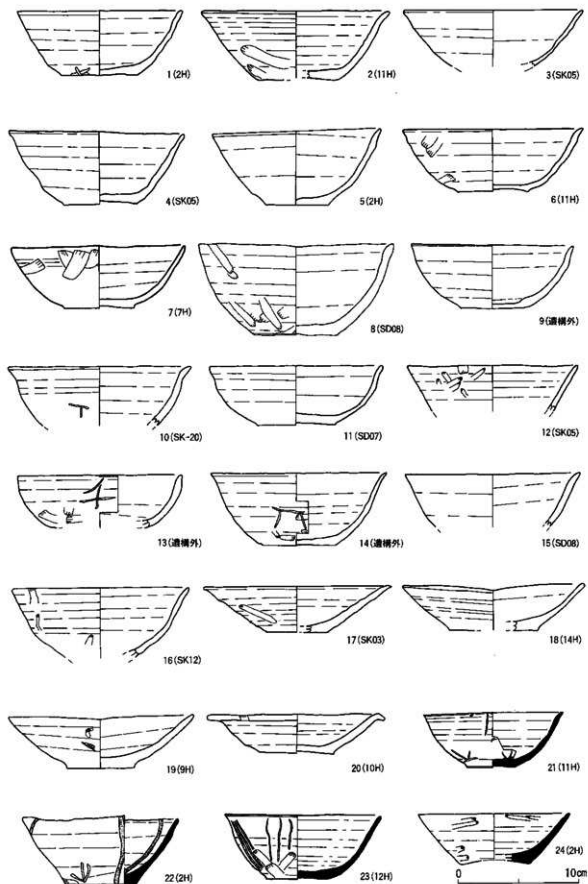




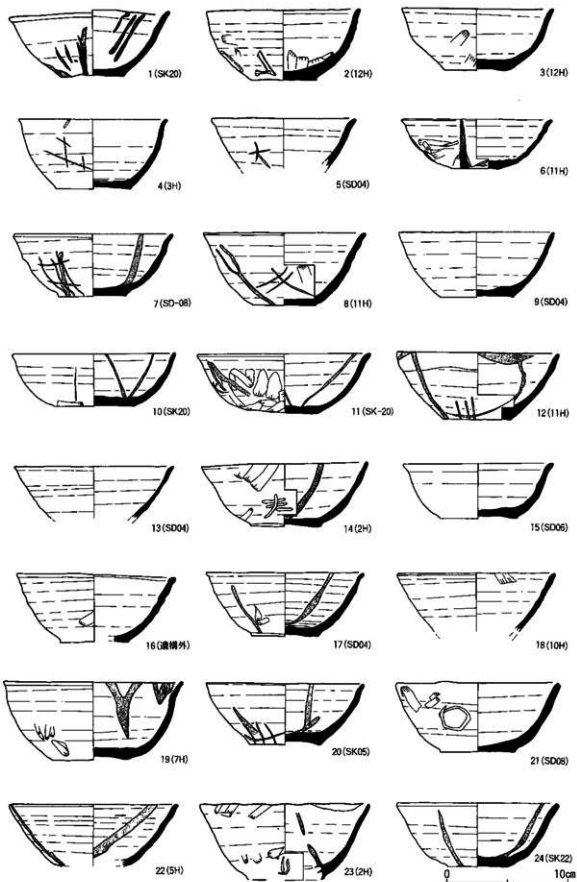
第106図 出土土器 (7) 土師器・小形壺



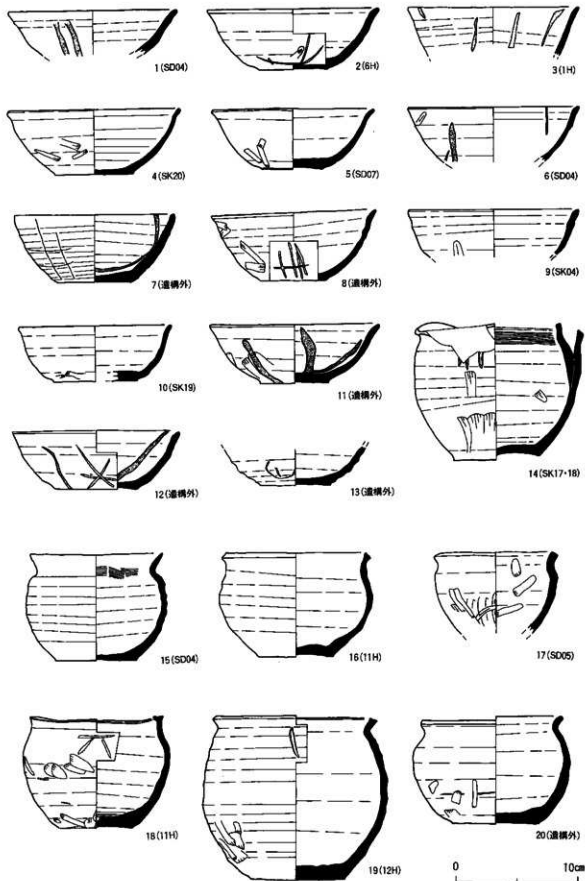
第107図 出土土器(8) 土師器・坏



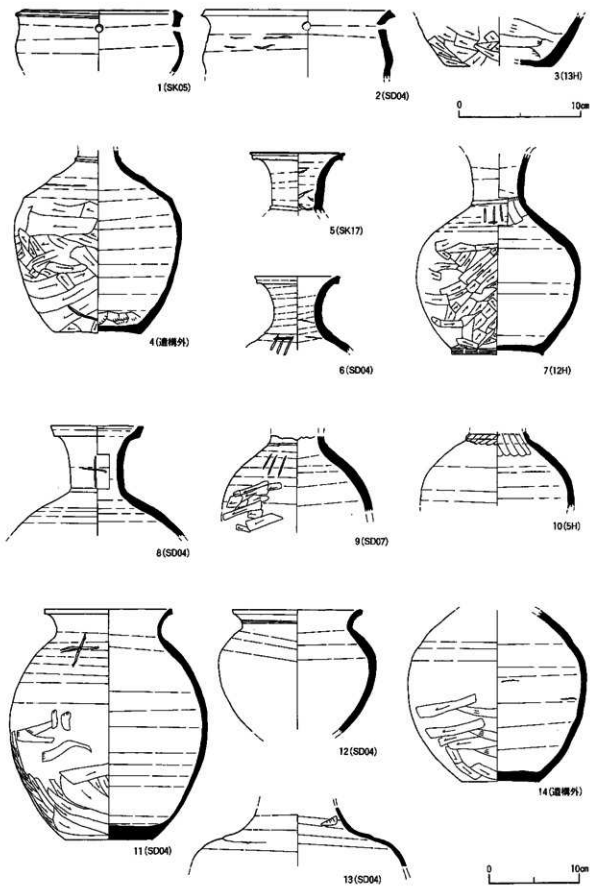
第108図 出土土器 (9) 1~16: 土師器环、17~20: 土師器皿、21~24: 須惠器环



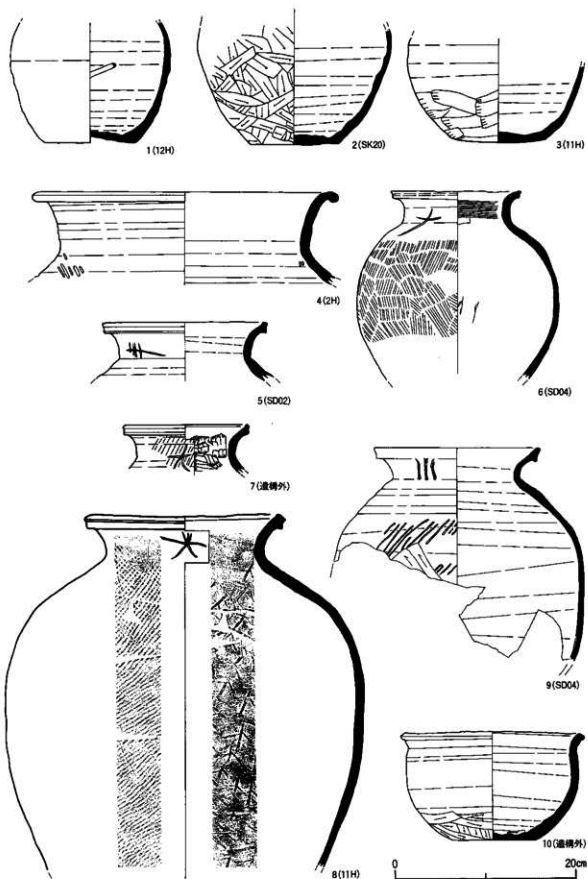
第109图 出土土器 (10) 須惠器・坏



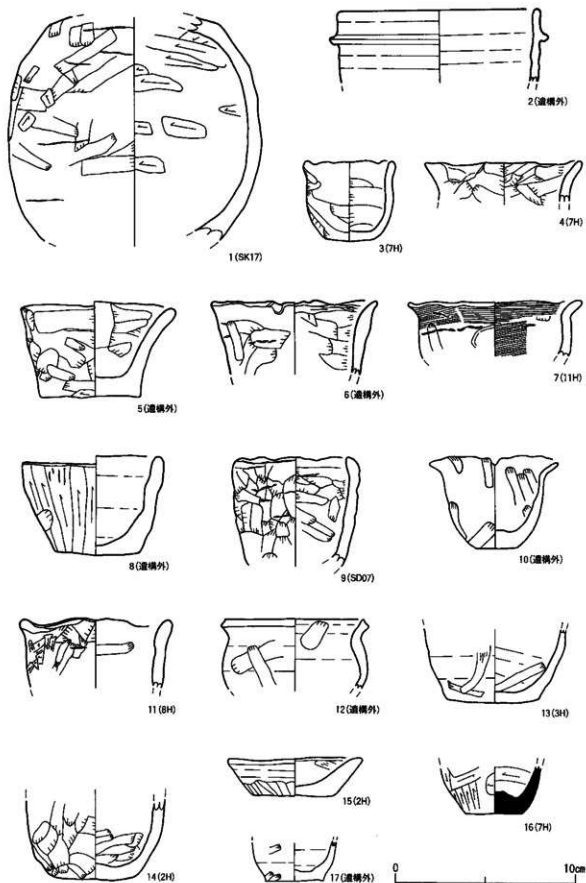
第110図 出土土器 (1) 須恵器・坏、鉢



第111図 出土土器 (12) 須恵器・鉢・壺

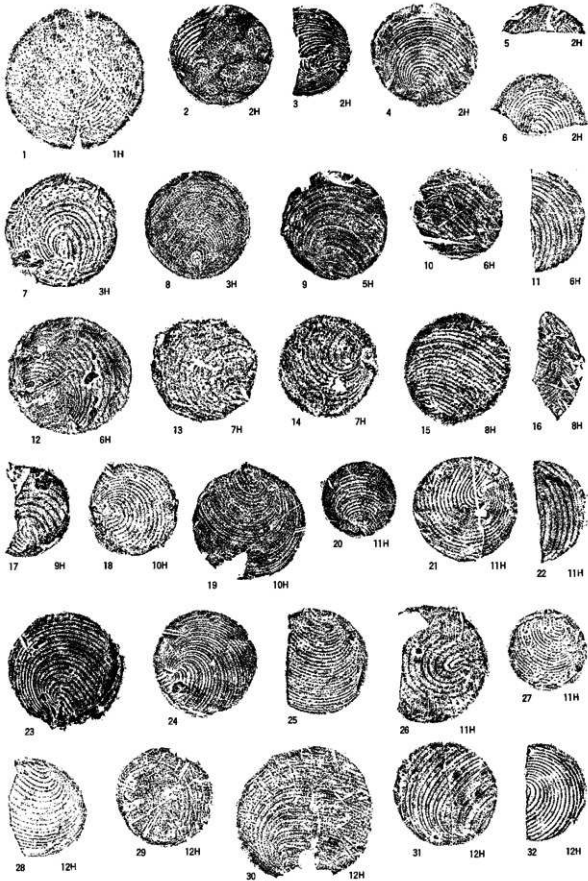


第112図 出土土器 ⑬ 須恵器・壺、甕鉢 (8のみ S=1/6)

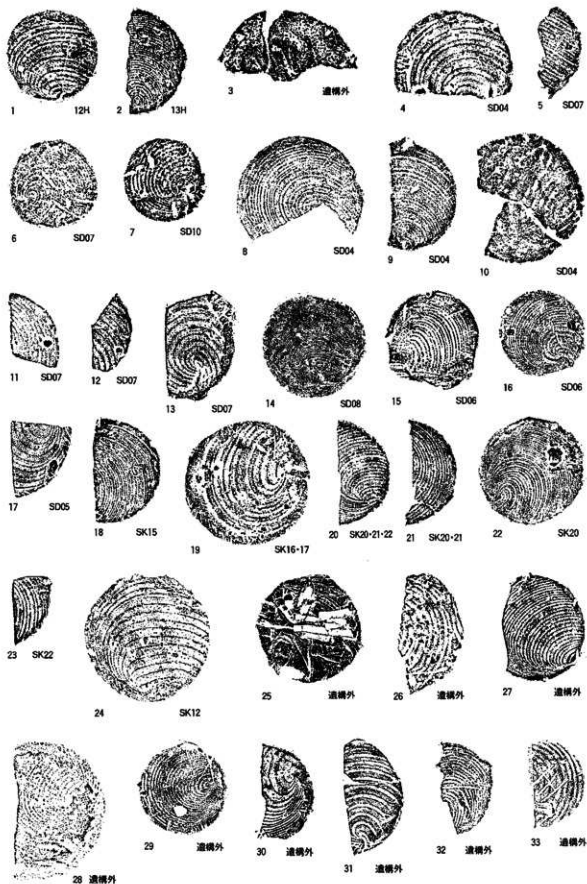


第113図 出土土器 (10 土師器・壺、羽釜、ミニチュア)

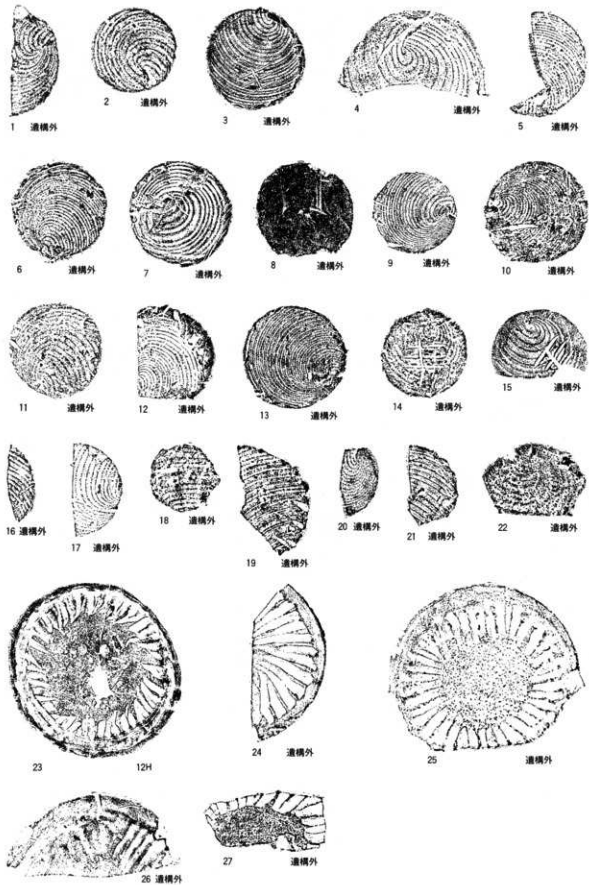




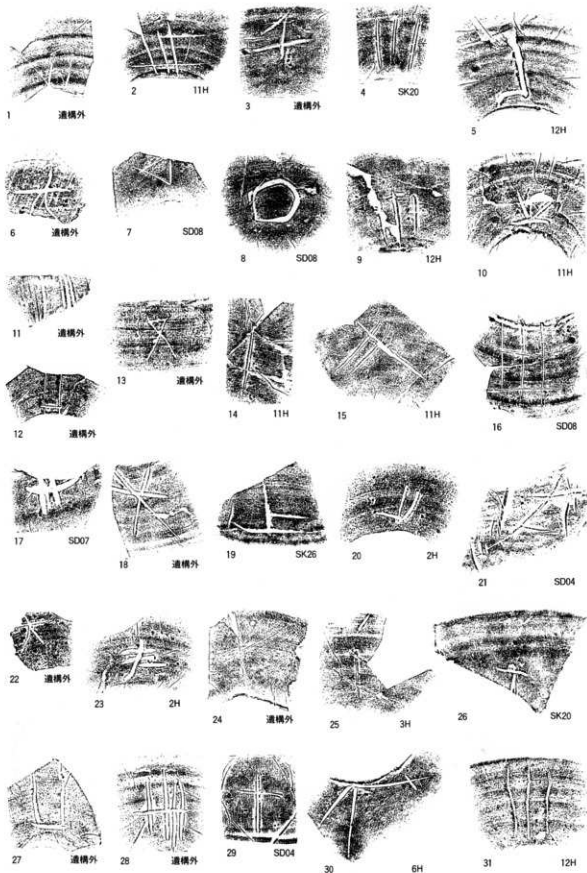
第114図 隠川(2)外遺跡における底部調整の各種(1) (S=1/2)



第115図 隠川(2)外遺跡における底部調整の各種 (2) (S=1/2)



第116図 隠川(2)外遺跡における底部調整の各種 (3) (S=1/2)



第117図 隠川(2)外遺跡における窠記号の各種 (S=1/2)

## 2 出土土製品

### 1 土玉 (第118図-1~29)

土玉は25点出土し、内遺構内の出土は17点であり、11Hからの出土が12点と多い。30の管玉を除き、器形は球形を呈し、穿孔部を平坦ないし凹状にしている。16を除くすべてが焼成前の穿孔である。色調は酸化して褐色を呈するものと黒色を呈するものが過半を占めている。穿孔方法も粗雑さがみられ、5は端に穿孔して穴が破損した状態であり、17、24は穿孔失敗の箇所が修復せずに留められたままである。焼成状況は暗青灰色をしたものを除くと、いずれのものも脆弱で、特に黒色のものは極めて脆弱である。

### 2 穿孔のない球状を呈するもの (第118図-31~33)

11Hから2点と遺構外から1点出土した。いずれも酸化焼成で褐色を呈し、焼成は良好である。

### 3 土鈴 (第119図-1~6)

3を除き遺構外からの出土である。色調はにぶい黄橙色から暗褐色を呈する。1は全体のおよそ3分の1程度が確認された。突起部分に穿孔が施されている。粗雑なつくりで、粘土の接合部分が残存しており、調整が殆ど施されていない。2は突起部分と本体とを接合するための溝状の痕跡をもつ。その他の遺物は土鈴の紐帯部分のみの出土であり、3は紐帯部先端が指により、外側へのつまみが見られる。3・4・6の紐帯部への調整は丁寧なナデが施されている。5は調整が殆ど施されず、成形時の指圧痕を留めている。

### 4 棒状土製品 (第119図-7~15、第120図5・6)

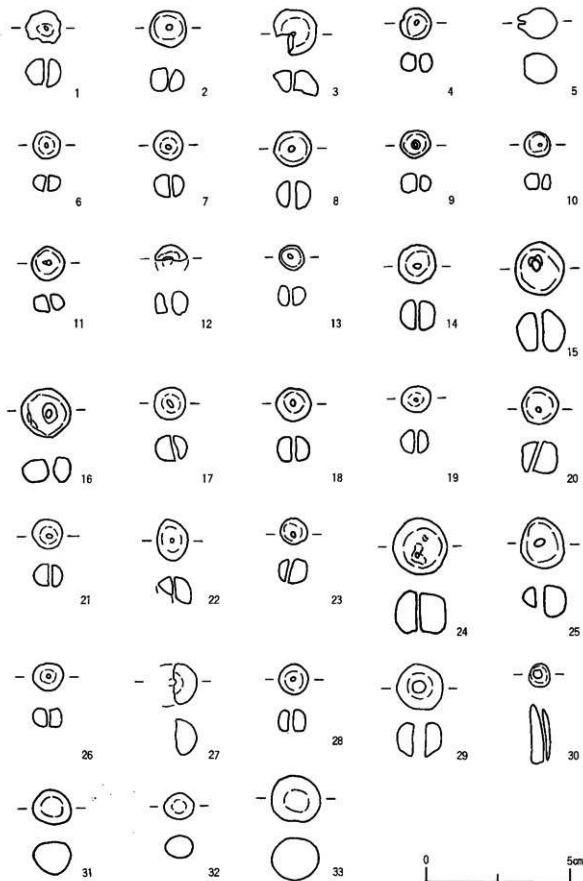
第119図-9を除き遺構外からの出土である。色調はにぶい黄橙色~褐色を呈し、第119図-9を除いて全体に調整が丁寧であり、ナデ、ミガキ、指による調整が施されている。全ての遺物が破損しており、全体の形態は不明であるが、先端部分は指等により、丸く調整が施され、破損部分にいくにしたがって直線的もしくははやや厚みを増す形態である。

### 5 紐状土製品 (第120図-1・2)

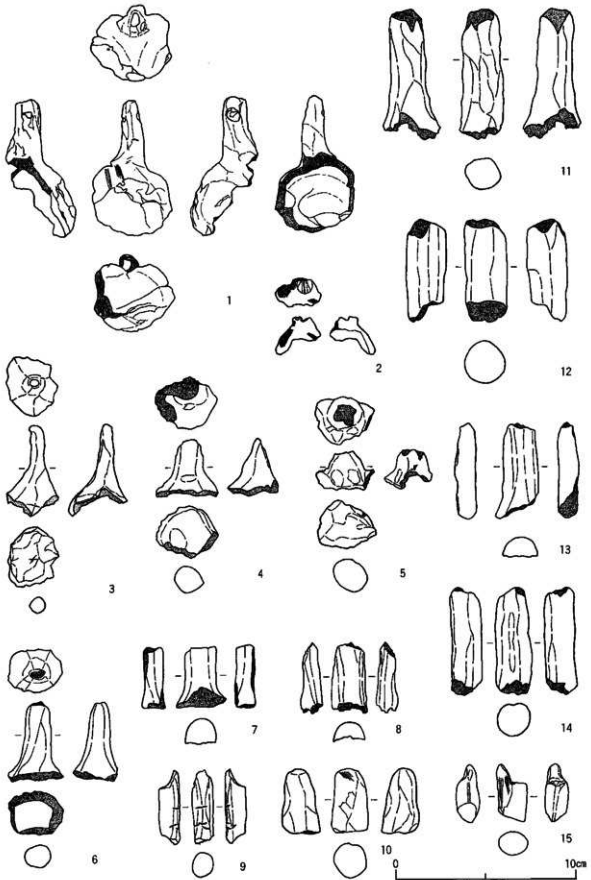
11Hと遺構外から各1点ずつ出土している。いずれも破損品であるが、円形を呈し、耳飾り?の可能性も考えられる。色調は1が明褐色、2がにぶい黄橙色を呈する。

### 6 盤状土製品 (第120図-3)

遺構外からの出土である。両端が破損しているが、少なくとも2つの穿孔がみられ、装飾品の可能性が考えられる。



第118圖 出土土製品 (1)

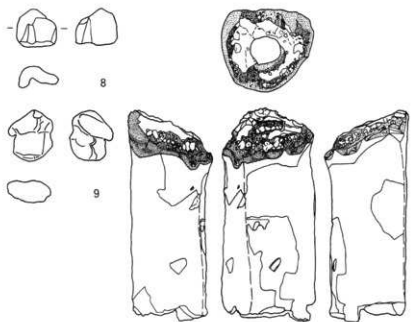
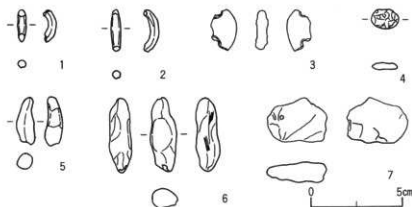


第119圖 出土土製品 (2)

7 焼成粘土塊

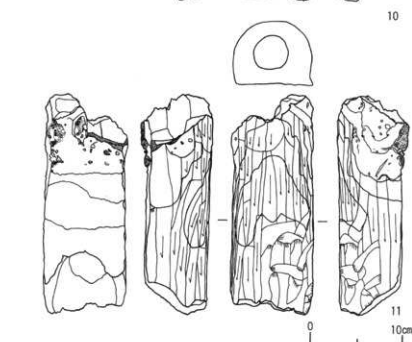
(第120図-4・7~9)

11号住居跡から1点出土している他は、遺構外からの出土である。色調はにぶい黄橙色～明黄褐色である。8は、中央付近に半円形の窪みが穿たれているが、用途は不明である。7・9はいずれも隠川(4)・02遺跡で出土したものと同様の焼成粘土塊であり、7は平坦面を有するが、調整は全く施されていない。8は一部平坦面を有するが、全体に凹凸が激しく、7同様調整は施されていない。



8 羽口 (第120図-10・11)

いずれも遺構外からの出土であるが、グリッドが同じであり、遺物間の距離も短い。形態は平坦面を有する蒲鉾形を呈し、大きさも230mm前後と近似している。色調はいずれもにぶい黄橙色を呈する。調整はいずれもケズリ調整が施されているが、10はスサが混入されており、器面に凹凸が目立つ。いずれも製鉄の際の送風管として使用されたものであり、送風口にガラス質溶融及び鉄滓の付着がみられる。



第120図 出土土製品 (3)



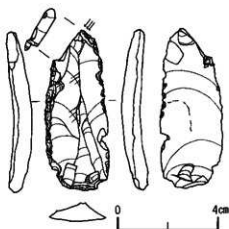
### 第3節 旧石器時代の出土遺物 (第121図)

CX-04グリッドの攪乱層より1点出土。石質は頁岩である。石刃技法による縦長剥片から作られた彫器(彫刻刀形石器)であり、ノッチは2~3回の打撃によって斜めに切り落とされ作成された左刃斜刃型である。旧石器時代の遺物は、鞠ノ沢遺跡での石器の出土の記録があるものの、詳細はわかっておらず、遺構内外においての五所川原市内の遺跡からの出土はきわめて稀であると言える。

この1点だけで判断するのは難しいかもしれないが、いわゆる荒屋型彫刻刀の一般的定義として、

- 1、先端部左肩にファシットがなされる。
- 2、先端部は急斜度調整によって尖頭状に仕上げられる。そしてその切っ先は器軸のほぼ中央にくる。
- 3、石器の周縁には急斜度調整がなされる。

の二項目が挙げられる。これをこの石器に当てはめるとほぼすべて該当することから、この1点のみからの判断では荒屋型彫刻刀と考えられる。(山口 航生)



第121図 出土旧石器

### 第4節 縄文時代の出土遺物

縄文時代の遺構は今回の調査区内では検出されず、遺物のみの出土であった。さらに各遺物の出土状況を見ると、平安時代の出土層位よりも上層あるいは、同一層での検出であり、本来遺物の所属する層序での出土ではなく、流れ込みもしくは攪乱等による、流入であると考えられる。そこで、ここでは出土遺物の形式的な記載に留めることにする。

#### 1 縄文土器 (第122図)

縄文土器は遺構外からの出土であり、その出土層位も本来の所属層位であるとは考えにくい。そこで形式、文様等に着眼して、各遺物の時期を想定するに留めることにした。

##### 縄文時代早期(第122図-1)

尖底部が出土している。胎土は焼成不良のため非常に脆弱である。早期後半から前期初頭にみられる繊維の混入はみられなかった。

##### 縄文時代前期(第122図-2・3)

2は円筒下層b式期に該当する器形であり、口縁部に横位の押圧縄文がみられる。3は縄文前期?の深鉢の底部で縄代痕を留めている。胎土に石英粒、砂粒を多く含み、焼成は比較的良好である。

縄文時代後期(第122図-4・5・6・8)

いずれも十腰内I式期の土器である。4は鉢形土器であり、口縁部は無文で、頸部から体部にかけて1本ないしは2本1組の沈線による直線的な幾何学紋様が描かれている。外面は焼成による剥落が目立ち、内面にはススが付着している。胎土には海綿骨針、黒雲母が混入しており、小礫の混入が目立つ。

5・6は深鉢の体部破片で、5は充填縄文手法、6は磨消縄文手法により、曲線的な文様が施されている。5は文様の方向に沿ってLRの斜行縄文が施されている。6はLRの横走の斜行縄文が施された後文様を区画している。

8は、後期の台付鉢の台部である。無文で外面は丁寧なナデ調整が施されている。

縄文時代晩期(第122図-7・9・10・11)

7は後期最終末～晩期初頭に位置づけられる壺形土器である。グリッドAJ05・AK06の表土から出土している。やや外傾する長めの口頸部をもち、肩部が張る器形である。口頸部外面は丁寧なミガキ調整が施され、肩部にはLRの斜行縄文が施文されている。内面はナデ調整が施されている。胎土に砂粒、石英粒、海綿骨針を多く含み、焼成は良好である。

9は晩期前葉の深鉢形土器である。口縁部は小波状口縁であり、体部上半から口頸部に屈曲点を有する器形である。体部にLRの斜行縄文を施文した後、口頸部及び、体部上半に沈線を引き区画体を形成し、入り組み三叉文を充填した後、ミガキ調整を施している。内面も丁寧なミガキ調整が施され、非常に精巧なつくりである。胎土には海綿骨針、石英粒が含まれるが、砂粒はあまり含まれておらず、焼成は非常に良好である。

10は晩期前葉の鉢形土器である。山形の突起が連続する小波状の口縁を有し、単位は不明であるがそれよりも大きな突起を有し、外反する短い口頸部を有する。口唇部下及び体部文様帯には、沈線で区画された中に同一方向で爪形文が配される。その後体部下半を区画する沈線が引かれ、RL横走縄文が充填されている。胎土には砂粒が多く含まれ、胎土は非常に脆弱である。また内外面にはススの付着がみられ、煮沸用に使用されたと考えられる。

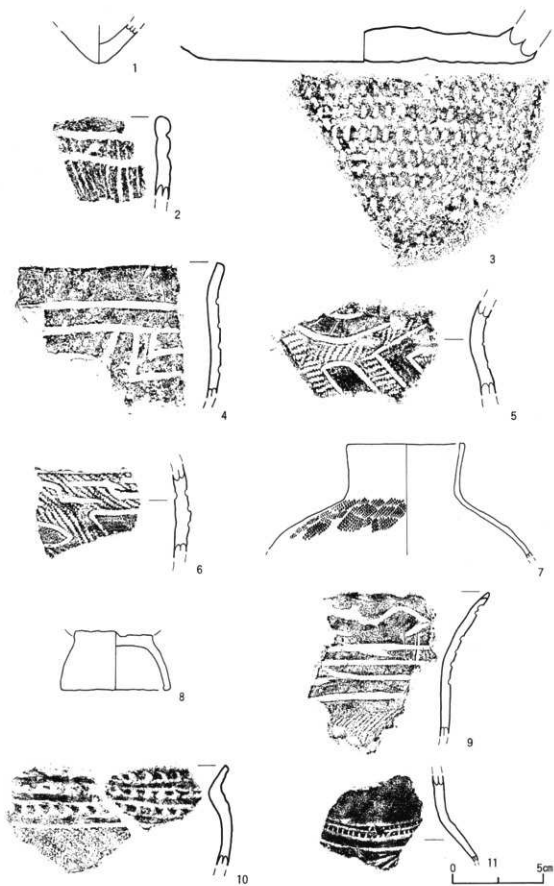
11が晩期2期の注口土器であり、頸部は無文であり、頸部と肩部境界に列点文を配し、肩部には入り組み三叉文が施される。

## 2 石器 (第123・124図)

石器はほぼすべて遺構外からの出土であるため、土器等との相伴関係を見ることができないため、他遺跡との大まかな比較によって時代を推定した。ここでは、いわゆる定型石器および、微細剥離や使用痕の残る石器について掲載した。

### 石鏃(第123図)

13点のうち2、9以外は基本層序I～IV層からの出土である。2はSD-01の埋土3層からの出土であり、9はSK-26の埋土3層からの出土であるが、ともに遺構と遺物の年代は合致しないものと思われる。何らかの作用によってこれらの遺構に流入したと思われる。また、9には器体裏面中央よりやや下に、楕円形のくぼみが見られる。おそらくこれは、火はねによる欠損と思われる。石質は1が



第122図 出土縄文土器 (1、7、8はS=1/3)

黒曜石、9がチャートであるほかはすべて頁岩である。基部の形状で分類した場合、平基が1、2、6。円基が3。凹基が5。尖基が7、8。有茎が9～13である。4は基部を欠損しているため不明である。

#### 石匙(124図-1・2)

1は縦型石匙で、間接打撃による素材剥片を用い加工したものである。つまみ部分及び刃部を比較すると、剥離面の切り合いから、つまみ部分を最後に作成したものと思われる。2は器体のうちつまみ部分から刃部にかけて3分の2あまりを欠損しているが、残存部の形態から石匙の欠損品と思われる。共に基本層序IV層、石質は頁岩である。

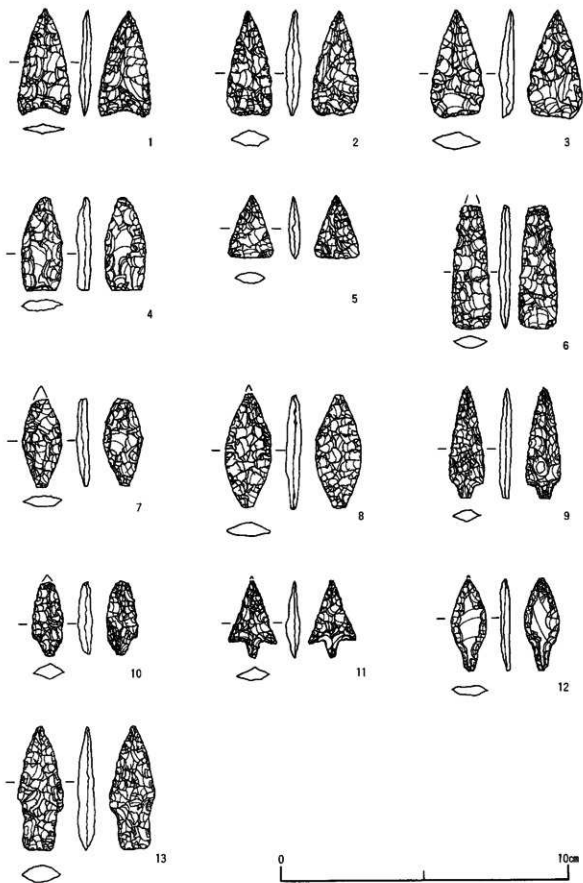
#### 加工痕のある剥片(124図-3～6、使用痕のある剥片を含む)

3は器体下半に2次加工が為され、刃部を形成している。4は器体下端に2次加工らしき剥離が見られるが、その形状から刃部として機能していたものではないと思われる。また、左側縁に微細剥離が見られることから、ここを刃部として使用していた剥片と考えられる。5、6もはっきりとした2次加工は見られないものの、5は左側縁から下端部まで、6は下端部付近に微細剥離が見られるため、ここを刃部として使用していたと考えられる。4を除きすべて基本層序IからIV層より出土、石質は頁岩である。4は9H埋土中からの出土であるが、9Hは平安時代の遺構であると考えられるため、何らかの作用でこの遺構に流入したものと思われる。

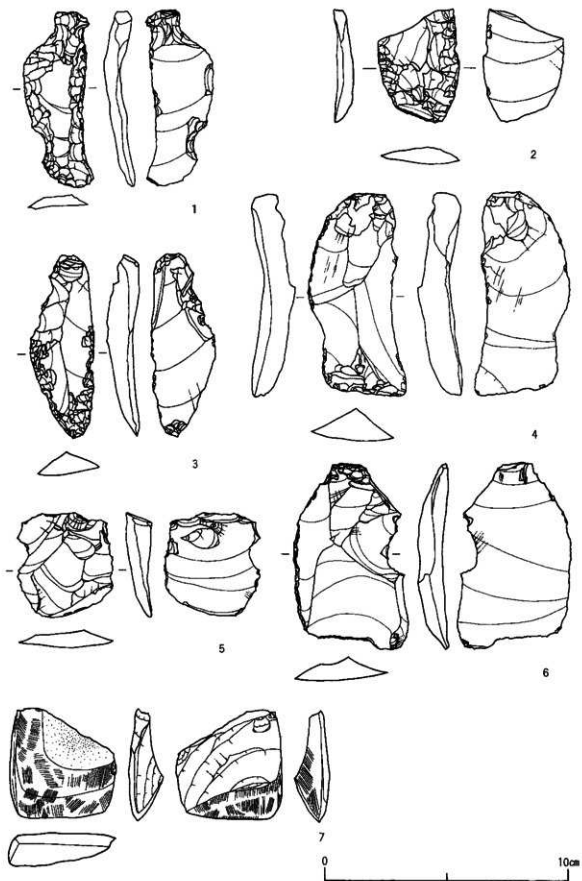
#### 磨製石斧(124図-7)

欠損品であり、刃部のみの出土である。刃部に垂直に線条痕が見られる。基本層序II層からの出土で、石質は緑色細粒凝灰岩である。

(山口 航生)



第123図 出土石器 (1)



第124圖 出土石器(2) 1·2: 石匙、3~6: 不定形石器、7: 磨製石斧







付表 3 出土器観表(3)

MUN. 番号	種別	形状・出土位置・出土量	時代	計測値				材質				用途	出土位置	その他の特徴	F番号	
				口径	底径	高さ	重量	口縁部	胴部	底面	底心					
4101-1	土師器	A1	FE19	底	21.2	16.1	12.1	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE1-1
4101-2	土師器	C1	RF19	底	15.5	15.5	2.6	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE5, 8
4101-3	土師器	E1	SP19	底	15.5	15.5	4	5.2	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE1-2
4101-4	土師器	A1	FE22	底	16.1	16.1	14.1	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE4
4101-5	土師器	SC1	RF22	底	13	13	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE9
4101-6	土師器	SC3	RF22	底	13	13	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE11
4101-7	土師器	OC	RF22	底	14.6	14.6	3.4	6.1	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE7
4101-8	土師器	A1	OC-104	底	26.5	26.5	2.6	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39
4101-9	土師器	A2b	OC-104	底	25.7	25.7	7.1	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	2.6	FE10, 12, 13, 14, 15, 16, 17, 18, 19, 20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32, 33, 34, 35, 36, 37, 38, 39
4101-10	土師器	B1b	OC-104	底	13.4	13.4	15	7.8	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE4
4101-11	土師器	B1b	OC-104	底	17.1	17.1	16.5	8.5	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE4
4101-12	土師器	C1	RF22	底	14.7	14.7	5.1	8.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-13	土師器	C1	RF22	底	15.6	15.6	5.6	6.3	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-14	土師器	C3	OC-104	底	15.5	15.5	6.5	5.7	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-15	土師器	SH1	RF22	底	11.4	11.4	8.5	6.2	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-16	土師器	SH1	RF22	底	11	11	12.2	8.9	6.1	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-17	土師器	C1	RF22	底	12	12	5.5	5.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-18	土師器	SH1	RF22	底	13.3	13.3	5.9	5.2	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-19	土師器	S42	OC-104	底	25.2	25.2	26.8	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-20	土師器	SH1	RF22	底	14.6	14.6	6.4	6.2	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-21	土師器	SH1	RF22	底	11.4	11.4	6.5	4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-22	土師器	SC1	OC-104	底	15.6	15.6	4	4.2	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-23	土師器	SH1	RF22	底	13.4	13.4	5.4	5.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-24	土師器	SH1	RF22	底	9.6	9.6	1.6	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-25	土師器	A1	FE21	底	24.8	24.8	1.6	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-26	土師器	CH2	RF22	底	22.2	22.2	1.6	1.6	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-27	土師器	A1	FE21	底	23.7	23.7	8.1	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-28	土師器	CH2	RF22	底	23.7	23.7	8.1	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10
4101-29	土師器	CH2	RF22	底	23.7	23.7	8.1	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	1.4	FE10





付表6 出土土器観察表(6)

調査区画	遺構	遺物	遺物種別	遺物位置	出土位置	出土層	行方遺物		外周遺物		内周遺物		土質	加工	用途	数量	出土位置	その他の特徴	備考	
							口縁部	底面	口縁部	底面	口縁部	底面								口縁部
104区画-9	土器部	54	土器部	54	506	甌土	NS	1	23.2	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.25, 26
110区画-17	遺構部	56	甌土	56	506	甌土	NS	3	10.2	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	3	12.6	甌土	甌土	PT.11
104区画-7	土器部	56	甌土	56	507	甌土	NS	3	20.0	20	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	3	12.6	甌土	甌土	PT.
104区画-11	土器部	57	甌土	57	507	甌土	NS	1	14.4	14.4	6.5	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.
110区画-5	遺構部	52	甌土	52	507	甌土	NS	2	12.4	12.4	5	12.6	12.6	12.6	12.6	2	12.6	甌土	甌土	PT.15
111区画-9	遺構部	53	甌土	53	507	甌土	NS	1	7.0	7	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.106, 108
104区画-8	土器部	56	甌土	56	507	甌土	NS	1	17.4	17.4	8	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.
104区画-9	土器部	56	甌土	56	508	甌土	NS	1	15.0	15	7.4	6.3	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13
104区画-10	土器部	57	甌土	57	508	甌土	NS	1	14.4	14.4	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.1, 2
104区画-7	遺構部	57	甌土	57	508	甌土	NS	1	12.0	12.0	5.2	5.5	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.2, 4, 6
109区画-21	遺構部	57	甌土	57	509	甌土	NS	3	13.6	13.6	5.6	6.2	12.6	12.6	12.6	3	12.6	甌土	甌土	PT.1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13
107区画-17	土器部	57	甌土	57	509	甌土	NS	1	12.2	12.2	5.8	4.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12
107区画-21	土器部	57	甌土	57	509	甌土	NS	1	13.2	13.2	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.1, 2
107区画-18	土器部	57	甌土	57	510	甌土	NS	1	13.8	13.8	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.
104区画-17	土器部	57	甌土	57	510	甌土	NS	1	15.6	15.6	8.8	8.1	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.
104区画-5	土器部	57	甌土	57	510	甌土	NS	3	18.1	18.2	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	3	12.6	甌土	甌土	PT.1, 2, 3
104区画-11	土器部	58	甌土	58	510	甌土	NS	6	14.4	14.4	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	6	12.6	甌土	甌土	PT.4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13
104区画-13	土器部	58	甌土	58	510	甌土	NS	1	15	13	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.6, 10
110区画-9	遺構部	51	甌土	51	510	甌土	NS	5	20.6	21	32.1	8.3	12.6	12.6	12.6	5	12.6	甌土	甌土	PT.1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14
104区画-6	土器部	51	甌土	51	510	甌土	NS	6	18	18	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	6	12.6	甌土	甌土	PT.2, 3, 5
104区画-7	土器部	51	甌土	51	510	甌土	NS	2	20	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	2	12.6	甌土	甌土	PT.2
104区画-9	土器部	51	甌土	51	510	甌土	NS	1	16.3	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.6, 15
104区画-7	土器部	51	甌土	51	510	甌土	NS	1	12.4	13	14.2	8.2	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.6, 13
104区画-10	土器部	51	甌土	51	510	甌土	NS	1	13.1	13.1	5.0	6.0	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.
104区画-2	土器部	51	甌土	51	510	甌土	NS	1	14.8	14.8	12.6	12.6	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.26, 32
104区画-4	土器部	51	甌土	51	510	甌土	NS	1	14.5	14.5	6	6.1	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.12, 29, 34, 35, 122
104区画-12	土器部	51	甌土	51	510	甌土	NS	1	14.5	14.5	5	5.4	12.6	12.6	12.6	1	12.6	甌土	甌土	PT.17

付表7 出土器類表(7)

器種別	番号	器名	アクリル 位置(1/4寸)	出土 位置(1/4寸)	形状	計測値				位置関係				出土 位置(1/4寸)	器名	出土 位置(1/4寸)	F番号	
						口径	高さ	底径	底厚	口径	高さ	底径	底厚					
10000-20	10000-20	土師器	SC1	D002	S005	1	13	13	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294,102
11100-1	11100-1	土師器	SK1	D003	S005	2	13.7	13.7	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294,102
10100-8	10100-8	土師器	AI	E105	S012	3	15.4	15.4	5	6	14	14	14	14	14	14	14	297,113
10000-13	10000-13	土師器	A5a	S013	S013	1	21.4	21.5	5	6	14	14	14	14	14	14	14	299
10000-13	10000-13	土師器	B3a	D300	S013	2	14.9	14.9	5.1	7.2	14	14	14	14	14	14	14	294,6,11
10000-14	10000-14	土師器	CI	E105	S012	1	14.5	14.5	5	6	14	14	14	14	14	14	14	299
10100-9	10100-9	土師器	AI	E715	S016	1	22.1	22.1	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294,11,1
10100-10	10100-10	土師器	AI	E016	S017	1	24.5	24.6	5	6	14	14	14	14	14	14	14	297
10000-14	10000-14	土師器	A5a	D216	S016	1	24.5	24.6	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294,6,10,11,15,16,18,19,25
11000-1	11000-1	土師器	E	D0-0710	S017	1	14	14	5	6	14	14	14	14	14	14	14	295,35,41,71
11100-8	11100-8	土師器	S01	S015	S017	1	13.8	13.8	10	7	14	14	14	14	14	14	14	293,105,17,19
10100-14	10100-14	土師器	SK1	D014	S018	1	23.1	23.1	5	6	14	14	14	14	14	14	14	297,0,147
10100-14	10100-14	土師器	SK1	D014	S018	2	23.1	23.1	5	6	14	14	14	14	14	14	14	297,0,147
10100-14	10100-14	土師器	AI	K013	S019	1	23	23	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294
10100-8	10100-8	土師器	AI	E013	S019	1	22.8	22.8	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294
11000-20	11000-20	土師器	SK1	D013	S019	1	22.6	22.6	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294
10100-9	10100-9	土師器	AI	E719	S020	1	22.6	22.6	5	6	14	14	14	14	14	14	14	297,11,102
10100-9	10100-9	土師器	AI	E719	S020	2	22.6	22.6	5	6	14	14	14	14	14	14	14	297,11,102
10100-8	10100-8	土師器	A5a	E719	S020	1	22.8	22.8	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294
10100-14	10100-14	土師器	CI	E719	S020	1	23.1	23.1	5.9	5.5	14	14	14	14	14	14	14	297,11,102,11,44
10100-14	10100-14	土師器	CI	E719	S020	2	23.2	23.2	5.8	5.2	14	14	14	14	14	14	14	297,11,102,11,44
10000-15	10000-15	土師器	CI	E719	S020	1	13	13	5	6	14	14	14	14	14	14	14	294
10000-15	10000-15	土師器	CI	E719	S020	2	13.1	13.1	5.5	5.2	14	14	14	14	14	14	14	294
10000-19	10000-19	土師器	SK1	E719	S020	1	12.4	12.4	4.2	6.4	14	14	14	14	14	14	14	293,1004
10000-19	10000-19	土師器	SK1	E719	S020	2	12.4	12.4	4.2	6.4	14	14	14	14	14	14	14	293,1004
10000-11	10000-11	土師器	SK1	E719	S020	1	14.3	14.3	4.8	5.8	14	14	14	14	14	14	14	296,43
10000-11	10000-11	土師器	SK1	E719	S020	2	14.4	14.4	5.3	6.4	14	14	14	14	14	14	14	296,43
11000-4	11000-4	土師器	SK1	E719	S020	1	14.4	14.4	5.3	6.4	14	14	14	14	14	14	14	296,43,11
11000-4	11000-4	土師器	SK1	E719	S020	2	14.4	14.4	5.3	6.4	14	14	14	14	14	14	14	296,43,11
10000-24	10000-24	土師器	SK1	E719	S022	1	13.3	13.3	5.2	4.9	14	14	14	14	14	14	14	299
10000-24	10000-24	土師器	SK1	E719	S022	2	13.3	13.3	5.2	4.9	14	14	14	14	14	14	14	299
10000-2	10000-2	土師器	A5a	E719	S024	1	20.2	20.2	5	6	14	14	14	14	14	14	14	298
10000-2	10000-2	土師器	A5a	E719	S024	2	20.2	20.2	5	6	14	14	14	14	14	14	14	298
10000-4	10000-4	土師器	SK1	E719	S024	1	15.5	15.5	12.2	8.3	14	14	14	14	14	14	14	298
10000-4	10000-4	土師器	SK1	E719	S024	2	15.5	15.5	12.2	8.3	14	14	14	14	14	14	14	298
10000-1	10000-1	土師器	CI	F023	S024	1	11.8	11.8	4.7	6.3	14	14	14	14	14	14	14	297
10000-1	10000-1	土師器	CI	F023	S024	2	11.8	11.8	4.7	6.3	14	14	14	14	14	14	14	297



付表9 出土土製品観察表

図版番号	遺物名	層序	出土位置	グッド	計測値			色調	備考
					長さ	幅	質量		
118図-1	丸玉	床底	10H	F223	13.20	不明	10.35	1.6	黄褐色
118図-2	丸玉	礎土3層	11H	DH04	13.35	12.7	9.55	1.8	黒褐色
118図-3	丸玉	礎土3層	11H	DH04	16.95	不明	不明	2.1	暗青灰色
118図-4	丸玉	礎土6層	11H	DG04	10.6	10.45	6.3	0.7	灰黄褐色
118図-5	丸玉	礎土6層	11H	DG04	14.6	11.25	10.9	1.6	明黄褐色
118図-6	丸玉	礎土6層	11H	DG04	10.5	10.35	6.6	0.9	褐色
118図-7	丸玉	礎土6層	11H	DG04	11.45	11.3	8.5	1.1	黒色
118図-8	丸玉	礎土6層	11H	DG04	13.6	13.1	10.95	2.0	黒色
118図-9	丸玉	礎土6層	11H	DH04	12.5	11.8	7.65	1.3	黒色
118図-10	丸玉	礎土6層	11H	DH04	9.65	9.45	5.75	0.5	黒色
118図-11	丸玉	礎土6層	11H	DH04	12.65	12.15	7.7	1.3	黒色
118図-12	丸玉	礎土6層	11H	DC04	11.85	不明	8.35	0.5	黒色
118図-13	丸玉	礎土6層	11H	DG04	9.55	8.85	6.2	0.6	にぶい黄褐色
118図-14	丸玉	床底	12H	CW21	14.9	14.5	11.3	2.2	黒色
118図-15	丸玉	礎土1層	SD02	DD03	18.0	18.1	14.95	4.9	明黄褐色
118図-16	丸玉	礎土2層	SD05	ER16	16.85	16.2	7.7	2.1	褐色
118図-17	丸玉	礎土2層	SD05	ER16	12.7	12.19	9.6	1.5	黒色
118図-18	丸玉	皿層	遺構外	D803	13.35	13.15	10.7	2.0	にぶい黄褐色
118図-19	丸玉	IV層	遺構外	DG05	11.2	10.15	8.4	0.9	にぶい黄褐色
118図-20	丸玉	IV層	遺構外	DG05	14.15	13.4	11	2.5	暗青灰色
118図-21	丸玉	皿層	遺構外	ER16	不明	10.85	8.5	1.0	にぶい黄褐色
118図-22	丸玉	皿層	遺構外	ER17	14.2	10.3	不明	1.4	にぶい黄褐色
118図-23	丸玉	IV層	遺構外	ES16	10.6	10.4	8.7	1.1	暗青灰色
118図-24	丸玉	I層	遺構外	ES18	19.15	18.6	16.15	6.4	にぶい黄褐色
118図-25	丸玉	II層	遺構外	EZ18	不明	不明	14.2	1.6	褐色
118図-26	丸玉	IV層	遺構外	D1104	11.05	10.6	7.75	1.0	黒色
118図-27	丸玉	II層	遺構外	EZ18	18.75	17.95	不明	3.0	にぶい黄褐色
118図-28	丸玉	皿層	遺構外	ET16	11.45	11.2	9.55	1.2	褐色
118図-29	丸玉	皿層	遺構外	ET16	18	16.05	13.9	4.1	暗青灰色
118図-30	穿玉	皿層	遺構外	ET16	9.2	8.8	2.2	2.1	褐色
118図-31	丸玉	礎土1層	11H	DH04	11.15	10.2	8.25	0.9	にぶい黄褐色
118図-32	丸玉	礎土6層	11H	DG04	15.25	13.65	12.65	2.4	褐色
118図-33	丸玉	皿層	遺構外	ET16	18.55	17	15.7	4.5	褐色
119図-1	土鈴	I層	遺構外	BO15	73.45	48.0	19.76	30.3	鮮明に穿孔。
119図-2	土鈴	II層	遺構外	PC20	22.2	26.85	3.2	2.3	にぶい黄褐色
119図-3	土鈴	礎土1層	SK26	GR23	50.5	33.7	3.5	8.8	にぶい黄褐色
119図-4	土鈴	I層	遺構外	EP14	30.75	34.2	4.05	10.3	黄褐色
119図-5	土鈴	I層	遺構外	EP14	19.8	33.4	5.55	9.5	にぶい黄褐色
119図-6	土鈴	I層	遺構外	EZ18	41.95	31.3	7.2	17.6	暗褐色
119図-7	埴状	II層	遺構外	PA18	34.25	27.9	18.7	10.6	灰黄褐色
119図-8	埴状	III層	遺構外	CR01	46.5	19.25	不明	6.9	褐色
119図-9	埴状	礎土2層	2H	FD19	40	14.3	11.2	5.9	黄褐色
119図-10	埴状	I層	遺構外	EP14	36.8	22.95	19.3	19.1	にぶい黄褐色
119図-11	埴状	カクレン	遺構外	CX04	72.45	31.75	21.85	45.3	にぶい黄褐色
119図-12	埴状	IV層	遺構外	D892	56	24.3	23.85	34.7	にぶい黄褐色
119図-13	埴状	IV層	遺構外	DH03	53.1	20.55	不明	12.0	褐色
119図-14	埴状	IV層	遺構外	D893	59.6	20.95	17.65	25.3	暗褐色
119図-15	埴状	II層	遺構外	EZ18	34.5	17.1	13.5	6.1	褐色
120図-1	総状	礎土3層	11H	DH04	20	9	4	0.5	明褐色
120図-2	総状	皿層	遺構外	DC03	30	9	4	0.7	にぶい黄褐色
120図-3	円盤状	IV層	遺構外	D882	22	1.4	6	1.5	黄褐色
120図-4	粘土塊	礎土6層	11H	DG04	11	1.5	4	0.7	にぶい黄褐色
120図-5	粘土塊	I層	遺構外	FP21	26	6	9	2.3	明黄褐色
120図-6	粘土塊	礎土2層	2号溝	DD02	40	15	11	8.8	にぶい黄褐色
120図-7	粘土塊	皿層	遺構外	EL14	2.6	3.2	11	9.1	褐色
120図-8	粘土塊	II層	遺構外	BH09	20	21	11	3.5	褐色
120図-9	粘土塊	II層	遺構外	FB21	27	25	12	7	明褐色
120図-10	羽口	II層	遺構外	FD21	223	103	91	1200	にぶい黄褐色
120図-11	羽口	II層	遺構外	FD21	235	96	79	1400	にぶい黄褐色

付表10 出土旧石器・石器観察表

図版No.	器種	石質	出土位置	層位	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	発刀部形態	備考
121図	彫器	頁岩	CX-04	複乱	64	25	7	12.9		旧石器
123図-1	石鏃	頁岩	CK	ⅡB層	31	18	4	1.7	SMP	即基
123図-2	石鏃	頁岩	4号溝	埋土3層	36	15.5	5	2.3	SMP	平基
123図-3	石鏃	頁岩	AL-06	I層	37	18.5	5	3.1	SMP	円基
123図-4	石鏃	頁岩	CC-05	I層	32	14	5	2.6	HMP	基部欠損
123図-5	石鏃	黒曜石	FA-20	Ⅱ層	21.5	16	4	0.9	SMP	平基
123図-6	石鏃	頁岩	BH-10	Ⅱ層	42.5	13	4	2.1	SMP	平基、先端部欠損
123図-7	石鏃	頁岩	ER-16	Ⅳ層	30	18.5	4	1.5	HMP	尖基、先端部欠損
123図-8	石鏃	頁岩	AO-07	I層	39	16	5	2.7	SMP	尖基、先端部欠損
123図-9	石鏃	チャート	SK-26	埋土3層	37.5	12	4	1.5	HMP	有茎、器体裏面中央よりやや下に火はねによる楕円形欠損
123図-10	石鏃	頁岩	CU-03	I層	25	11	5	0.8	HMP	有茎、先端部欠損
123図-11	石鏃	頁岩	FK-21	Ⅳ層直上	26	16.5	5	1	SMP	有茎
123図-12	石鏃	頁岩	DP-05	Ⅳ層	31.5	12.5	3.5	1.3	HMP	有茎
123図-13	石鏃	頁岩	AS-08	I層	42	17	6	3.4	HMP	有茎
124図-1	石匙	頁岩	FS-24	Ⅳ層	71.5	28	8.5	14.2	HMP	
124図-2	石匙	頁岩	CR-04	Ⅱ層	74	26	17	18.1		
124図-3	RF	頁岩	BU-07	Ⅳ層	46	33	7	10.1	HMP	石匙製製品か
124図-4	RF	頁岩	9H	埋土	82	40	13	36.2		
124図-6	RF	頁岩	FT-26	I層	75	47	10.5	29.4		
124図-5	剥片	頁岩	EF-16	I層	42.5	39	10	13.5		使用直のある剥片
124図-7	磨製石斧	茶緑輝岩	AK-04	Ⅱ層	45.5	44	19	31.7		

※刃部調整の「HMP」は、ハードハンマーによる、何らかの器具を用いて面を固定した押圧調整。

「SMP」は、ソフトハンマーで同様の調整をしたもの。

※「緑輝岩」は「緑色緑粒輝岩」の略。

※RFはRetouched Flake(二次加工のある剥片)の略

付表11 出土縄文土器観察表

図版No.	出土地点	グッド	層位	器種	部位	地文	炭化物	備考
図122-1	遺構外	CZ-03	I層	深鉢	底部	無文		尖底
図122-2	13Hカマド	EY-18	埋土1層	深鉢	口縁部	無赤		2条のR線赤圧痕
図122-3	遺構外	EL-14	I層	深鉢	底部	不明		底面に網代痕
図122-4	遺構外	-	-	深鉢	底部	無文	内面スズ付着	二次焼成により、外面刺青
図122-5	SD-07	HB-19	埋土	深鉢	体部	LR		充填縄文手法
図122-6	SK-12	DJ-05	埋土1層	深鉢	体部	LR		磨削縄文手法
図122-7	遺構外	AJ-05	Ⅱ層	壺	口縁～肩部	LR		口縁部端面から口頸部及び、内面に横方向のミガキ
図122-8	SK-18	EN-17	埋土1層	台付鉢	台部	無文		
図122-9	遺構外	DD-03	Ⅳ層	深鉢	口縁部	LR		底状口縁下に、入り組み三叉文及び沈線間に三叉文、沈線間ミガキ
図122-10	遺構外	ET～GT-22	カクラン	鉢	口縁部	RL	内外面にスズ付着	3条の沈線間に2列の刻み目文が配される
図122-11	遺構外	BL-10	埋土1層	注口	頸部～底部	無文		肩部に3条の花輪が施され、その間に目文が配される。体部には入り組み三叉文が施される



## 第6章 調査の成果

### 第1節 出土遺構について

#### 1 住居跡 (第125図)

竪穴住居跡は当遺跡での検出数は改築したのもも複数とみなすと、全部で16棟検出された。各住居跡の特徴として、①住居跡の立地する場所は標高50～60mの緩斜面ないしは平地である。②住居跡の形態はすべて方形である。③2H・3・4H、5H、6H、9H、10Hは比較的まとまりをみせているが、その他の住居は単独もしくは少数のまとまりであり、各住居間の距離も充分なスペースが設けられており、込み入った状態ではないということがいえる。

その内住居廃絶時期の上限を確定する白頭山苦小牧火山灰が覆土中から確認されたのは、7Hと12Hのみであり、他では確認されなかった。故に各住居跡の新旧は確認できないが、住居跡内から出土する土器の形式的比較から、各住居跡に時期差が生じないものと考えられる。そこでここでは、各住居跡の規模、形態、主軸方位、カマドの形態、使用頻度の状況等を比較検討したい。

#### a 規模・形態

全体を検出できた住居跡が少なく、各住居跡の床面積での比較が困難なため、壁長での比較を試みた。表6に壁長の大きさと順に並べたものを示す(9Hは柱穴間の距離のため、実際の壁長はこれよりも大きくなる)。これによると住居の棟数が少ないため厳密なことはいえないが、①壁長300cm未満のもの、②300cm前後のもの、③短辺が350cm前後、長辺が380～390cm前後のもの、④壁長460cm前後のもの、⑤一片が500cm前後のもの、⑥壁長580cm前後のもの6区分が可能である。各グループ内における住居の距離は離れているものの、

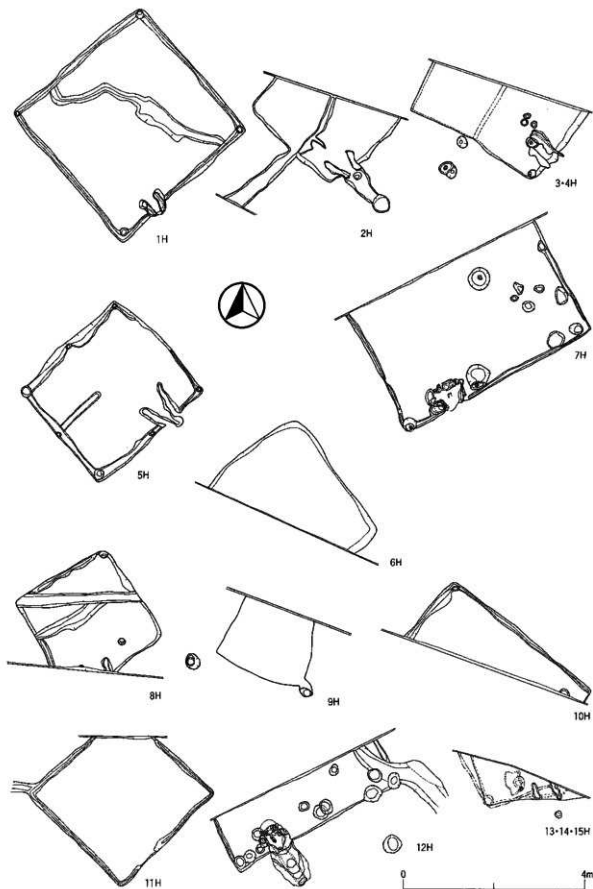
各グループで重複する住居の壁長の差異は10cm以内に収斂されるため、同一の規格により建てられていることが判明した。また各住居において、ほぼ正方形を呈するものと短辺と長辺の差が30～40cm前後ある長方形を呈するものの2種類が存在していることが判明した。

#### b 主軸方位

主軸方位を表6に示す。ほぼ全体にわたって東南方向を向いているが、さらに角度ごとに分類してみると、①120°前後のもの、②140°前後のグループ、③150°前後のグループ、④それ

住居跡	壁長 (mm)	壁溝	支柱穴	主軸方位
3 H	237	○	○	N-120° - E
2 H	304	×	×	N-138° - E
8 H	303×309	○	×	N-148° - E
9 H	334	×	○	不明
4 H	352	○	○	N-120° - E
1 1 H	355×394	○	○	N-139° - E
5 H	364×392	○	○	N-136° - E
6 H	385	×	×	不明
1 H	459×462	○	○	N-143° - E
1 2 H	502	○	○	N-150° - E
1 0 H	578	○	○	不明
7 H	580	○	○	N-148° - E
1 3 H	不明	×	×	N-172° - E
1 4 H	不明	×	○	N-167° - E
1 5 H	不明	×	×	N-158° - E

表6 各住居跡の諸属性



第125図 検出住居跡一覧

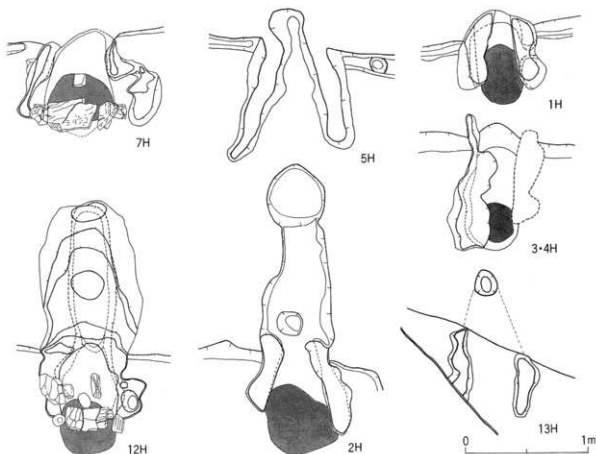
以上のグループの4区分が可能である。そこで各グループの立地場所をみるといずれもグループ内の各住居は隣接していることがわかる。

### c カマド

**設置場所** 第125図に示すように、各カマドは5Hを除き、住居壁面の中心より右側に位置している。

**構造** 各住居のカマドを第126図に示す。これを見ると構造上、以下の3グループに分類される。①素材は粘土を使用し、心材等の仕様はみられない。ソデの形態は焼き口部から焼成部にかけてほぼ平行であり、壁からの長さは短い。②素材は①と同様に粘土上であるが、ソデの形態が、焼き口部から焼成部にかけて幅が狭くなり、ハの字形を呈する。ソデの長さは①と比較すると長めである。③焼き口部の素材に凝灰岩の切り石を使用する点で、①・②とは異なる。ソデの心材にも丸石が使用されている。ソデの形態は②と同様ハの字形を呈するがソデの長さは短い。以上のように①から③にかけてカマドのつくりは精巧になっている。

**使用頻度** カマドの使用頻度を発掘時のソデの焼成による堅牢さ及び火床面の発達度によりみていくことにする。①のグループのソデは軟質であり、あまり被熱していない。火床面も発達しておらず確認することが困難であった。②のグループのソデは軟質のものと硬質のものがあり、火床面の発達しているものとそうでないものの両者が存在する。③はすべてソデは硬質であり、火床面もよく発達している。故に①～③の順にカマドの使用頻度が高くなる傾向が窺える。



第126図 検出カマド一覽

カマドの形態と住居の規模についてみていくことにする。①・②のグループは当遺跡で中型から小型の住居に設置されており、③は大型の住居に設置されている。

以上のことから当遺跡のカマドは使用頻度の違いに応じて、そのカマドの形態を変化させていることが判明した。つまり短期的な使用に関しては簡略化されたもの、長期的な使用に際しては精巧なつくりのカマドといった具合に作り分けを行っている。

#### d 付属施設

付属施設には溝跡、ロクロピットなどがあるものの、隠川(4)遺跡でみられるような住居の周囲を巡る外周溝、掘立柱建物跡等は確認できなかった。

**溝跡** 1H、2H、12Hで外延溝が検出されている。いずれの溝跡も住居の一番低い場所からさらに低い方向へと延びているために、住居内に流入した水を排水する目的で設置されたものと考えられる。  
**ロクロピット** 7Hで検出されている。ロクロ軸受部を粘土で補強したつくりで、隠川(4)・②遺跡等でみられるものとはほぼ同規模のものである。

#### e その他

その他に各住居群の端に溝が配される傾向がみられる。すなわち1H、11HにはSD02、2H、3・4H、5H、6H、7H、9H、10HにはSD07・08、7H、12HにはSDX03が近接する。これらの各溝は幅、深さとも30cm前後であり、高屋敷館遺跡でみられるような濠状のものではなく、排水路の様相を呈する。従ってこれらの溝は防御用というよりはむしろ、各集落を区分するための境界線的な溝跡であると考えられる。

## 2 土 壌

土壌には用途不明の上壌が大半を占めるが、その中で被熱を受けている土壌が数基検出されている。以下その焼成土壌についてその構造を記していくことにする。

焼成土壌と考えられるのはSK01、02、26、30、31である。規模は78～219cmと大きさに幅があるが、形態はいずれも隅丸の方形ないしは長方形である。いずれの土壌も床面に被熱の痕跡がみられ、覆土中にも多くの炭化物を含むが、土器等の遺物が出土せず、土器焼成遺構の可能性が考えられる土壌はなく、何を焼成した土壌であるか用途は不明である。いずれの土壌も壁面までの強い被熱、及び還元化等がみられないことから、使用期間もしくは一回の焼成温度が比較的低いと考えられる。

## 3 溝 跡

溝跡には大きく分けて3種類の溝跡が検出された。以下各溝跡についてその構造を明記していきたい。

#### a 直線的な溝跡

平安時代に一般的にみられる溝跡である。SD01～03、05～09、12～14がそれに該当する。

#### b 周溝状の溝跡

SD04、10、11が該当する。当初円形周溝墓の可能性も考えられたが、墳丘部が削平を受けていたり、調査区外のため、不明である。但し、SD04は周溝内に大量の須恵器の出土がみられたため、円

形周溝墓の可能性は高いと考えられる。SD10、SD11に関しては削平が著しいため、正確な遺構の性格は不明である。

### c 方形状の溝跡

SDX01～03が該当する。その内全体が把握できた溝跡はなく、各コーナの形態をみて方形であると判断した。いずれの覆土中にも白頭山苦小牧火山灰が上層付近で検出されているため、当溝跡の築造時期は9世紀代に遡る可能性も考えられる。規模の判明しているものはSDX03のみであり、一辺約9.4m、幅38～115cm、深さ30～70cmである。墳墓及び住居の外周溝の可能性も考えられたため、墳丘及び埋葬施設、柱穴等の確認を行ったが、検出されなかった。

SDX01及びSDX02は1コーナーのみの検出であるため、正確には方形と呼ぶことはできないが、各々幅48～135cm、深さ22～41cm、幅53～103cm、深さ38～58cmとSDX03と同様の形態及び堆積状況を示すため、方形溝状遺構とした。全体に遺物の出土数は少なく、細片のみであった。故に他の溝跡と同様に排水の機能を目的とした溝跡である可能性が高いと考えられる。

## 第2節 出土土器について

### 1 土師器

土師器に関しては第5章で述べたように器種分類を行っている。ここでは出土個体数の多い甕・坏類に絞って、器形のプロポーション、焼成、調整手法の違いについてみていくことにする。

#### a 甕類

復元可能な個体は全部で73個体であった。そこで各種口縁部端面形の頻度、口径による法量の差、各種調整技法の差を比較してみたいと思う。

##### (1) 各種端面形の頻度

甕類には2類を除くすべての端面形が観察された。第127図に土師器甕における各種端面形の割合を示す。これによるとA類(長胴甕)、B類(小型甕)ともに1類と3類で全体の3分の2を占めている。須恵器甕、壺等によくみられる4から6類の出現頻度は低い傾向にある。

##### (2) 口径による法量の差

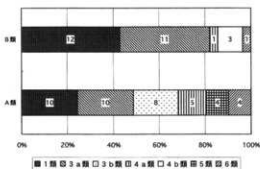
第128図に土師器甕類の口径分布のヒストグラムを掲げる。これによるとA類とB類は口径180mm付近で分別することが可能である。さらに各類型の平均値はA類が22.43cm、B類が13.74cmと口径に対するばらつきが多く、法量的にまとまりがみられない傾向がある。

##### (3) 各種調整技法の差

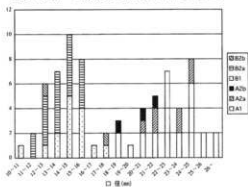
各類型におけるロクロ使用・不使用の割合を第129図に示す。これによるとA類、B類ともに1類型を呈するものにはロクロ非使用のものはなく、逆に2類型を呈するものにはロクロ非使用のものが認められる。全体的にはロクロ使用のものが84.9%を占める。

次に内外面の調整技法について各類型においてどのような差異が生じるか検討してみた。第130～133図に各類型及び各部位ごとの調整技法の割合を示す。これによるとA1類は口頸部ではロクロナデ及び横ナデで80%以上を占めるが、体部上半になるとロクロナデのみの調整は減少し、ケズ

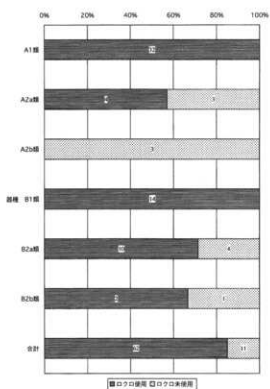
第127図 変類における各種端面形の出現頻度



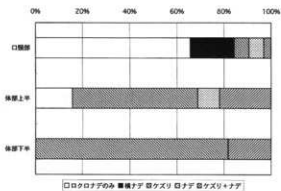
第128図 変類の口径ヒストグラム



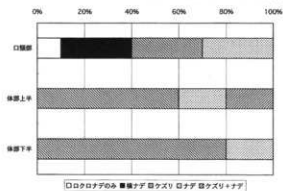
第129図 変類におけるロクロ使用頻度



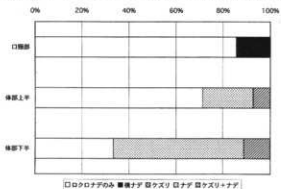
第130図 A1類における部位別の各種調整技法の割合



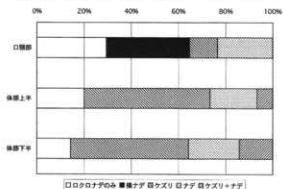
第131図 A2類における部位別の各種調整技法の割合



第132図 B1類における部位別の各種調整技法の割合



第133図 B2類における部位別の各種調整技法の割合



り及びナデ調整が80%以上を占め、体部下半に至っては、ケズリ調整が全体を占めるようになる。A2類は口頸部で若干ロクロナデ調整が施されているものが認められるが、全体として外面調整はケズリ調整が主体を占め、20%程にナデ調整が施されている。B1類は口頸部、体部上半で、ロクロナデ調整が主体を占め、体部下半ではナデ調整が主体を占めている。B2類はA類と同様の調整が施され、口頸部ではロクロナデ、横ナデ調整が主体を占め、体部ではケズリ調整が主体を占めている。

以上のように、壺類における成形時の調整手法は、ロクロ使用の有無、器高の違いにより同一の口縁部端面形を有するものでも差異が生じる結果となった。これは成形の容易さ、成形時間の速さに原因があると考えられる。つまり、ロクロ使用時には、全体をロクロで成形するか、ケズリ調整を行うかで、器高の高低さにより使い分けがみられる。

## b 坏類

復元可能な個体は全部で24個体であった。ここでは法量にどのような違いが生じるか、口径、器高、底径及び色調に基づいて検討することにした。

### (1) 口径・器高・底径による法量の差

口径・器高・底径による法量の差をみるために、第134図に口径と器高、第135図に口径と底径の分布図を示す。これによると口径は113~160mmと各個体間で開きがあるものの、口径と器高の比、口径と底径の比がともに0.4前後に収束する。この結果について以下のことが考えられる。①坏における製作手法は法量の同一化よりも、むしろ器形を優先していた。②各制作者ごとに器形の統一は図られていたが、法量の統一は図られていなかった。

### (2) 色調による法量の差

隠川(4)・02遺跡において、色調と法量に関係がみられる(木村・三林 1998, pp. 228-229)ことが述べられてあったので、隣接する当遺跡でも同様の結果が生じれば、法量分化の際の有効手段であると考え、同一基準に基づいて検証してみることにする(第136図)。

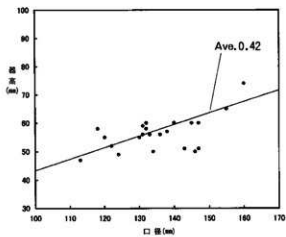
赤褐色系の個体は口径127~160mm、平均142.2mm、標準偏差10.62である。当遺跡で山上した土師器の中で口径が150mmを超えるものは赤褐色系の個体のみであり、かつ全体の平均口径が135mm前後であるのに比較すると、大型の土師器が多い傾向が見いだせるが、隠川(4)・02遺跡とは異なり、各個体にばらつきがみられること、130mm前後の個体も見受けられることから、一概には大型の個体=赤褐色系とはいえないと考えられる。

褐色系の個体は口径118~147mm、平均135.1mm、標準偏差8.19である。隠川(4)・02遺跡ではばらつきが生じたのに対し、当遺跡では各色調別にみると一番のまとまりをみせている。しかし最も集中する口径は130~140mmと一致している。

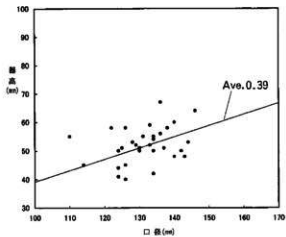
灰白色系の個体は口径113~148mm、平均134.8mm、標準偏差10.31である。隠川(4)・02遺跡はある程度収束されるのだが、当遺跡では最もばらつきが生じる結果となった。

以上のように各色調と口径の関係をみてきたが、赤褐色系で大型の個体が目立つという事以外は殆ど傾向が窺えない結果となった。やはりその焼成状況により、同一の法量をもつ個体でも変化が生じると考えた方が妥当であり、色調から法量の分化をみるのは難しいと考えられる。しかしなが

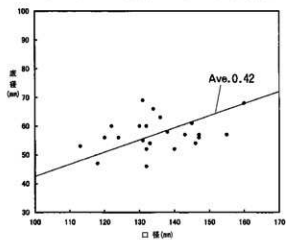
第134図 土師器杯の口径・器高分布図



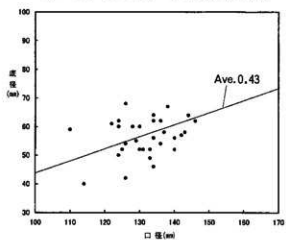
第137図 須恵器杯の口径・器高分布図



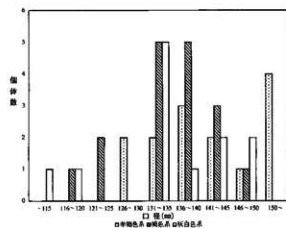
第135図 土師器杯の口径・底径分布図



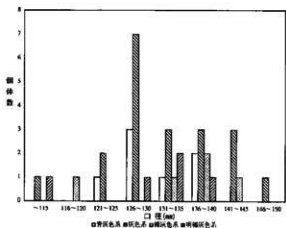
第138図 須恵器杯の口径・底径分布図



第136図 土師器杯の色別口径ヒストグラム



第139図 須恵器杯の色別口径ヒストグラム





ら赤褐色系の土師器は両遺跡で、同様の結果が生じたので、これからの資料数の増加を待たねばならないが、当時期の法量の分化を考える上で、有効な手段であると考えられる。

## 2 須恵器

須恵器の各類型ごとの特徴は前章で述べたので、ここでは出土量の多い坏に限って土師器の坏と同様に法量の違いを口径、器高、底径及び色調に基づいて検討することにした。

### (1) 口径・器高・底径による法量の差

口径・器高・底径による法量の差をみるために、第137図に口径と器高、第138図に口径と底径の分布図を示す。これによると、①基本的に土師器・須恵器における法量の分化は認められない。②土師器の坏程口径にはばらつきがみられずほぼ122～140mmの範囲に収まる。③口径と器高の比及び口径と底径の比をみるといずれも平均0.40前後であるが、土師器と比較すると口径と底径の比率において若干のばらつきがみられた。④土師器のように150mmを越える大型の須恵器は出土しなかった。

以上の結果から須恵器の坏は窯という限られた空間内で焼成が行われるため、五所川原須恵器窯では、通常重ね焼きされている。そのためには同一の規格をもった坏を生産したほうが、重ね焼きは容易である。また口径も大きくない方が一度に大量の坏を焼成するのに適しているためと考えられる。

### (2) 色調による法量の差

土師器の坏と同様に須恵器の坏においても、隠川(4)・Q2遺跡と同一の基準を設定して口径との関係を検討することにした(第139図)。

青灰色系の個体は口径120～140mmの範囲に収束する。灰色系の個体は口径126～145mmの範囲に多くみられるが、110mm程の小型の個体も出土している。褐灰色系の個体は口径120～140mmの範囲に収束する。明褐灰色系の個体は口径114mmの個体も出土しているが、全体として120～130mmの範囲に収束している。

以上のように須恵器に関しては、色調による分類は当遺跡では可能であると考えられず、むしろ須恵器全体で口径120～140mmの範囲に収束する傾向があるため、須恵器全体を通して法量の一定化が図られていると考えられる。

## 3 ヘラ書記号について(第117図)

五所川原産須恵器の一つの特徴にヘラ書記号があるが、これは須恵器の各器種及び土師器の坏に記載されている。記号の種類は図示したとおりである。ヘラ書記号の付される部位は、以下の通りである。須恵器甕：頸部、須恵器壺：頸部及び肩部、須恵器鉢：頸部及び肩部、須恵器及び土師器坏：体部下半及び底部。

坏の底部に描かれているものを除いて一般的に日に付く部位に記載されているのが特徴であり、一般的な窯印であるとは考えにくい。

またヘラ書記号の記される割合がどのくらいか器種ごとにみていくことにする。ここで全体の復元

ができたもの及びへら書記号が確認されたものだけで集計したところ、須恵器甕は67%(2/3)、須恵器壺は100%(6/6)、須恵器鉢は100%(3/3)、須恵器坏は100%(21/21)、土師器坏は43%(7/16)である。

全体が復元できない個体が多いため、限られた資料数であるが、須恵器に関しては全ての遺物に関してへら書記号が記され、須恵器製作の際にへら書記号を記すのが慣例となっていた可能性が高いと考えられる。またその須恵器に対して記されるへら書記号が、土師器の坏にも適用されていることが、当地域の一つの特徴であると考えられる。

#### 4 火燻痕について

五所川原須恵器の特徴として、火燻痕の残る坏が多いことがあげられる。ここでは当遺跡で出土した須恵器坏に残る火燻痕の割合をみていくことにする。当遺跡出土須恵器は前述したように完全に復元できたものは少ないが、ここでは資料化した44個体の内火燻痕が確認されたものは48%の21個体である。完形が少ない為、実際はもう少し割合は高くなると考えられるが、非常に高い割合であるといえる。このことは窯内の須恵器の坏焼成における重ね焼きが一般的であることを裏付ける結果である。

#### 5 器種組成

各住居跡出土土器の器種組成を表7に示す。遺物の出土数が少ないために、各住居ごとの変遷時期は不明であるが、器種ごとにみていくと、長胴甕A類に関しては、体部上半がロクロ成形で、下半にケズリ調整が施されるA1類が主体であり、A2類は単独で出土することはなく、A1類に付帯する状況で出土している。以上のようにロクロ成形の有無で各住居の時期差はみられず、混在する形態での出土である。このことは小形甕B類に関しても同様のことがいえる。

坏ではすべてロクロ成形であり、内面黒色処理が施された坏が出土しており、底面は回転糸切痕が主体をしめ、静止糸切痕もみられる。また各住居においてカマドの支脚として一番多く使用されていた器種である。

鉢はすべてロクロ成形であり、ロクロナデのみの調整のものが大半を占める。端面形は口唇部に面取りが施され平坦な形態のものが多い。

壺では、ロクロ成形後体部下半に1軍なケズリ調整が施されている。口唇部の形態は持子沢系の形態を呈し、底面の調整も、菊花文といわれるケズリ出しによる高台状に作り出したものと、ケズリ調整のものである。

甕では肩部及び底部付近に格子タタキ目、体部に平行タタキ目が施され、犬走須恵器窯と同様の当て具痕が使用されている。

以上のことから、須恵器からみた住居跡の使用及び廃絶時期は、9世紀後半から10世紀前半に位置付けられ、五所川原須恵器窯の創業開始時期と当集落の開始時期にはズレは生じないものと考えられる。

表7 住居跡出土土器 器種組成表

遺構 器種	1H		2H		3H		5H		6H		7H		8H		9H		10H		11H		12H		13H		統計					
	溝床	床	カ	床	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ	カ		カ	カ			
A		1										4	1													3				
A1					3	1																					22			
A2a																											2			
A2b																											1			
B		1																									3			
B1				1																							13			
B2a		1																									8			
B2b																											2			
C1		1																									13			
C2																											1			
C3																											6			
D1																											2			
D2																											1			
D3																											1			
G																											2			
G1a																											1			
G1b																											3			
G2c																											1			
SA1																											1			
SA2																											1			
SB1																											3			
SC																											1			
SC1				2																							12			
SC3		1																									9			
SE																											3			
SE1																											2			
SG																											1			
統計	1	1	4	6	4	8	3	2	5	4	2	1	2	6	2	3	1	2	2	1	4	1	17	3	4	18	6	1	3	117

※表中の数字は出土位置を示すもので各々次の通りである。床：床面直上出土。カ：カマド内出土

土：土壇出土。ピ：ピット内出土。貼：貼床層土内出土

## 第7章 自然科学的分析

### 第1節 隠川(2)外遺跡出土須恵器・土師器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利 一

窯跡から出土する須恵器を大量に分析すると、K-Ca、Rb-Srの両分布図上で集中して分布する。つまり、K、Ca、Rb、Srの4因子からみて窯跡出土須恵器は一定の化学特性をもつこと、さらに、他の地域の窯跡出土須恵器の化学特性と比較すると地域差があることが立証されて、須恵器の産地推定法の開発研究が開始された。

須恵器の窯跡は全国各地にあり、その数は数千基を超えるといわれる。このままでは産地推定の作業を進めるのは困難である。何らかの形で整備することが必要である。ところがうまい具合に須恵器窯跡は全国各地に均等に分布しているのではなく、良質の粘土の産出地域には数十基以上の窯跡が集中する。これらの窯跡から出土する須恵器の化学特性は類似することが実験的に証明されている。かくして、化学特性からみて窯跡群としてまとめることができることがわかった。

窯跡群は数基程度の小規模窯群から、数十基以上、場合によっては数百基以上の窯が集中する大規模窯群まである。この中で外部地域に製品を供給することができるのは大規模窯群であると考えられている。大規模窯群こそ、須恵器生産工場ともいえる存在なのである。このような大規模窯群は全国各地に40ヶ所ほどあり、その多くは9世紀代に集中する。

五所川原窯群は10世紀代の、数少ない大規模窯群の一つである。その地理的な位置からみて、東北地方北部地域や北海道へ伝播していたことは容易に考えられるが、実際にその供給範囲を実験的に証明しない限り、五所川原窯群の須恵器の伝播・流通論を本格的に展開することはできない。

隠川(2)遺跡は五所川原窯群の至近距離にある遺跡である。五所川原窯群が操業に入っていれば、五所川原窯群の製品が多数検出されるはずである。このような予想をもとに、隠川(2)外遺跡から出土した須恵器、および土師器の蛍光X線分析の結果について報告する。

須恵器の分析値は表8に示してある。数値のままではデータは理解し難い。両分布図におおとしてみると理解し易い。第140図には須恵器の両分布図を示す。比較対照のために五所川原領域を示してある。予想通り、多くの資料が五所川原領域に対応することがわかる。

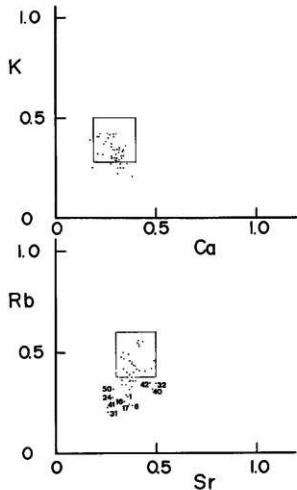
これらの資料が分析値からみて五所川原窯群産といえるかどうかをみるため、五所川原群と瀬谷子群との間で2群間判別分析を試みた。D<sub>2</sub>(五所川原群)、D<sub>3</sub>(瀬谷子群)の計算値を表8に示してある。各母集団への帰属条件は通常D<sub>2</sub>(X) ≤ 10である。(X)は母集団名である。この条件を入れて判定した結果も表8に示してある。大部分の資料は五所川原群への帰属条件を満足していることがわかる。

五所川原窯群の須恵器の素材粘土は八甲田山の火山灰に由来するのか、Fe量が多く、通常Fe > 3.0と考えられている。これも五所川原窯群への帰属条件の一つである。この2つの帰属条件を満足したものが五所川原群産と判定された。

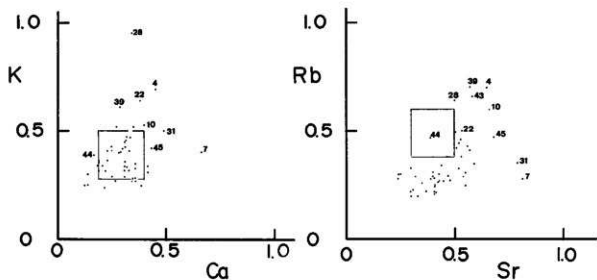
五所川原群産と判定された須恵器はNa 2、3、4、5、7、8、9、10、11、15、21、22、23、25、28、29、30、33、34、36、38、39、43、44、45、47、48の27点である。また、 $D_2$ (五所川原群)  $\leq 10$ を満足せず、不明と判断されたものはNa 1、6、14、16、17、19、20、24、31、32、35、40、41、42、46、49、50の17点である。第140図をみると、これらはいずれも五所川原領域の下にはずれて分布しており、同一産地の製品と推定される。しかしFe量を表8から点検すると、Na32、40、42にはいずれもFe量が少なく、かつ、第140図のRb-Sr分布図でもまとまって分布することから、不明品の中でもこれら3点は別産地の製品と推定される。もしかしら特定されていない小規模窯群の製品かもしれない。残りのNa12、13などは $D_2$ (五所川原群)  $\leq 10$ の帰属条件を満足したものの、 $Fe > 3.0$ を満足しなかったので未定とした。

土師器の分析データは表9にまとめられている。この結果を両分布図におとしたのが第141図である。大部分の資料はK-Ca分布図

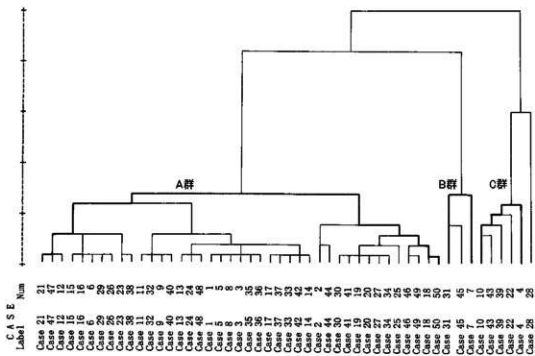
では須恵器の五所川原領域に、Rb-Sr分布図では五所川原領域の下の領域に分布するが、一部に両分布図で五所川原領域の右側に散在するものがあり、胎土は一色ではないことがわかる。そこでK、Ca、Rb、Srの4因子を使ってクラスター分析をしてみることにした。その結果は第142図に示されている。Na21~Na50をA群、Na31~Na7をB群、Na10~Na4をC群に分けてみた。Na28のみは孤立し、類似した胎土は他にないことがわかる。このクラスター分析の結果を第141図の両分布図と比較すると、分類結果はよく理解できる。A群はRb-Sr分布図でSr量の少ないものと、Sr量の多いものに分類できそうに見えるが、K-Ca分布図では区切り難いので、Na21~Na50をA群としてまとめた。そうすると、A群の土師器の両分布図における分布と、須恵器で産地不明となったNa1、6、16、17、24、31、41、50の分布位置が似ており、しかも、Fe量も類似しているところから、同じ胎土である可能性ができた。つまり、Na1、6などの須恵器は土師器と同じ素材粘土で作られたものである可能性ができたのである。勿論、この胎土は須恵器の主成分胎土ではない。もしかしら、出来の良くない須恵器であるかもしれない。そのために外部へは出さずに、生産地で使用されただけなのかもしれない。そうすると、これはまた面白い実例となる。B群、C群はA群とは別の胎土である。外部地域からの搬入品である可能性をもつ。目下のところそれ以上のことは何ともいえない。



第140図 須恵器の両分布図



第141図 土師器の両分布図



第142図 土師器のクラスター分析  
(K, Ca, Rb, Srの4因子を使用)

表8 須恵器の分析データ

試料番号	分析No.	器種	部位	遺構名	層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D <sub>r</sub>		判定
												(五所川遺跡)	(龜谷子遺跡)	
11-1700	1	杯	口縁	1H	床底	0.257	0.314	3.19	0.282	0.364	0.149	14.4	56.0	不明
11-1701	2	杯	底部	2H	床底	0.310	0.279	4.06	0.343	0.327	0.155	9.1	54.6	五所川遺
11-1702	3	壺	口縁	2H	床底	0.404	0.257	4.10	0.475	0.326	0.214	5.4	47.3	五所川遺
11-1703	4	壺	口縁	2H	床底	0.311	0.343	3.54	0.360	0.385	0.216	4.7	58.7	五所川遺
11-1704	5	壺	胴部	2H	床底	0.329	0.335	3.07	0.410	0.418	0.255	2.7	42.9	五所川遺
11-1705	6	杯	底部	2H	床底	0.254	0.327	3.60	0.237	0.384	0.261	32.4	51.9	不明
11-1706	7	変?	底部	2H	覆土2層	0.374	0.241	3.17	0.487	0.362	0.213	1.9	30.5	五所川遺
11-1707	8	壺	胴部	2Hカマド	覆土3層	0.371	0.277	3.19	0.404	0.356	0.151	9.0	38.0	不明
11-1708	9	壺	胴部	2Hカマド	覆土1層	0.273	0.327	3.56	0.321	0.374	0.164	7.9	57.0	五所川遺
11-1709	10	壺	口縁	6H	覆土1層	0.299	0.330	3.57	0.363	0.373	0.214	3.4	60.0	五所川遺
11-1710	11	短頸壺?	口縁	6H	覆土2層?	0.420	0.300	3.11	0.534	0.421	0.262	0.6	37.7	五所川遺
11-1711	12	杯	底部	6H	覆土1層	0.421	0.254	2.68	0.551	0.436	0.262	4.2	2.7	未定
11-1712	13	壺	胴部	SK04	覆土1層	0.363	0.353	2.29	0.460	0.489	0.361	7.3	31.0	未定
11-1713	14	短頸壺?	口縁	SK05	覆土6層	0.417	0.271	2.68	0.551	0.436	0.262	4.2	21.7	不明
11-1714	15	壺	胴部	SK16	覆土1層	0.300	0.308	3.25	0.362	0.368	0.235	4.5	50.2	五所川遺
11-1715	16	鉢	口縁	SK19	覆土1層	0.316	0.235	3.71	0.260	0.341	0.145	59.9	37.2	不明
11-1716	17	壺	口縁	SK20,21,22	覆土1層	0.212	0.383	3.32	0.245	0.367	0.148	13.2	100.0	不明
11-1717	18	壺	口縁	SK20	覆土1層									
11-1718	19	壺	口縁	SK20	覆土4層	0.342	0.344	2.67	0.424	0.475	0.272	9.6	27.0	不明
11-1719	20	壺	口縁	SK17	覆土2層	0.322	0.207	3.45	0.377	0.307	0.206	12.2	33.9	不明
11-1720	21	短頸壺?	底部	SK20,21,22	覆土1層	0.421	0.286	3.13	0.537	0.416	0.235	0.8	34.0	五所川遺
11-1721	22	壺	口縁	SK10	覆土3層	0.406	0.294	4.07	0.473	0.341	0.260	5.2	58.9	五所川遺
11-1722	23	壺	口縁	2H	床底	0.302	0.300	3.18	0.394	0.372	0.207	2.4	48.5	五所川遺
11-1723	24	杯	口縁	SD02	覆土1層	0.273	0.177	4.33	0.284	0.278	0.136	34.2	43.0	不明
11-1724	25	杯	底部	2H	覆土1層	0.250	0.344	3.89	0.293	0.353	0.154	8.2	81.0	五所川遺
11-1725	26	壺	胴部	SD02	覆土1層	0.411	0.214	2.12	0.555	0.412	0.240	6.7	18.5	未定
11-1726	27	壺	胴部	SD02	覆土1層	0.423	0.221	2.14	0.546	0.410	0.256	5.9	16.6	未定
11-1727	28	壺	胴部	SD07	覆土1層	0.293	0.297	3.46	0.340	0.350	0.243	7.0	52.9	五所川遺
11-1728	29	壺	胴部	SD04	覆土3層	0.297	0.297	3.25	0.382	0.361	0.212	2.7	51.5	五所川遺
11-1729	30	壺	口縁	SD04	覆土2層	0.310	0.330	3.28	0.379	0.382	0.233	2.6	55.6	五所川遺
11-1730	31	壺	胴部	SD04	覆土3層	0.225	0.310	5.17	0.207	0.264	0.115	23.3	126.0	不明
11-1731	32	壺	胴部	SD04	覆土2層	0.288	0.323	1.94	0.349	0.502	0.272	38.2	10.6	不明
11-1732	33	壺	口縁	SD04	覆土4層	0.355	0.278	3.11	0.451	0.379	0.229	1.1	35.5	五所川遺
11-1733	34	壺	口縁	SD04	覆土2層	0.340	0.317	3.04	0.495	0.396	0.258	0.6	46.4	五所川遺
11-1734	35	杯	口縁	SD04	覆土3層	0.331	0.317	2.64	0.406	0.448	0.260	10.0	23.0	不明
11-1735	36	杯	口縁	SD04	床底	0.354	0.322	3.27	0.424	0.408	0.237	2.4	39.5	五所川遺
11-1736	37	杯	口縁	SD04	覆土3層									
11-1737	38	壺	口縁	SD04	覆土2層	0.340	0.286	2.92	0.453	0.384	0.220	1.0	40.2	五所川遺
11-1738	39	短頸壺?	口縁	SD04	覆土3層	0.273	0.358	2.89	0.359	0.403	0.237	4.8	64.6	五所川遺
11-1739	40	杯	口縁	SD04	覆土2層	0.280	0.316	2.03	0.319	0.482	0.287	41.8	11.1	不明
11-1740	41	杯	底部	SD07	覆土2層	0.250	0.184	4.39	0.231	0.263	0.152	45.6	59.3	不明
11-1741	42	壺	口縁	SD07	覆土4層	0.320	0.304	2.72	0.348	0.468	0.194	35.7	1.0	不明
11-1742	43	壺	胴部	SD07	覆土4層	0.340	0.305	3.04	0.443	0.391	0.239	0.6	44.2	五所川遺
11-1743	44	壺	口縁	SD07,08	覆土1層	0.337	0.285	4.00	0.420	0.340	0.228	1.8	55.0	五所川遺
11-1744	45	杯	口縁	SD07,08	覆土3層	0.375	0.248	3.68	0.459	0.371	0.164	3.7	25.1	五所川遺
11-1745	46	壺	口縁	SD08	覆土3層	0.394	0.174	3.47	0.398	0.302	0.159	32.4	25.2	不明
11-1746	47	杯	口縁	SD08	覆土3層	0.409	0.214	3.65	0.503	0.339	0.240	5.0	27.1	五所川遺
11-1747	48	杯	口縁	SD08	覆土4層	0.284	0.305	3.76	0.359	0.331	0.207	3.6	72.1	五所川遺
11-1748	49	壺	胴部	SD08	覆土3層	0.298	0.281	3.05	0.333	0.379	0.168	15.9	30.9	不明
11-1749	50	杯	底部	SD08	床底	0.279	0.205	4.17	0.324	0.285	0.134	16.3	46.8	不明

表9 土師器の分析データ

試料番号	分析No.	器種	部位	遺構名	層位	K	Ca	Fe	Rb	Sr	Na	D <sub>1</sub> (五所川原群)	D <sub>2</sub> (福井子群)	判定
11-1650	1	甕	口縁	SK04	覆土1層	0.266	0.357	3.34	0.221	0.415	0.255			
11-1651	2	甕	口縁	SK04	覆土2層	0.411	0.246	1.76	0.495	0.505	0.313			
11-1652	3	甕	口縁	SK04	覆土1層	0.291	0.310	3.36	0.224	0.411	0.236			
11-1653	4	甕	口縁	SK04	覆土1層	0.693	0.452	2.22	0.699	0.652	0.364			
11-1654	5	甕	胴部	SK04	覆土1層	0.281	0.364	3.37	0.222	0.411	0.247			
11-1655	6	甕	胴部	SK04	覆土1層	0.321	0.193	3.56	0.197	0.301	0.185			
11-1656	7	甕	胴部	SK04	覆土1層	0.399	0.662	1.89	0.282	0.809	0.436			
11-1657	8	甕	胴部	SK04	覆土2層	0.279	0.352	3.26	0.248	0.407	0.250			
11-1658	9	甕	胴部	SK04	覆土1層	0.336	0.319	2.38	0.305	0.548	0.312			
11-1659	10	甕	胴部	SK04	覆土1層	0.534	0.403	2.30	0.603	0.662	0.399			
11-1660	11	甕	胴部	SK04	覆土1層	0.314	0.424	2.35	0.253	0.554	0.336			
11-1661	12	甕	胴部	SK04	覆土2層	0.300	0.140	4.10	0.280	0.237	0.198			
11-1662	13	甕	胴部	SK04	覆土1層	0.337	0.213	2.11	0.297	0.431	0.267			
11-1663	14	甕	口縁	SK05	覆土3層	0.398	0.291	2.42	0.272	0.480	0.251			
11-1664	15	甕	口縁	SK05	覆土2層	0.286	0.251	3.63	0.195	0.327	0.219			
11-1665	16	甕	口縁	SK05	覆土6層	0.267	0.269	3.48	0.229	0.308	0.161			
11-1666	17	甕	口縁	SK05	覆土4層	0.330	0.363	3.31	0.265	0.429	0.257			
11-1667	18	甕	底部	SK05	覆土3層	0.431	0.254	3.04	0.339	0.444	0.270			
11-1668	19	甕	胴部	SK05	覆土3層	0.424	0.298	2.53	0.437	0.519	0.288			
11-1669	20	甕	胴部	SK05	覆土6層	0.407	0.332	2.92	0.413	0.566	0.317			
11-1670	21	甕	胴部	SK05	覆土2層	0.249	0.126	4.29	0.297	0.247	0.161			
11-1671	22	甕	胴部	SK05	覆土6層	0.636	0.382	2.98	0.500	0.536	0.318			
11-1672	23	甕	胴部	SK05	覆土6層	0.361	0.313	3.47	0.294	0.321	0.155			
11-1673	24	甕	胴部	遺構外	IV層	0.316	0.219	2.37	0.309	0.400	0.232			
11-1674	25	甕	胴部	SK05	覆土3層	0.499	0.321	2.68	0.346	0.585	0.284			
11-1675	26	甕	胴部	SK05	覆土3層	0.365	0.233	4.07	0.224	0.370	0.235			
11-1676	27	甕	胴部	SK05	覆土2層	0.518	0.348	3.10	0.459	0.529	0.326			
11-1677	28	甕	胴部	SK05	覆土3層	0.950	0.338	2.94	0.638	0.503	0.238			
11-1678	29	甕	胴部	SK05	覆土3層	0.338	0.185	3.69	0.218	0.297	0.200			
11-1679	30	甕	胴部	SK05	覆土3層	0.474	0.335	2.61	0.429	0.558	0.305			
11-1680	31	甕	胴部	SK05	覆土3層	0.499	0.492	1.87	0.346	0.788	0.327			
11-1681	32	甕	胴部	SK05	覆土6層	0.338	0.420	3.24	0.290	0.541	0.305			
11-1682	33	甕	胴部	SK05	覆土4層	0.344	0.308	3.45	0.254	0.409	0.261			
11-1683	34	甕	胴部	SK05	覆土3層	0.523	0.270	2.56	0.417	0.507	0.232			
11-1684	35	甕	胴部	SK05	覆土6層	0.269	0.336	3.36	0.260	0.354	0.156			
11-1685	36	甕	胴部	SK05	覆土2層	0.251	0.388	3.19	0.275	0.393	0.207			
11-1686	37	甕	胴部	SK05	覆土4層	0.324	0.331	3.41	0.268	0.447	0.258			
11-1687	38	杯	口縁	SK05	覆土3層	0.406	0.232	4.40	0.339	0.296	0.168			
11-1688	39	杯	底部	SK05	覆土6層	0.611	0.291	2.63	0.696	0.572	0.298			
11-1689	40	甕	底部	SD02	覆土1層	0.353	0.356	2.49	0.327	0.521	0.293			
11-1690	41	甕	胴部	SD02	覆土1層	0.463	0.315	2.30	0.383	0.529	0.265			
11-1691	42	甕	胴部	SD02	覆土1層	0.317	0.305	2.75	0.298	0.474	0.254			
11-1692	43	甕	胴部	SD02	覆土2層	0.433	0.307	2.59	0.659	0.577	0.330			
11-1693	44	甕	口縁	SD02	覆土1層	0.388	0.167	1.85	0.467	0.389	0.223			
11-1694	45	甕	口縁	SD02	覆土1層	0.420	0.435	2.51	0.468	0.679	0.404			
11-1695	46	甕	口縁	SD02	覆土1層	0.475	0.317	3.38	0.292	0.396	0.238			
11-1696	47	甕	底部	SD02	覆土1層	0.250	0.138	4.19	0.302	0.245	0.155			
11-1697	48	甕	胴部	SD02	覆土1層	0.237	0.223	2.39	0.272	0.433	0.266			
11-1698	49	甕	胴部	SD02	覆土2層	0.454	0.312	3.29	0.278	0.407	0.251			
11-1699	50	甕	胴部	SD02	覆土1層	0.401	0.291	2.63	0.376	0.467	0.262			



## 第2節 隠川(2)外遺跡出土の土器の偏光顕微鏡分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## 1. 試料

試料は、土器片6点(試料No 1～6)と比較対照試料である持子沢B遺跡から出土した土器片2点(試料No 7、8)、砂田D遺跡2号室から出土した土器片2点(試料No 9、10)の合計10点である。各試料の出土した遺構名、器種、部位などは、観察結果を示した表10に併記する。

## 2. 分析方法

本分析では薄片を製作して、胎土中に含まれる鉱物片や岩石片の種類とその量比を把握する、薄片観察を行う。薄片観察では、土器に使用された粘土や砂の採取地の地質学的背景の推定が可能であり、既存の地質調査結果などと比較することにより、採取地の具体的な推定も可能となる。以下に、処理手順を述べる。

試料をダイヤモンドカッターで切断、正確に0.03mmの厚さに研磨し、薄片を製作する。薄片は、偏光顕微鏡下で観察を行う。試料の胎土中には、碎屑片として鉱物片・岩片が含まれている。素地の主要構成物となる粘土鉱物・碎屑片は高温で焼成され、一部の試料では加熱変化を生じていることが認められる。ここでは、胎土の碎屑片の種類・量比を明らかにして、鉱物の加熱変化から焼成温度を推定した。

## 3. 結果

## (1) 鉱物片・岩片・素地の状況

## a) 鉱物片

試料には鉱物片として、石英・斜長石が全点に含まれ、次いで角閃石・不透明鉱物が各々4点に認められる。この他には、カリ長石・黒雲母・単斜輝石・斜方輝石があり、各1～3試料に微量～きわめて微量含まれる。

**石英**：鉱物片としての石英は、少量ないし微量で含まれる。石英粒は、破片状または他形粒状を呈し、1,150℃以上の焼成温度と推定される試料中の石英片には、高温焼成を受けて生成したクラック(記載表中では高温クラックと略記した)の生成や、部分熔融などの加熱変化が生じている。後述する高温型に区分される試料以外にも、類似するクラックが認められることがある。これらは、流紋岩や石英斑岩などの火成岩の斑晶となる石英にみられる天然現象で、しばしば区別できないことがある。

各資料に含まれる石英片の最大粒径を比較すると、0.10～1.30mmでその差は大きく、量比も一定していない。最大粒径の平均値は0.78mmで、粗粒である。

**カリ長石**：10点のうち、1点にきわめて微量に存在するにすぎない(試料No 2)。カリ長石は、一般には他形粒状を示す正長石として含まれる。陶磁器中のカリ長石は、約1,150℃の加熱で溶化し、

溶化ガラスを生成する。このため、高温で焼成された試料中には残晶が認められず、溶化した仮像で、その存在が推定される場合がある。試料No.2では、カリ長石は完全に溶化した状態、および一部に正長石の残晶が認められる状態で存在している。カリ長石片は、花崗岩に起源することが多い。

**斜長石**：斜長石は10試料に少量～微量の範囲で存在し、破片状～板状を呈する。最大粒径0.15～1.30mm、最大粒径の平均値は0.75mmを示す。斜長石は、曹長石～灰長石を総称した鉱物名である。一般に陶磁器類に含まれる斜長石は多くの場合曹長石であるが、観察試料中の斜長石には、火山岩源と思われる中性長石～曹長石も含まれる。このような斜長石には、累帯組織が発達していることが多く、一部には火山岩の斑晶にしばしば見られる溶融組織が伴われる。

斜長石のうち、曹長石は1,118℃で溶化する。曹長石の加熱変化は単純ではなく、縁辺部非晶質化→褐色変化→針状ムライト晶出(疎～密)→中心部にムライトの二段晶出→全面的な針状ムライトの生成の順で、途中段階では中心部に曹長石の残晶が認められることがある。ただし、曹長石よりもCaに富む中性長石または曹長石などは、曹長石より溶融温度が高くなるため、上の加熱変化による加熱温度推定は適用できない。

観察試料中の斜長石に針状のムライトを生成し、部分溶融している現象は試料No.10に認められる。試料No.10では、一部の斜長石は完全にムライトで交代され、他の大部分は斜長石の縁辺部に沿ってリム状にムライトが晶出し、中心部は斜長石の残晶を残存している。また試料No.1では、斜長石縁辺部の非晶質化と褐色化が観察される反面、集片双晶して加熱変化していない斜長石も認められる。曹長石質斜長石と灰長石成分に富む斜長石の混在による現象であろう。

**黒雲母**：試料No.9に、きわめて微量で含まれる。原土中での風化と思われるが、淡色化し加水黒雲母に変質しているため、本来の黒雲母の性質は失われている。黒雲母も、花崗岩類に起源することが多い鉱物の一つである。

**角閃石**：4試料に微量～きわめて微量存在し、他形の破片粒状を呈する。焼成物中の角閃石は、約800℃の加熱で酸化角閃石化が始まり、950℃で強酸化の状態に、さらに加熱温度が上昇して1,000℃を越えると、次第に黒色鉄鉱物に変質していく現象を実験的に確かめている。観察した試料No.3、4、7、10の角閃石は、いずれも弱酸性の状態と判断される。

**輝石類**：単斜輝石は鉱物片としては、微量～きわめて微量の範囲で2点(試料No.7、9)に、斜方輝石はきわめて微量で1点(試料No.9)にみとめられる。粘土中の輝石類は、安山岩に起源していることが多い。

**不透明鉱物**：4点検出されたが、試料No.1と試料No.3に特に多く含まれる。通常は黒色鉄鉱物であることが多く、試料No.3の不透明鉱物の大部分は黒色鉄鉱物であるが、試料No.1の不透明鉱物については、一部を除いてカーボンである疑いが残る。不透明鉱物については、岩石顕微鏡では鉱物種を同定することはできないので、反射顕微鏡での観察が必要である。

## b) 岩片

岩片として最も多く検出される岩種は凝灰岩で、全点に認められ、次いで泥岩が5点に、珪質岩が4点に、安山岩が3点に含有され、頁岩・砂岩・スコリア・火山ガラスが各1～2点に認められる。

**凝灰岩：**全点少量～微量の範囲で認められ、岩片としてはもっとも出現頻度が高い。試料中の凝灰岩の最大粒径は0.32～1.40mm、平均最大粒径は0.66mmを示し、比較的大型である。亜円礫状～亜角礫状を呈し、非晶質であるものが大部分である。凝灰岩は、新第三紀地層に起源していると考えられる。

**泥岩：**5点に微量～きわめて微量の範囲で認められる。試料中の泥岩の最大粒径は0.10～0.20mm、平均最大粒径は0.14mmを示す。亜円礫状を呈し、非晶質の粘土岩が多い。新第三紀以降の若い地層に起源していると考えられる。

**珪化岩：**4点に認められ、細粒～中粒の石英の集合体で構成されている。凝灰岩などの珪化岩と考えられるが、原岩の組織は残留していない。珪化岩の最大粒径は0.23～0.90mm、平均最大粒径は0.53mmを示し、亜円礫状を呈する。

**安山岩：**3点に微量～きわめて微量検出される。ガラス基流晶質組織を示す、安山岩の岩片である。原土の上流域の地質が火山活動(新第三紀以降)と関連することは、安山岩・火山ガラス・スコリア・軽石などの岩片の存在と、これに起源する鉱物片として単斜輝石・斜方輝石・角閃石・斜長石が含まれる点で明らかである。

**砂岩：**2点に亜円礫状を呈して、きわめて微量含まれる。

**礫石：**2点で検出され、試料No.7には少量～微量含まれるが、試料No.9ではきわめて微量存在する。試料No.7では、最大粒径が1.40mmで大型である。

**火山ガラス：**試料No.1、9に検出される。

**スコリア：**試料No.10に微量に存在する。黒色ガラス岩で、泡状の孔隙を伴う。おそらく、火山灰の一部として降下した火山抛物体が混入していると考えられる。

### c) 素地

基質(粘土部)はセリサイト質粘土鉱物を主要粘土鉱物とし、少量～微量の石英細片(0.02mm以下)を伴い、少量～微量の酸化鉄(赤鉄鉱)・酸化鉄結核を含有する試料が多い。

**粘土鉱物：**セリサイト質粘土鉱物が比較的多く認められる試料は、試料No.3～9の7点で、多量の鱗片状または長柱状のセリサイトが認められる。セリサイトは、鉱物学的には白雲母と同質の鉱物であるが、陶磁器等の素地を構成する鱗片状粘土鉱物に対して用いられている。セリサイトは可塑性が高く、陶磁器等では素地を構成する重要な粘土鉱物の一つであるが、高温焼成で加熱変化を受け、約900℃以上では非晶質化することが知られている。一般的に、セリサイトが中量以上残存する試料は、900℃以下の温度で焼成されたと推定される。なお、観察試料でセリサイト質粘土鉱物が多量に残留している試料は、含鉄質である特徴が見られる。

**酸化鉄・酸化鉄結核：**酸化鉄は、試料断面が赤味を帯びる8点(試料No.2～9)に多く含まれ、素地を膠結～着色しているほか、酸化鉄が凝結した酸化鉄結核としても存在する。粘土中の含水酸化鉄(褐鉄鉱)は、実験的には320～350℃の加熱で脱水し、赤鉄鉱に移転するため、焼成物中では結核状および鉱染状を呈する赤鉄鉱として存在する。原料粘土としての観点から、鉄分は比較的低温で素地を膠着し、焼成温度を低下させる効果が高い物質の一つとされている。

(2) 推定焼成温度

一般に粘上を高温焼成すると、その温度条件と化学組成に対応した鉱物が晶出したり(代表的な鉱物はムライト)、熔融・非晶質化などの現象がみられる。観察試料の焼成温度の推定にあたっては、次の現象について注目し、指針として適用した。

- ① 素地を構成する主要粘土鉱物のセリサイトが加熱変化(非晶質化)を受けていない試料の焼成温度は900℃と推定される。

角閃石が存在する場合、角閃石が800℃以上の加熱を受けると、酸化角閃石に変化することが知られている。これまでの実験結果では、850℃で弱酸化の状態を示すが、950℃の試料では強酸化の状態を示す。さらに高温で焼成した試料の角閃石は黒色鉄鉱物化し、角閃石として確認できない状態に変質する。なお強酸化した酸化角閃石が存在する場合は、950℃と推定する。

- ② セリサイトの一部は確実に加熱変化を受けているが、大部分が残存し、石英・長石類に加熱変化がみられない試料の焼成温度は900℃と推定し、セリサイトの残存量が中間的な状態に達した状態では900℃と推定する。

- ③ セリサイトの大部分は加熱により非晶質化しているが、石英・カリ長石・斜長石にあまり加熱変化がみられない試料は、1,150℃と推定する。ただし、斜長石が曹長石である場合は次項を適用し、さらに細分する。

- ④ 曹長石は1,118℃で溶化する。先述したように曹長石の加熱変化は単純ではなく、縁辺部非晶質化→褐色変化→針

表10 粘土薄片観察結果

資料No.	産地名	アーク名	産地名	部位	部位	Os	Kf	Ill	Ho	Ca	Op	Ch	Si	Ri	St	Mg	Ti	Si	Fe	Vt	Aul	S	Mt	Si	Gr	FeO	Pnc	Col	Dc	Ch	St	推定焼成温度(℃)
1	福川(2)外遺跡	D908	3号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	1,150~1,200
2	福川(2)外遺跡	D908	3号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	1,150~1,200
3	福川(16)外遺跡	EQ17	4号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	900
4	福川(15)外遺跡	EB17	4号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	900
5	福川(16)外遺跡	EB17	4号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	900
6	福川(16)外遺跡	EB17	4号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	900
7	種子長石産地	PA18	2号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	900
8	種子長石産地	PA18	2号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	900
9	伊豆山産地2号層	PA18	2号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	900
10	伊豆山産地2号層	PA18	2号層	曹長石	縁部	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△	1,200~1,250

注

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

Op:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石 Ca:斜長石 Os:曹長石 Kf:カリ長石 Ill:斜長石 Ho:角閃石

状ムライト晶出(疎～密)→中心部にムライトの二段晶出→全面的な針状ムライトの成長の順で途中段階では中心部に曹長石の残晶が認められる。この加熱変化の非晶質化～褐色変化の段階は、1,120～1,150℃と推定する。ただし、今回の観察試料中の斜長石は、曹長石よりもCaに富む中性長石または曹長石に相当し、曹長石より溶融温度が高くなるので、本項は適用できない場合もある。

- ⑤ 石英に高温クラックおよび部分的な溶融組織がみられ、カリ長石に軽微な溶融組織が認められるが、ムライトは生成していない。試料の焼成温度は、カリ長石の溶化状況により、1,150℃±または1,150℃+と推定する。
- ⑥ カリ長石が完全に近く溶化し、曹長石が非晶質化して周辺が褐色に変化している状態はムライト化の初期段階とみなされ、1,200～1,500℃と推定する。
- ⑦ ムライトの生成が確認される資料の焼成温度は、1,200℃±と推定する。この状態では、カリ長石は完全融解していることが多い。
- ⑧ 針状ムライトが密に生成されている試料は、1,250℃+と推定される。⑦と⑧の間は、1,200～1,250℃とする。

以上の判定基準に基づけば、今回の観察試料は、低温焼成グループと高温焼成グループの2群に分類される。

・低温焼成グループ

900℃-と判定される試料：No.3～9

・高温焼成グループ

1,150～1,200℃と判定される試料：No.1、2

1,200～1,250℃と判定される試料：No.10

#### 4. 考察

隠川(2)外遺跡の6点の試料に共通する胎上の特徴として、凝灰岩岩片を含むことがあげられる。また、そのうちの4点に、泥岩または珪化岩を含んでいる。これらのことから、今回の隠川(2)外遺跡の試料は、同じ地質学的背景を有する地域内で製作されたことが示唆される。五所川原市は津軽平野の中部に位置するが、津軽平野を構成する堆積物中には、岩木川やその他の河川などにより、弘前市南方の山地や岩木山などから砕屑物が供給されている。弘前市南方の山地は、新第三紀に堆積した凝灰岩(いわゆるグリーンタフ)や泥岩・チャートからなる中生代の堆積岩層が分布している(日本の地質「東北地方」編集委員会、1989)から、隠川(2)外遺跡の上器試料中に認められた岩片組成は、五所川原市周辺域で製作された可能性がある。ただし、現時点では五所川原市から半径何kmというような、具体的な特定はできない。

一方、窯跡の試料であるNo.7～10の4点は、いずれも凝灰岩を含むことで隠川(2)外遺跡の試料と共通する特徴を有するが、それらのうち持子沢B遺跡の試料No.7には単斜輝石と軽石が含まれ、砂田D遺跡の試料No.9にも単斜輝石や斜方輝石、軽石、火山ガラス、安山岩などが含まれている。これらの火山砕屑物に由来する鉱物片や岩石片の供給源は、五所川原市近傍ではおそらく岩木山であると考

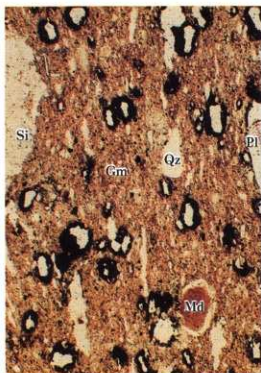
#### 隠川(2)外遺跡

えられる。今回の結果からみる限り、一つの窯跡でも複数種の胎土の製品が混在している可能性がある。隠川(2)外遺跡の試料とこれら窯跡試料との関係を考える場合、少なくとも岩木山由米の砕屑物が混入していない窯跡の製品は、隠川(2)外遺跡に供給されている可能性がある。

いずれにしても、現時点では限られた試料数での検討結果であり、検討すべき課題は少なくない。今後、分析例を蓄積することができれば、五所川原市周辺の古代の土器の製作・流通の実態について、より確かな考察が可能になるものと期待される。

#### 【引用文献】

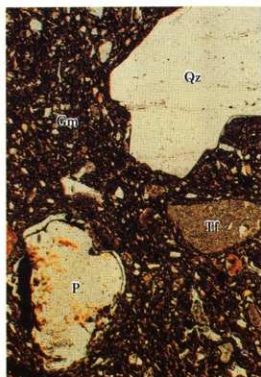
日本の地質「東北地方」編集委員会(1989)日本の地質2 東北地方, 338., 共立出版



1. 試料No. 1  
(隠川2)外遺跡 DN05 3号溝 埋土2層 壘体部



2. 試料No. 1  
(隠川2)外遺跡 DN05 3号溝 埋土2層 壘体部



3. 試料No. 2  
(隠川2)外遺跡 EO16 SK17 埋土2層 壘体部

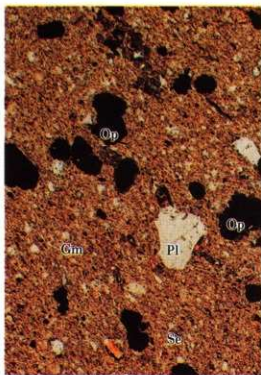


4. 試料No. 2  
(隠川2)外遺跡 EO16 SK17 埋土2層 壘体部

Qz:石英 Pl:斜長石 Op:不透明鉱物 Tf:凝灰石 Si:珪化岩 Md:泥岩 Gm:基質 P:孔隙  
写真左側は下方ポーラーのみ、右側は直交ポーラー下

0.2mm

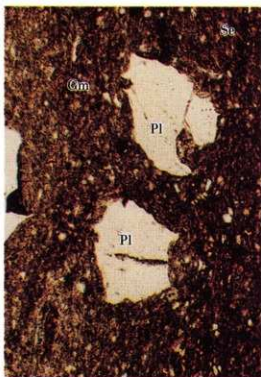
図版1 胎土薄片 (1)



5. 試料No. 3  
(隠川(2)外遺跡 EQ17 4号溝 埋土4層 坏 体部)



6. 試料No. 3  
(隠川(2)外遺跡 EQ17 4号溝 埋土4層 坏 体部)



7. 試料No. 4  
(隠川(2)外遺跡 ER17 4号溝 埋土1層 壺? 体部)



8. 試料No. 4  
(隠川(2)外遺跡 ER17 4号溝 埋土1層 壺? 体部)

Pl:斜長石 Op:不透明鉱物 Se:セリサイト Gm:基質  
写真左側は下方ポーラーのみ、右側は直交ポーラー下

図版2 胎土薄片(2)

0.2mm